

あきたの 文芸云第49集

応募枠拡大!!

秋田県ゆかりの方
からの応募が増え
ました。

応募総数 278 作品

入賞 58 作品

小説・評論 3 編

詩 11 編

短歌 98 首

俳句 112 句

川柳 70 句

エッセイ 4 編

グリーン賞

4 作品掲載

詩・短歌・俳句

「あきたの文芸」
第四十九集



あきたの文芸 第49集 目次

●小説・評論

最優秀賞
入選

無理です

M O K A
小池卯花

佐藤龍一

●詩

最優秀賞
奨励賞
奨励賞
奨励賞
入選
グリーン賞

巻雨のき貝
銘度の利加蝶

谷 恵美子
渡辺 正子
菅原 聖美

高橋 岑夫
鈴木 いく子
工藤 望

小林 康子
深町 一夫
十田 撓子
豊島 力子
秋仁 由紀

●短

歌

最優秀賞
奨励賞
奨励賞
奨励賞
入選

春の教室
八橋伝説
川と共稲穂

穂孕む稲穂
竹下 氣平
佐々木 ヨリ子
佐藤 榮悦
田口 友実

小林 瞭悦
照井 敬司
大山 文穂

石田 幸栄
貴志 白柵
塚本 佐市
千田 千佳
熊谷 すが子
佐々木 鏡子
佐藤 静子

グリーン賞

●俳句

最優秀賞
奨励賞
奨励賞
奨励賞
入選

グリーン賞

羽後天
三年合戦
後の旅
夏の書

種村聖巴子
上松ひろし
鈴木栄司
佐藤豊
杉江藍

進藤利文
片倉万葉子
秋野万葉子
田村陽子

和田仁
高橋遙
大橋風太
松井憲一
三浦静佳
岸部吟遊
柳川大亀

●川柳

最優秀賞
奨励賞
奨励賞
奨励賞
入選

幾曲がり
歳を重ねて
至福どき
希望から天使へ

佐藤豊
佐藤ちずる

加藤円心
谷口平
小畑寒文
齊藤一輪
石田幸栄

加藤円心
谷口平
小畑寒文
齊藤一輪
佐藤啓子
鷺谷凡葉

● エッセイ

奨励賞	奨励賞	奨励賞	奨励賞
終活の旅	五月の散歩道	明日に見たい夢	マルのこと
……	……	……	……
嵯峨雄二	小松紀子	皆川順子	坂本愛子

● 最優秀賞受賞のことは

……

● 選評

……

小説・評論	詩	短歌	俳句	川柳	エッセイ
渡辺修	石川悟朗	小林絢子	岡部いさむ	館岡稲風	柴山芳隆
加賀谷真澄	見上 司	加藤トシ子	木村登龍	荒川祥一郎	佐々木義幸
高橋 貢	寺田和子	佐々木 勉	森田千枝子	藤 咲子	羽田朝子

● あきた県民文化芸術祭2016「あきたの文芸」応募状況

● あきたの文芸 昨年度の入賞者と作品名

小說・評論

小説・評論

最優秀賞 無理です

大仙市 佐藤 龍 一

「地方創生について」がテーマの作文で「そんなのは無理です。」と書いた。どうせ他の奴らは実現度の低い綺麗事を書くんだろうな、と思った。

通勤通学ラッシュの電車の中、「ああいうオッサンにはなりたくないよな」と、男子学生がそこそ話している対象が、自分ではないことを祈った。

自分が高校生のと違って、どんなだったっけと思いついていたら、作文のことが浮かんだ。確かめちやくちや怒られたはずだ。何のために書かされた作文だったか忘れてしまった。でも、他のみんなは『研究大学を県内につくって、研究成果と関連がある企業を誘致し雇用拡大』とか『法人税を安くして県内に企業を呼び込む』とか、お前らほんとに同じ高校生なのか？

と思うほど立派なことを書いていた気がする。寝不足の頭で久しぶりに昔のことを考えていた。

「見ろよ、あのクマ。ゾンビかよ」

男子学生が押し殺した声で笑う。

クマってことは、俺のことを言っているのか。まだ二十五歳なんだけど。

電車が止まる。満員だった車内に人が詰め込まれる。圧迫された上に空気が薄くなった。さつきからくつついていたオッサンと更に密着する。オッサンの首元が見えた。

くそ。この脂ぎった首すじに噛みついてやろうか。そしたらパンデミックだ。ゾンビと化した俺とオッサンから逃げまどう人々が頭に浮かぶ。

大丈夫。今日だけの辛抱だ。今日を乗り越えられればプロジェクトは一段落する。しっかりと睡眠をとって、クマは消え、俺はゾンビではなくなる。

大学を出たあと、東京の真っ黒いIT会社に就職した。そこで待っていたのは、止まることが許されない歯車のような毎日だった。辛かったけれど、具体的な目標を見つけれないでいた俺にとって、四六時中何かに追われる日常は

ちようど良かった。

生まれは秋田県の港町。とにかく田舎が嫌だった。何にもなくて、何にもできない僻地が嫌だった。中学になった頃には絶対に都会の大学に進学してやると思っていた。

地元の大学への進学。地元での就職。

俺にとってそれはあり得ない選択だった。

小学校を卒業するまでは、当たり前のように「土崎神明社例祭」、通称「土崎港曳山祭り」に参加していた。その地に生まれた人間は祭りに参加するのが当然だったのだ。親戚の紹介でお囃子の会に入れてもらい、曳山の上に乗って太鼓を叩いていた。ただ叩いていけばいいわけではない。腕の上げ方やバチの運び方、一言で言えば、かっこよくなければいけない。奏でるだけでなく、魅せることも要求されるのだ。

寄せ囃子は祭りの空気を創り曳き子の士気を上げる。見物人を寄せ集め、普段は人気がない道路を人で埋めつくす。哀愁ただよう港囃子、あいや節は祭りの後の淋しさを連想させる。しかし、曳き子たちはよりいっそう熱が入るのだ。祭りが終わると、「次の祭りまであと三百六十四日だな」と冗談を言い合いながら日常に戻る。しばらくは、どこか遠くでお囃子

が鳴っているような気がして、ハッとするがすぐに気のせいだと気づく。

車輪に潤滑油としてかけられるガソリンはアスファルトに跡を残し、その匂いと染みで土崎の住民は夏のあいだ何度も祭りのことを思いだす。

高校にあがるまでは俺もそうだった。

中学にあがるとお囃子の会を辞め、嫌悪はいつしか祭りにまで及んでいた。祭りの二日間、普段どこに隠れているのか分からない若者たちが湧いて出てきて、オジサンたちは水分補給のように酒を飲んで盛り上がっていた。

祭りの日だけ異様に盛り上がる町に、妙な田舎臭さを感じた。普段もこれくらい頑張れないのかよ、と思ってしまう。こんなに疲れているくせに、祭りの日にだけ盛り上がってんじゃないか、と。

土崎の外に住む友達には「崎祭りやべえから」と矜持を持ったフリをしながら、徐々に祭りを避けるようになっていった。

プッシュとドアが開いた。圧が減って楽になる。降りる駅だった。ホームへ降りる流れが生まれる。流れからは少し離れていた。人をかき分けて必死に流れを目指した。

半年ぶりに休みをもらった。月曜日から日曜日まで、一週間の休みだ。プロジェクトの合間をぬって休む必要があるのか、どうしてもこういった休み方になってしまう。

真夏。アスファルトの照り返しで余計に暑くなった都会。休日の初日は雨だった。

部屋にこもっているとカビてしまいそうで、傘を持ってアパートを出た。当てもなく歩いていると、以前よく通っていたスタジオ兼CDショップに足が向いていた。

見慣れたドアを開ける。中に入るのは三年ぶりだった。店に入ると、CDや音楽雑誌が陳列されていて、奥がスタジオになっている。

他に客はいなかった。平日の午前中であれば当然だろう。音楽雑誌を斜めに読んで、CDの新譜コーナーをチェックする。レジを見ると店員はいなかった。CDを持ってレジへ向かう。カウンターにあるベルを鳴らすと、奥から「ハイ」という声が聞こえた。待っているあいだ店内を見渡す。

大学ではバンドサークルに所属していた。ライブでは有名なカバー曲ばかりを演奏していたお気楽バンドだった。

「あれ？ ビッグラディツスターのケント・

アラカワさんじゃありませんか？」

突然そんな呼ばれ方をしたので驚く。ビッグラディツスターは当時のバンド名だ。奥から来た店員の顔はよく知るものだった。

「えっ!? そういうあなたはビッグラディツスターのベース担当、コイイチ・コイケさん!？」

大学時代、毎日のように顔を合わせていたバンドメンバーだった。

「どうしたんだよ、ここで働いてるの？ 久しぶりじゃん」

「そうそう、店長に拾ってもらったんだよ。そういうお前は、まさかニートじゃねえよな。平日の昼間っからぶらぶらして」晃一は笑っていた。

仲が悪くなっていたわけではなかった。でも、卒業後はそれぞれ疎遠になってしまった。今みんなが何をしているのか全く分からない。い。

「休みだよ。IT会社でさ、半年ぶりの休みなんだぜ」

「うわー、社畜社畜 晃一は苦そうな顔をする。「そういうえば、ハルちゃんとは続いているの?」

晃一は、大学時代にマネージャーをしてくれ

ていた春子という女の子と付き合っていた。

「それがあ」と、くでくでと語尾を伸ばし、「じゃん」と言って左手を見せてきた。薬指には指輪が光っている。

「まじ!? 結婚!？」

「そうなのー。俺もそろそろ身を固めようかなって思ってた」

そんな歳だよな、と思った。

それからCDを買って店を出た。飲みに行く約束をしたけれど、具体的な日付は決めなかった。

まだお昼前だ。雨は止んでない。

本屋に行って、また音楽雑誌を立ち読みした。気が済むまで読んだけど、まだ十二時すぎだった。久々の休みなのにやりたいことがなかった。

雑誌を持ったまま兎一の言葉を思いだす。そろそろ、と言っていたけれど、まだ二十五歳だ。

焦るような歳ではない。しかし、生涯の伴侶を見つけた友人と自分の現状を比べてしまう。

雑誌を棚に戻す。何も買わずに店の出入口へ向かった。傘立てから傘を取ろうとしたが、差したはずのビニール傘がなかった。

「盗まれた…」

高校の頃は俺も盗んでたっけ。

他にもビニール傘が何本かあったけれど、俺のではなかった。傘は諦めてそのまま外へ出た。雨に濡れながら、実家にでも帰ってみるか、と思った。

新幹線で四時間。着くのは夕方だ。音楽雑誌と文庫本を持っていったけれど、落ち着いて読めなかった。思い立つように決めた帰郷だったが、高校を卒業してから一度も帰っていない。両親とは連絡を取り合っていたけれど、帰ろうとは一度も思わなかった。

腰の落ち着かないうちに秋田駅に着いた。ホームへ降りる。一番近い電車は四十分後に出発する。荷物が重かったので早く降りたかった。

男鹿線が発車するホームへ向かう。電車は発車時刻になっても席がガラガラだった。田舎の車掌は楽でいいよな、と思う。しかし、その分売り上げがないということだ。

十分ほどで土崎駅に着いた。学生時代は自転車を通っていた道をタクシーで帰った。

土崎港曳山祭りの二日目、各町内の曳山は土崎の南端にある穀保町に集まる。その穀保町に実家はあった。タクシーが穀保町の町内会館

の前を通る。会館前には作りかけの曳山があった。骨組みはできていて、雨除けのためのブルーシートがかかっている。

そこから少し進んでタクシーを降りる。この通りに全町内の曳山が集まり、人で埋めつくされるのだ。

実家は、通りから路地に入る奥まった場所にあった。十年ぶりの玄関は変わっていない。

「ただいま」少し大きめに声を出す。

家の匂いがした。ここに暮らしていた頃には気づかなかった匂いだ。

「はい」と声が聞こえた。母さんが出てくる。たちまち驚いた顔になった。

「ちよつと！ 帰るなら帰るって連絡ぐらいよこさないよ！」

「ああ、ごめん」そうだった。連絡するのを忘れていた。ボストンバッグを置く。

「なに、ごはんは？ 食べたの？」

「食ってない。なんかあるの？」

「うん、なんとかする」そう言って母さんは台所へ行った。

ボストンバッグは玄関に置いたままにして、居間にあがるとばあちゃんがテレビを見ていた。耳が遠いので俺が帰ったことに気づいてい

ないようだ。

「ばあちゃん、たがいま」大きな声で言う。

ばあちゃんは驚いて振り向いた。

「おやっ！ おやあ」と驚いた顔のまま立ち上がった。近づいてくる。「健斗、なした。おやあ大きくなって」

「身長変わってねえから」思わず笑ってしまった。でも、ばあちゃんの体は小さくなったような気がする。

「おじいさん！ 健斗お！ 健斗来たどお！」

ばあちゃんが叫ぶ。ばあちゃんは俺の腕を掴んでいた。そして、腕をさするようになって何度か「おやあ」と言っては俺の顔を見ていた。

裏口からじいちゃんが来るのが見えた。ゆっくりと履物を脱いでいる。俺と目があつて「おっ」という顔をした。

「健斗、おかえり」じいちゃんが呼ぶ俺の名は、健斗ではなくケンドーと言っているように聞こえる。

「たがいま」

じいちゃんはその一言だけを言って、ゆっくりとソファに座った。さつきまで植木に水をやっていたそうだ。父さんは会社から帰っていないようだ。

二階にある俺の部屋は少しだけ物が置かれていた。ほとんど当時のままだ。端っこにポストンバッグを置く。

「健斗、ごはん」と母さんに呼ばれて、この台詞も七年ぶりか、と思った。

なんとかかすると言っていたわりに、きちんと一人前が用意されていた。まるで来るのが分かっていたみたいだった。

母さんは俺の隣に座って、父さんのことや近所のこと、地元の同級生のことを話してきた。

それに、「へー」とか「そうなんだ」とか答えながら食べる。ばあちゃんは会話の内容を頑張つて聞き取ろうとテーブルに身を乗り出していた。じいちゃんはソファに座つたままテレビを見ていた。ばあちゃんはいつも通りだったけれど、じいちゃんはまだ静かだった。

食べ終わるとお腹が苦しかった。食べすぎてしまったようだ。食器を台所に置く。そのまま二階へ行こうとしたら、母さんに呼び止められた。

「おじいちゃん、今年の祭りに出ないんだって」

「へー、そうなんだ」

わざわざ呼び止めて言うことか、と思った。

「体の調子悪いんだって」

おとなしかったのはそのせいかな。

「でも、さつき植木に水やつてたんでしょ」

「うん、でも最近元気なのは確か」

母さんは食器を洗い始めた。蛇口をひねって水を出す。そのひねる音も、シンクに水が当たる音も、取り繕うようにわざとらしく聞こえた。

なんだ。どういう意味だ。だから俺にこっちに帰ってきてほしいって言っているのか。死にそうなわけでもあるまいし。父さんだっているだろう。こんな田舎町でまた暮らすなんて有り得なかった。

階段を昇って部屋に入る。ベッドに寝転んだ。やる事がなかった。こんな感じなら明日あたりには帰ろうかと思った。

学生の夏休みと違って日中に暇してる奴なんていない。久々に連絡して平日の夜に飲みに付き合ってくれるやつなんているのだろうか。まずは中学時代の友人に連絡してみようと思った。

「まじで、健斗じゃん。生きてたんだ」

「いつ俺の死亡説が流れたんだよ」

翌日の夜、秋田駅前の居酒屋に集まることに

なった。日中は部屋にあった漫画を読み返して、だらだらと過ごした。

中学時代にいつも遊んでいた三人に声をかけて、その内二人が来てくれた。一人はどうしても仕事が抜けられなくて「行けたら行く」と言っていた。

最初は少し緊張してしまっただけで、会話が始めれば何ともなかった。当時の続きが行われているだけだ。

「お前、成人式も来なかったからな。七年ぶりじゃん」

水泳部のキャプテンだった鈴木はすでに生ビールの大ジョッキを空にしていた。

「帰るんなら事前に言っとけよ。急すぎるだろ」

ソフトテニス部だった石井は烏龍茶を飲んでいた。乾杯前に「わり、俺酒飲めないんだ」と言われて驚いた。

鈴木と石井は県外の大学に進学して、地元就職していた。なんでそっちで就職しなかったのか聞くと、「やっぱり地元の方がいいじゃん」と鈴木が言った。石井も、当然だろうという顔をしていた。

「ところで、健斗は今何してんの？」石井が

言った。

「IT会社。一昨日から一週間、半年ぶりの休みなんだよ」わざと大袈裟に顔をしかめた。

それから俺の仕事の話になり、石井と鈴木も自分の仕事について話し始めた。石井は車の営業、鈴木は郵便局で働いているそうだ。最近の若い奴らは、車を買わない、年賀状を出さないと二人とも嘆いた。

「そもそも人がいないんだよ」と石井が言うと、「若者がいない」と鈴木が続いた。

鈴木はだいぶ酒が進んでいた。俺もいつの間にかビールを六杯飲んでいて。素面は石井だけだ。

「おい、大丈夫なのか秋田。俺らが死ぬまでは大丈夫かもって思ってたけど、無理なんじゃないの」目のすわっている鈴木が言った。

「人口減る一方だもん。俺らが四十、五十歳になる頃ってどうなってるんだかなあ」石井は水が溶けて水だけになったグラスを持ったまま言う。

「酔ってないお前が言うよ、深刻すぎるから止めろ」

「だって、事実じゃんか。なあ」石井は俺に同意を求めた。

「そうだな」

本当にそうだ。行政機関も手を打っていないわけではない。自発的に頑張っている人たちも確かにいる。ギャルが農業をやったり町起こしのイベントをやったり、たまにだけ全国ニュースで取り上げられたのを見たことがある。

それでも街に人がいなくなる。この地に魅力がないからだ。緑が豊かで、空気が綺麗で、川が綺麗で。それってつまり、何も無いってことだ。

「じゃあ秋田出ればいいじゃん」
だから俺は東京へ行った。どうしようもないこの街を出た。

石井と鈴木は、「いやあ」などと言って、拗ねたような顔をしていた。

「別にお前ら奥さんや子供がいるわけじゃないんだし、県外に行けばいいじゃん」

それは、俺にとって当然の帰結に思えた。どうして二人がこの選択をとらないのか分からない。今まで秋田はもうダメだという話をしてきたのに。

「地元の友達もいるし、家族もいるし、居心地いいんだよな」と石井。

「なんだかんだいって、俺たち秋田が好きなんだよ」と鈴木。

俺が黙っていると、「でも東京に行ったお前が羨ましいよ」と付け足すように鈴木が言った。

沈みゆく船に乗っているようなものだと思う。仲間がいるから、居心地がいいからと危機感を鈍化させて外へは出ようとしない。沈んでいくのを実感しながら「きつと何とかしてくれる」と思い続けているのだ。もしくは、「まさか沈むわけがない。ちょっと傾いているだけだ」と。

こんな危うい場所に居続けたいとは思わなかった。悪いことをしたとは思っていない。生き残るためだった。

「ところで、中一のとときの先生がさあ」と石井が意図的に話題を変えたのが分かったので、おとなしく話にのつかる。

久しぶりに会った友人たちと変な空気にはなりたくなかった。

昼頃、頭痛で目が覚めた。目の奥が痛くて胃もむかついていた。こんなに気持ち悪いのは久しぶりだった。

日付が変わる頃に飲み屋を出たらしい。鈴木と一緒に「次へ行こう」と騒いでいたのは覚えているけれど、どうやって帰ったのか記憶がなかった。「俺が送ったんだよ」と石井が言っていたけれど何も覚えていなかった。

まだ体を動かす気になれない。水を飲んで、またベッドに横になった。スマートフォンアプリで遊んだり、短い昼寝を繰り返しているうちに夕方になっていた。その頃には気持ち悪さはなくなっていた。

階段を降りると母さんが夕飯を作っていた。まだもう少しかかりそうだ。

夕飯ができるまでの持て余した時間。何かを始めるには短くて、待つには長い。ぽつかりと空いた時間だ。まだ実家にいた頃、この贅沢な時間を散歩して回るのが好きだった。

家を出て、昔よく歩いた道をたどる。見覚えのあるコンクリートの塀は黒ずんで弱そうに見える。虫を捕りに行っていたお寺へと続く石階段は、真新しくなっていて周りから浮いていた。

道の向こうから人が歩いてくる。知っている人だったら面倒だなど思ったけれど、近づくにつれ知らない顔だということが分かった。しかし、そのまますれ違おうとすると「健斗？」と

名前を呼ばれた。しつかりと顔を見ても誰か分からない。「うっそ、健斗じゃん。俺のこと忘れたの？」と言われて、睨むように顔を見ると誰かの面影を見つけた。

「大志？」

飲み会には「行けたら行く」と言っていた一人。同じ穀保町に住んでいて幼稚園から高校まで一緒だった。

「おめよお、久しぶりだよ。高校以来？」

一緒にいた頃にはなかった訛りを感じた。

「いやその前に、お前太りすぎ」

喋り方も風貌も、地元のとつちゃ”だった。

「今八十二kgある」

二人で笑った。

体が大きくなって訛り混じりの話し方になったこと以外、大志は何も変わっていないかった。

お互いの近況報告を済ませると、この後の予定を聞かれた。何も無いことを伝えると、「ちょっと来い」と言うので付いていく。

町内会館に連れてこられた。会館の前には作りかけの曳山があって、平日にも関わらず作業をしている人がいた。

こんな場所にいたら知っている人に会ってしまふ。地元に出戻りしてきたと思われるのが嫌

だった。しかし今更帰るのはバツが悪い気がした。

「ああ、大志くん、ご苦労さん」

作業をしていた五十代くらいの男性が大志に声をかけた。見たことあるような顔だったが名前には知らない。

「伸さん、平日だったのに一人で何してらんだすか」

「家さいだってよお、暇でなかもねえんだ。

それに、ちよつと遅れてら気がして。一人でやれることなんて、僅かだどもな」そう言ってから伸さんはチラツと俺の顔をうかがった。「そちらのあんちゃんは？」

「あつちの」と言つて家のある方向を指さす。

「荒川の家の長男です」

「荒川のおんちゃんか。でつけくなつたなあ」

伸さんは、そんな歳の差でもないのに孫の顔を見るように目を細めた。俺のことを知っているようだった。

子宝という言葉があるように、子は愛情をそそぐ対象であると同時に家の財産だと考えられてきた。そして、その財産はみんな守るものだった。伸さんも、当然俺も生まれるもつと前、村という単位で暮らしていた時代はその色

がもつと濃かつただろうと思う。俺はもう「子」という歳ではないけれど、親にとつてはいつもまでも「子」であり、若者もやはり財産だ。人口減少が止まらない秋田県にとつて、若者の流出は財産の流出で、増やさなければいけない財産の源がなくなっていることを意味している。この田舎町に住む人々は、自分たちの財産が減つていつているのだということに気づいていてのだろうか。

「日曜にみんなで曳山作るから、あんちゃんも来てくれ」伸さんはニコニコして言った。

「すみません、明日明後日あたりに帰るんですよ。休みも日曜までですし……」前半はまだ迷っていることだったが、後半は嘘ではなかった。

「んだが。わげ者一人いれば違うんだどもな」

「伸さん、そんなこと急に言われたつて、健斗も困るだろ」

伸さんは残念そうな顔をしていた。悪いことをしたかなと思つたけれど、せつかくの休日になんか力仕事を手伝いたくなかつた。

「今日、会館で飲むんだども、来ねが」伸さんは、残念そうな顔をパツと隠して、テカつた顔で子供のようにニコニコして言った。

「え、今日ですか。この間平日に飲んだと

き、なかなか終わんねがつたじゃないですか」大志は迷惑そうな顔をしていたけれど、心底嫌そうには見えなかつた。

俺に話が振られなければいいな、と思ひながら話を聞いていると「健斗もどうだ？」と大志に聞かれた。今日の予定がないことは既に話してしまつている。気は進まなかつたが、他にやりたいこともなかつた。

一旦家に戻ると夕食ができていた。少しだけ食べて会館へ向かつた。会館内は入口すぐに台所があり、引き戸の向こうには二十畳くらいの和室があつた。和室には長テーブル四つが置かれ、座布団が敷かれていた。

酒もつまみも全て伸さんが近くの酒屋で買ってきていた。大志と伸さんは飲み始めていて、さつきはいなかつたおじさんが一人増えていた。

「あつちの荒川のおんちゃん」と伸さんが言うのと、「ああ、荒川さんとこの」と言つて、優しい顔をしていた。

乾杯もなく始まつた飲み会は、初め新参者の俺の話が中心になつた。東京の大学へ行つてそのままあつちで就職したこと。久々の連休でこつちに帰つてきていること。俺が話している

間、伸さんともう一人のおじさんは「大したもんだ」とか「立派なもんだなあ」とか、しきりに褒めてくれた。

一通り話し終えると、伸さんとおじさんは二人で盛り上がり始め、自然と大志と二人で話す形になった。

会館に来る前における程度お互いのことは話していた。地元の大学に進み、地元のJ Aに就職した大志は係長という役職を得ていた。結婚はしていないが彼女はいるそう。

仕事の愚痴を交えながら話す大志は幸せそうに見えた。

知らない声が増えていた。伸さんの隣にもう一人おじさんが座っていた。会館の盛り上がり誘われて近所のおじさんが集まってくるようだ。最初の人数に対して長テーブルが多かったのはそのためか。時間が経つと二人二人と徐々に人が増えていった。

「平日からよくこんな風に飲めるよな」大志は呆れ顔をしていた。しかし、その呆れ顔は小さく笑っている。

「元気だね」

それに楽しそうだった。皆、定年をむかえた年には見えない。きっと会社ではそれなりの地

位にいて、明日も朝から仕事に向かうはずだ。

「東京ってどんなもん？」大志は言った。

「案外つまんなかった」それは心のどこかで思っていたことだった。初めて口に出してしまった。

「なんで？ いろんなものがあって便利で楽しそうなもんだけどな」大志はこつちを見て言った。

「そうだけど、俺が悪かったのかな。都会に行くのが目的で、行ってからやりたいことが特になかった」

「帰ってこないの？」

「うーん、でも、一回都会を経験しちゃうと田舎はちよつとなあ」

「なんだよ。結局どつちがいいんだよ」

声があがった。俺と大志は声があがったほうを見る。また一人、顔だけは知っているおじさんが入ってきた。

「俺たちもあんな風になると思うか？」大志は盛り上がるおじさん達を楽しそうに見ている。

「あんな風って？」

「仕事の前の日だつてのに、町内会館に集まって酒飲んだりさ」

俺たちが五十歳になったとき、この光景の一

員になっているだろうか。

「いや、ならないだろ。集まるだけの同世代がないしさ」

大志の顔を横目でうかがうと、楽しそうな表情のまま「だよな」と呟いていた。

「東京の人って冷たい？」大志が言った。

「冷たいってより、無駄な人間関係がない」

それは東京に住み始めてすぐに思ったことだった。近所だからって、よく顔を見かけるからって、その人と関係を築く必要がなければやり取りは生まれない。

「それって冷たいってこと？」

「そうじゃなくて、合理的なんだよ」

過度な干渉をし合わないことで東京は回っていた。あんなに人が多いところで、いちいち他人と接点を持っていたらキリがない。生活がスムーズに運ばれるために、干渉を避けて過ごしているのだ。

「じゃあ田舎つてのは効率が悪いんだな」

気を悪くしたのでは、と心配に思ったが、大志は笑っていた。

「東京みたいな都会は、そうしなきゃ上手く機能しないんだろうな。反対に田舎は人同士が密着してなきゃ機能しないわけだ」大志が言っ

た。納得しかねたので黙って先をうながす。

「機能しないっていうか、都合が悪いんだろう。ただでさえ人がいないだろ。密着したコミュニケーションがあれば、お年寄りに何かあれば気づくし、子供たちもみんなで見守ることができる」

「協力し合うために仲良くする必要があるってことか」

「その結果がアレだよ」

大志が見たほうを見て、吹きだしてしまった。いつの間にか会館にはたくさんおじさんがいた。その分長テーブルが増えたせいで端っこの席は少し遠くに見えた。その端っこの席で、背の小さいおじさんが一人、口をありったけ寄せてひよつとこのような顔をしていた。その向かいに座る首にタオルを巻いたおじさんは般若のような顔をして下顎を突き出していた。周りのおじさん達はそれを見て笑うわけでもなく、真剣にその様子を見ていた。

「なにあれ」意味は分からなかったが面白かった。周りのおじさん達が真剣なのが余計に意味が分からない。

「分からない。いつも始まるんだよ」大志も笑っている。

少し見ていると、ひよつと顔が崩れて普通

のおじさんの笑い顔になった。それが合図だったかのように周りもどつと笑った。

「ここに生まれて、ここで育って良かったと思ってる」大志の顔は真剣だった。

向こうではおじさん達が笑っている。

「俺はこの田舎町を守っていきたいんだ」

俺はという言葉が強く聞こえ、耳に残った。

「おー」と盛り上がる声が聞こえた。伸さんが車のタイヤのゴムを両手に二つずつ持つてきた。

「ごしゃがれるから止められて」また周りを謝んねばね「それやればうるせくなるんだよな」

また何かが始まるうとしていた。文句を言いながらおじさん達も乗り気だ。

和室の奥のほう、神棚がある下のスペースにタイヤが四つ置かれた。こちちから見ると一番右側のタイヤは重ねた座布団の上に置かれ、他の三つより高い位置にあった。

伸さんはまた部屋を出る。戻ってきたとき両手にすりこぎのような棒をたくさん持っていた。

「あつ」

棒を見て、何をしようとしているのか分かつ

た。棒はバチでタイヤは大鼓だ。高い位置にあるのが大太鼓だ。

伸さんとひよつとこ顔をしていたおじさんが、バチを持ってタイヤの前で構える。向かって右側に伸さん、左側にひよつとこおじさんが座る。

ひよつとこおじさんがテンポよくタイヤを叩きだした。下太鼓だ。一定のリズムが刻まれる。

それに合わせて、伸さんも体の前の二つと高くあげられたタイヤを叩き始める。こちちが上太鼓だ。

「ほらつ」「そらつ」「じゃつさあ」
笛がない分、周りが掛け声で囃し立てる。

会館に響くのは、タイヤを叩くテチテチとした音と男の声。祭りの空気が出来上がり、その中でタイヤを叩く伸さんの姿は勇ましかった。

子供の頃に聞いたお腹に響く太鼓の音を思いだした。あのとき、まだ小さかった体が共振して、全身が震え続けた。

伸さんが何かを叫んでいた。男たちの掛け声がよく聞こえない。

大志が俺の腕を掴んでぐいってと持ち上げた。驚いて顔を見ると「行けよ」と口を動かした。伸さんを見ると、頷きながら目で俺を呼ん

でいた。俺が太鼓の会に所属していたことを知っていたようだ。

立ち上がってゆっくり近づいていくと、誰かに背中を叩かれた。「じゃっさあ」とわざと俺の前で叫ぶ人もいた。バチが手渡される。皆盛り上がった。

下太鼓に入ろうとしたら「こっち！」と伸さんが叫ぶ。下太鼓を叩いていたひよつとこおじさんも「行けつ」と叫んでいた。

伸さんが叩く上太鼓へ入り、音が途切れないように交代する。

あとは体が覚えていた。体の前にある二つのタイヤを叩き、高くあげられたタイヤを叩く。本物の太鼓と違い反発がない分、腕を引くときに力を入れた。右手は綾をつけて空中でひねる。

おじさん達が即興で創った祭りの空気。その中心で俺は太鼓を叩いている。皆、俺を見ていた。頭の中では本物の太鼓の音が響き、「じゃっさあ」という掛け声が何倍も多く聞こえた。

心地良い感覚だった。ここにいる男たちの意識は、祭りの空気に溶けて一つになっていた。まだ祭りが楽しかった頃を思い出す。大して仲良くない人とも仲間になれた。同じ土崎の住民

として祭りを楽しむことができた。これが祭りというものか。一体感が気持ち良かった。

汗だくになった俺が交代して大志の隣で余韻に浸っていると、みんなで作った小さな祭りは呆気なく終わった。

大志と二人でおじさん達の熱気を遠くから眺めていると、般若のおじさんがポケットから携帯電話を取り出した。口元が「あばだ」と動いたように見えた。電話のために会館を出たかと思うと、慌てて帰ってきた。両手で大きくバツテンを作って、タイヤの周りの人だかりに突っ込んでいく。

掛け声が止んだ。「あばがってごしゃがえだ。向かいのおえの家まで聞こえるぞっ」

皆、しまった！ という顔をする。全員表情があまりにも一緒で笑ってしまった。そして、皆同じようにシユンとしていた。

そのままお開きとなった。おじさん達の酔いは醒め、テキパキと片付けた。誰かが「また菓子折りだ」と言った。「こういう日の次の日は、みんなで作ってまわるんだ」と大志が説明してくれた。

今日が初めてではないようだ。良い大人のくせに、と呆れたが、自分も騒ぎに加担していたことを思いだして申し訳なく思った。

次の日もその次の日も東京へは戻らなかった。ぐだぐだと過ごして土曜日になった。明日は日曜日か、と眠りについて、今朝、騒がしい音で目が覚めた。廊下を走る音が聞こえる。玄関が開く音。母さんが大きな声を出している。徐々に頭が冴えてきた。普通じゃないな、と思ったあたりで急に静かになった。音がなくなると眠気が返ってくる。遠くでサイレンの音がした。

もう一度目が覚めると家族がいなかった。朝の九時。午後の新幹線で東京に戻ることになっていた。

家族が一人もいないことに気づき、すぐに朝の出来事を思いだす。

騒がしい家族。サイレンの音。

マナーモードにしてあったスマートフォンを探す。母さんからの着信が五回あった。誰かが病院に運ばれたに違いない。きつとじいちゃんだ。調子が悪いと話していた。どうして二度寝なんて。

慌てて電話をかける。六コール目でつかなかった。

「もしもし？ おはよう」予想より呑気な母さんの声。

「どうした？ 誰がどうなったの？ じいちゃん？」

「おじいさんだけど、別に大丈夫だった。組合病院だけ来なくても大丈夫だよ。私たちも帰るし」

「何言ってるんだよ、行くよ。何号室？」

「ああ、そう。七〇一号室。お腹壊したただけだよ？」

「行くってば」

救急車で運ばれるなんてただ事ではない。

タクシーを呼んだ。寝癖はキャップで潰してタクシーに乗り込んだ。

病院に着くと急いでエレベーターに乗る。七階に着いた。部屋を探すとすぐに七〇一号室を見つけた。

四人部屋の窓側のベッドにいたじいちゃんはいつも通りだった。母さん達はいない。

俺が声をかけるよりも先に「おめ、何で来た？」と聞かれた。「タクシー」と答えると、「じゃえんこ勿体ねえごとすんな」と怒られた。

「じいちゃんが救急車で運ばれたって言うから」責めるような口調になってしまう。

「ただの糞話まりだ」

「は？」

「便秘」じいちゃんは怒った顔をして言った。

恥ずかしさを隠すために、わざとそんな顔をしているように見えた。

「そんなことで救急車呼ぶなよお」

ベッドの横にあつた丸椅子に座る。少しの間二人とも黙っていた。他の患者の布団の擦れる音と、たまにするじいちゃんの空咳の音だけが聞こえた。

「おえも歳だからよ」

じいちゃんの顔を見る。もう怒った顔は作っていない。足の先を見るような表情だった。

「ただ事でねえど思うくらい腹痛めんだだよ」

じいちゃんは昔、祭り男だった。外仕事をしていて冬でも日焼けの黒さが抜けなかった。夏になるとエンジンがかかり始め、ただでさえ元気なのに祭りの二日間は更に元気になった。他の男たちと同じように、真っ黒な肌に汗を光らせて酒だけで水分を補給をしていた。

そんなじいちゃんが今年の祭りは出ないと、母さんが言っていた。

もうすぐ祭りが始まるというのに、目の前のじいちゃんは白い清潔なベッドの上でおとなしくしている。

「わりがった。驚かせて」

「いいよ。俺が早とちりして慌てただけだ」

もうお腹は痛くないそうだ。浣腸をしたら治つたらしい。一応検査入院をして悪いところがなければすぐに退院できるそうだ。

大したことがないと分かって安心する。そろそろ帰ろうかな、と思っていると、じいちゃんが話し始めた。

「健斗、祭りは出ねのが」

「ああ、今日の休みが終わったら、しばらく休まないから」

「そうか」と言って、じいちゃんは黙った。

病人の体に障らないように病院内のエアコンは弱く効いていた。急いで来たせいで上がっていた体温も落ち着いて下がってきた。窓から見える青空を見て、天気が良いことに気づく。

「曳山、大丈夫だべが」

「何が？」

じいちゃんが何を心配しているのか分からなかった。

「わげ者だけでやっていけるべが」

自分がいなくても曳山が運行できるのかを心配しているようだ。

「伸さんたちがやってくれるでしょ」

数日前の会館の出来事を思いだす。伸さんたちは「わげ者」ではなく、おじさんだったが、じいちゃんにとってはまだ「わげ者」だった。「んだどもよ、二十年後、三十年後、休みの日にわざわざ曳山を作ってくれる人いるべが」

二十年後、伸さんたちは七十代。俺だって五十歳に近い。そのとき、町内にはどれくらいの人かいて、そのうちどれくらいの人が祭りに参加するんだろうか。

他の町内よりも一際大きくて重い穀保町の曳山を作って、それを引つ張ることができるだけの曳き子はいらるのだろうか。

もしかすると、無理かもしれない。

じいちゃんのように祭りに思い入れはないけれど、当然のように続くものだと思っていた伝統が途絶えたところを想像して、淋しくなった。

「何とかさねばねえのは分かるけど、なんとせばいいんだべな」

これは穀保町だけの問題ではない。他の町内にも言えることだ。更に言えば、秋田県全体に言えることだ。

「なんとせばいいんだべ」きつと大勢の人がそう思っている。実際に何とかしようとしている人もいる。しかし、多くの人はその答えを見つけれないでいる。俺は見つけようとすらしなかった。無理だと諦めて故郷を出ていった。そういつた選択をする人が多くなればなるほど、どんどん無理に近づいていく。

「とりあえず、元気になってまた祭りに出ればいいじゃん」

「んだな」

そう言っつて、じいちゃんは笑った。ふわつと、孫を見る顔で笑った。

病院食が運ばれてきた。もう十二時だ。午後四時には、あつちへ帰るために秋田駅に行かなければならない。じいちゃんに別れを告げて病院を出た。帰りはバスを使うことにした。旧国道にある家から一番近いバス停で降りる。

会館に行きたかった。今日は伸さんたちが曳山を作っているはずだ。遠回りをして会館に向かう。会館の前に人が集まっているのが見えてきた。その中に真剣な顔をした伸さんを見つめる。周りにはひよつとこおじさんも般若のおじさんもいた。

「こんにちは」

おー、と声をあげてみんなが迎えてくれた。

「手伝つてげ」と伸さんが冗談のように言う。

「はい」と答えると、少し驚いてから、「じゃあそこにある木切つてけれ」と指示をくれた。

力仕事や細かい作業とは無縁だったので指示をもらつても上手くできなかった。しかし、俺が手こずつっていると、近くに誰かが笑つて教えてくれる。

「え、健斗じゃん。何やつてんの？」

慣れない作業で汗だくになっていると、大志が現れた。両手にはレジ袋を持っていて、中には飲み物が入っている。

「何つて、見りや分かるだろ。手伝つてんだよ」

「そりや分かるけど、なんでまた」

大志はめちやくちや驚いていた。そんなに驚くことはないだろうと思う。

「なんていうか、地方創生だよ」

大志は驚いた顔を崩して笑つてくれた。

入選 女ともだち

大館市 M O K A

香奈は都会が似合う女だ……と自分では思っているらしい。流行の服を着こなし、頭の先から足のつま先まで着飾るのが好きだ。もちろん化粧にも金をかける。

「自分にお金をかけることが、大きな魚を釣り上げるためには必要なの。投資よ、自分への投資」そういつて、ウインクする。

「じゃあ、わたしは田舎の似合う女だな。ブランド物は高すぎて買う気にもなれないし、家賃払ったら高い物なんて無理、無理。第一そんな物を持つても似合わない」

「でもね、香奈。いくら着飾っても会話でぼろが出るんじゃないの？」

「大丈夫よ。『えーっ、そうなのおー、知らなかったわあ。すっごーい』これでバッチリよ。隆子も効き目あるからやってみたら」

電話口で香奈のあっけらかんとした言葉が返ってきた。隆子がそんな言葉を使いそうにないことを知っていて話していることもわかってきた。

「そういうものなのか、男って。香奈のように甘えた声で『すっごーい』なんて言われたらイチコロなのか」

ベッドの上に座ったまま、切れた携帯を置き隆子はつぶやいてみた。「えーっ、うっそー。しんじらんない。それってすっごくない？」自分で言っていて気持ち悪くなった。絶対似合わない言葉だらけだ。よもや自分がその言葉を使う日が来るとは想像できなかった。

香奈と知り合ったのは中学の部活を通じてだった。隆子自身それまで運動は苦手だと思ってきたが、「隆子、バスケットやらない？ 隆子の背の高さなら絶対バスケットに向いてるよ。香奈はもう小学校の時からミニバスやっててお手の物」と言いながら、入学したその日に声をかけたのが香奈だ。他校からやってきた香奈は長い髪をポニーテールにしている小柄な体に可愛い雰囲気満載だった。

「バスケット？」
「そう、隆子だったら絶対できるって」

これまで言葉を交わしたこともない相手に突然「隆子」と呼び捨てられていたが、少しも違和感がなく、まるで長年の友人のような打ち解けようだった。香奈には相手の懐にスッと入

り込む不思議な魅力があった。ふたりはそのままバスケットに入り、一緒に行動することが多くなった。背の高い隆子と小柄な香奈、おまけに高島と小島という互いの名字がその姿にぴったりだった。ふたりがいると凸凹コンビだと陰口を言う子もいたが、二人のバスケット能力には周りも一目置かずにはいらなかった。

ボールを取るのが好きだという香奈の動きは半端じゃなかった。センターガードの位置的に的確に守り、守っては相手のちよっとした隙にボールを奪い取ってゴール下に走った。色の白い香奈が機敏に動きまわっているのを見て、ちよこまかと動く二十日鼠のようだと隆子は思った。隆子は香奈のパスをもらおうとシュートがしやすかった。香奈にはボールコントロールに天性のセンスがあったらしい。逆に隆子がリバウンドを奪ってパスを出すときには、ちょうど空いた場所に香奈が待ちかまえていることが多かった。まるで隆子の次の動きを予見したかのように。皆は香奈の動きに舌を巻いた。努力の隆子に天才の香奈、後で香奈が勝手に吹聴しているのを耳にした。相変わらず自信たっぷりな香奈。それは大人になった今も変わらない。

隆子は背の高さが気になって自然と猫背に

なっていたが、

「隆子、もつとピシッと背中伸ばしたら？ 原
始人みたいだよ。せつかくモデル並みのスタイ
ルなのにもつたないじゃん。香奈なんか
かなりたくたつてなれないんだからね」

香奈があるときケラケラ笑って言った。隆子
はハツとした。女らしくない、可愛くない、な
いなくしだしばかり思っていた。それが歩
き方や姿勢に出ているのだ。香奈がこんな体型
を羨ましいと思っている？ 隆子はこれまでの
香奈の言動が、その小さい体を精一杯魅力的に
魅せるために熟考した究極の結果なのだと理解
した。香奈なりの処世術かあ…… そう思うと
天才肌だとはかり思っていたが、努力家なのか
もしれない。

部活帰りの夏の夕暮れは、東の空が濃い群青
色をだんだん色濃くしていくのに対し、西の空
はまだその一角が日中の青空の余韻を残し、オ
レンジ色を山の稜線に見せている。黒い小さい
塊を見せて二羽の鳥が視界の端から端を横切っ
ていく。その伸びやかな動きを見ているだけで
心が広がっていく気がする。空を見上げながら
他愛ない話をして歩いているこの瞬間、こんな
何気ないことが今しか味わえない大事なものに

思えてきた。もう隆子の背中では猫背ではなく
なっていた。

香奈との腐れ縁は、社会人になっても続いて
いた。人には自分にはないものに惹かれる。香奈
の天然な部分は、隆子には無い。隆子はどちら
かという石橋を叩いてわたる慎重さがある。
香奈に言わせれば、隆子のそういう辛気臭いと
ころがもてないのだという。逆に隆子にしてみ
れば香奈が変な男にひつからないかとハラハ
ラするのだが。

香奈は某大手の受付をしている。可愛らしい
アイドル顔にスレンダーでいて出ているところ
は出ているというボディ、全くもって神様は不
公平だ。香奈はせつせと合コンに励んでいる。
香奈の条件は金持ちかどうかだ。香奈に言わせ
れば、若いうちは格好いいと思っても年をとれ
ばその姿を維持できる男なんてほんの数パーセ
ントにすぎないのだとか。その点、女は自分の
容姿を維持するのに金をかけて努力する。その
努力も男の金が無くちゃできないしね、男には
努力する時間はないでしょ？ ということらし
い。まっ、それも香奈らしい考えだといえどそ
うなんだけどね。

そんな香奈だから待ち合わせの場所に連れて

きた男に驚かされるときがある。そのときの相
手の男の反応は決まって同じだ。隆子と香奈を
見比べてキョトキョトする。男みたいな女と可
愛らしい女がなんで？ ということらしい。香
奈が屈託のない笑顔を見せて

「隆子とは中学以来の親友なんです。バス
ケットをやっている。これでも二人は注目され
たんですよ」と言う。

男はなるほどと言った顔で、満足気に頷く。
自分が選んだ女の価値を値踏みするような顔、
それも何度も経験済みだ。隆子は香奈の語尾伸
ばしを聞くと大の大人がいまさらそれはないで
しょ、と思うのだが、それが甘え上手な女とい
う好印象を与えていると香奈は信じきってい
る。通用しない男も世の中にはいるだろうに。
いや、引つかからない男がいてほしいという一
種の願望だ。ふと三十、四十になった時の香奈
を想像してみた。語尾伸ばしをしているだろう
かと。いや、仮にやっていないとしても自分と
は対極にいるだろうなと思った。

それはその日だけ妙に秋風が吹いているよう
な肌寒いお盆過ぎの日だった。香奈からの連絡
を受けて隆子は、半袖のシャツにカーディガン

を羽織って向かった。途中、道行く人はみな寒そうな顔をしていた。街がいつぱんに秋の空気に包まれていた日だった。

隆子は、この合コンに人数合わせのため呼ばれたとはわかっていた。早々と抜け出そう。突然の連絡、こっちの予定なんておかまいなし。といったも予定が無いってこと向こうはすっかりお見通し。

最近オープンしたという店は二階にあった。ドアを押すと、案内広い店内に観葉植物が所狭しと置かれている。これが香奈が言う流行りの店？ 香奈のおしゃれ感覚が隆子にはときどき理解できない。そんなときは「香奈は香奈。自分自分。人間みんな同じだったらこの世界に世界が成り立っているのよ」と思うことにしている。大きな楕円形の葉の陰にそのメンバーたちはいた。香奈の賑やかな声が辺りにピンク色の筋をいくつも作っている。今日はいつになく力が入っているな、そう思いながら「遅くなりました。高島隆子です」と、軽くお辞儀をしました。香奈が指さす席に腰掛けた。総勢八名だった。向かいの席の男性が「香奈さんとは中学時代からの親友なんですよ」と話しかけてきた。隆

子が顔を向けると、短髪のきりつとした印象の男性がいた。

「はじめまして、溝口卓也です。香奈さんとは同期入社なんですよ」

しばし彼と他愛ない会話をしていると、向こう端にいた香奈がつと立ちあがってきて、隆子の耳にささやいた。

「ねえ、ちよつとトイレに付き合つて」

隆子が怪訝な顔をしながらついてくと、居酒屋にしては結構広いそのトイレの洗面台の前で香奈が言った。

「隆子の向かいの卓也くんどう思う？」

「ん？ なかなかの好青年じゃないの」と答えると、勢いよく

「でしょ、でしょ？ だから隆子、お願い、卓也くんにわたしの印象よくしてくれない？」と言う。「分かった、分かった」と首を振り、苦笑いをして席に戻った。

隆子は卓也に香奈のほほえましいエピソードを紹介して可愛らしさをアピールすることに徹した。卓也も「へえ、そんなことがあったんだ」と少し意外な顔をしながら聞いていた。話していくうちに、この人は今まで会った男性とは違うなと感じてきた。相手の目を見て話を聞

くし、隆子と会話のキャッチボールが出来ていた。なによりも屈託無く笑う顔が眩しい。こんな風に思える男性、今までいなかっただな。

お開きになり、会計の間、他のメンバーは外に出て待っていた。外は更に寒さが強まった気がした。すぐそばにいた卓也が耳元で「隆子さん、番号教えてくれるかな」と言った。隆子は何秒間か過ぎて、ハツとした顔で急いでバッグの中から青いカバーをつけた携帯を取り出し、教えた。「メルアドもね」と言われ、それもまた教えた。まさか卓也から聞かれるとは思ってもしなかつた。少し離れた場所でふたりをじつと香奈が見ていた。

いつもの店に寄って仕切り直した。香奈たちに手を振ると急いで向かった。長身の隆子がスツと背を伸ばして歩いていく後姿は颯爽としていた。今しがた会った卓也の人懐こい笑顔がふと頭をよぎった。香奈が目をつけているというのを思いだす。危ない危ない、香奈に文句をつけられたら怖いからね、と心の中で苦笑いした。

昔、男子バスケットキャプテンが好きになり、香奈に打ち明けた。するとなんと次の日に香奈はキャプテンに打ち明けて二人は付き合いだし

たのだ。隆子はシヨックだったが、何日もしないうちに二人が別れたことを知った。香奈に聞いたら「あいつ、見かけ倒しだよ」と言った。何が見かけ倒しなのか不思議に思ったが、それからしばらくしてキャプテンが別の子と付き合っている噂にきいた。それから彼が何人の子と付き合ったのかわからないが、香奈の言うところの見かけ倒しがどんなものなのか漠然とわかるような気がした。もしかしたら香奈には最初からわかっていたのかもしれない。

歩いて十分ぐらいいのところにその店はあった。通りから少し入った小路。アンティークな雰囲気のあるランプの灯りが見える。こげ茶色で統一された店内がとても気に入っていた。ここは隆子が社会人になって一年後に偶然見つけた店だ。白髪のマスターが物静かにカウンターの丸椅子に座っている。奥には年代物のJBLのスピーカーが鎮座していて、長い年月の間になれていった音の歴史を感じさせていた。この店がお客で満杯な時に出くわしたことがない。会社帰りに寄るその時間帯が暇なのだろうか。隆子がドアを開けて店に入っていくと、マスターが、おや珍しい時間に、といった顔で迎えてくれた。

カウンターの端、それが隆子の定位位置だ。『マイルス』に初めて入ったとき、カウンターの端に渋い照明が当たって光っているのを見た瞬間、隆子は「見つけた！」と思った。ずっと自分がゆっくりと過ごせる店を探してきた。入った途端に「この店すごく好き」オーラに体が満ち溢れてしまったのだ。壁がこげ茶色に染まっただけで、その中でカウンターだけがミルク色をしていて、白ではなくミルク色、それがこげ茶との絶妙な色のバランスを見せていた。古い掛け時計が入口とカウンターをつなぐ壁の上にあった。入口近くに座ると、見上げた位置にちょうど時計がある。ここはアナログの時間をじっくり味わえる。照明はかなり落としていたが、少しも気にならなかった。

カウンターに座りながら考えていた。もし自分が香奈と同じタイプの女だったらどうだろう？ きつといつも香奈と比べてしまうに違いない。全然タイプが違っていたから長続きしているのだ。恋愛に対して、何人とも付き合える器用さはなく、付き合うのなら長くじっくりがいい。だが、長く付き合う対象になることは今までなかった。隆子はマスター特製だという「スペシャル」を少しずつ口に含んだ。卓也と

のデートは一体どんな感じになるのだろうか、という考えがふと浮かんだ途端、胸の奥がチクツとした。慌てて何を考えているんだか、と打ち消した。隆子は残っていた「スペシャル」を一気に飲み込み、自分の頭の中にあつた卓也の姿を拭い去るかのように軽く目を閉じた。目を開けると目の前のガラス棚に自分の姿が映っていた。そこには恋愛とは無縁の女がいた。唯一女性らしさを求めるならシヨートカットの耳で揺れているイヤリングの煌めきだろうか。グラスを上げると氷のかけらがカラんと遠慮がちに鳴った。

「マスター、お代わりお願いします」マスターが目細めて、ちよつとほほ笑んだ。

そのとき初めて暗いカウンターの向こうにもう一人客がいることに気がついた。スーツ姿の男性の手元には湯気のあるカップ。この店は珈琲も美味しかった。その男性は何度かここで見かけたことのある人だった。すらりとした背の高い人という印象だった。マスターとジャズ談義をしていたが、ふと隆子の方を見て

「何度かここでお会いしていますね。ピアノは好きですか」と訊いてきた。セピア色の店内で少し離れた席にいる男性の声を通るほど音量は

低く流れていた。ここに通うようになってからジャズを聞くようになっただけで、そんなに詳しくない。ジャズの問題を振られても答えに窮した。

「すみません、わたしジャズは初心者なんです。でも、あつ、今かかっている、このメガネの紳士のピアノは好きです」とCDジャケットを置いて台を指差した。

「ビル・エバンスですね。ビル・エバンスはいですよ。これはぼくも気に入っているCDで、マスターはぼくが来るとよくかけてくれるんです。ね、マスター」とマスターの方を悪戯っぽく見て笑った。その子供みたいな笑顔になんだか見覚えがあるような気がした。かけていたCDを引き寄せよく見てみた。『PORT RAIT IN JAZZ / BILL EVANS TRIO』と書かれていた。

柔和な雰囲気その人と話しながら、今度は珈琲を注文し体を温めた。見上げると掛け時計はすでに十一時を廻っていた。そのとき店のドアが勢いよく開いて、団体客が入ってきた。それまでの静かな雰囲気が酔客のがやがやした声に消されていった。隆子はここが潮時とばかり帰り支度を始めた。もってジャズの話の聞き

てみたい名残惜しい気持ちがあつたが、カウンターにいた男性とマスターに「おやすみなさい」の言葉をかけて店を出た。店の外に出て、隆子は体がほんのりぬくもっているのを感じていた。

〈明日はゆっくり起きよう。今夜は何も考えずぐっすり眠ろう〉

隆子は休みの惰眠をむさぼろうと思っていたが、それは早朝の呼び出し音で破られた。聞きなれた音はかなり長く鳴っている。

〈折角ゆっくり眠ろうと思っていたのに。香奈の奴、なんで早起きするのよ〉

香奈からだたとわかつたのは設定を香奈用の呼び出し音にしているからだ。レトロだが、大黒摩季の「あなただけ見つめてる」だ。『スラムダンク』のエンディングテーマ曲。その香奈が土曜の朝早くに電話よこすなんて、メールでもいいのに。

隆子はちよつとイラつきながら、携帯を開け「どうしたの?」とくぐもった声で言った。

「昨日あれからさあ。卓也くんとふたりつきりで別のお店に行ったのよ!」

はしゃいだ香奈の声に眠気が消えていった。「そう、良かったじゃない」

「ふふ、前から卓也くんことは気になっていたのよ。だからいいチャンスだと思つて。隆子があたしのこと色々話してくれたおかげで印象ばっちりよ。今まではなんかチャラチャラした子だなと思つていたみたいで、昨日は新しい一面を知つたよつて言われちゃった」

「ふん、良かったじゃない」

そう相槌を打ちながら何かが萎んでいく気がした。香奈の延々と続くどうでもいい話に付き合うのもうんざりだった。珍しく

「ごめん、香奈。なんか調子悪いんだ。後でゆっくり話を聞くから」

そう言つて電話を切つた。「あつ、ちよ、ちよつと!」香奈の甲高い声が耳に残つた。言いかけた言葉の内容はもうわかつてる。こんなことは初めてだったかもしれない。香奈からの電話はいつもフンフンと鼻歌交じりに聞く感じがあつたが、今回は胸に重りがあるような気がした。それがなんなのかわからない。脳裏にカウンターでふたりが飲んでる姿が浮かんできた。

隆子はベッドの上で胡坐をかいた。両手を両膝に乗せて目をつぶつた。これは隆子の習慣で、何か考え事があるときはこうして胡坐をかき両手を開く。気持ちを落ち着けるのには効果

があった。時間を止める気分がしていくらかスツキリするのだ。長身で手足の長い隆子がそうしている様は、千手観音のようなしなやかさが漂っている。中学時代から他の同級生たちとは違った雰囲気があった隆子だが、彼女らに隆子の瞑想の様子を話せば「ああ、隆子だったらありだね」という答えが即座に返ってくるだろう。「ほら、あるじゃん、菩薩像っていうの？

あんな感じ、彼女にびびったりだよ」

で、その瞑想とやらが隆子にとって功を奏したかという点、今回は効き目がなかったらしい。隆子の胸の中は何かで埋まったままだった。

夕方、重い体を奮い立たせ、近くのスーパーに買い出しに出かけた。近くのスーパーは規模が小さいながらも大抵のものならここで用が足りた。その日は豚肉の特売日だったらしく、豚肉のケースに三割引きのシールが貼られていた。隆子が物色していると、

「あれ、隆子さんじゃないですか」と言う声が、背後から聞こえた。振り向くと、あの卓也がTシャツにジーンズというラフないでたちで立っていた。隆子は突然のことにびびくりして目を丸くした。ハツとして

「卓也さん、どうしてここに？」という裏返っ

た声で言ってしまった。言った後で、自分の声を変だということに気づき頬が赤くなっていくのがわかった。

「言っただけでよかったかな。ぼくの兄貴がこの近くに住んでいるんだよ」

「えーっ」

隆子の声がさらに変な声になっていた。卓也が隆子の反応に軽く笑いながら言った。

「そんなにおかしい？ たまにここで買い物頼まれるんだよ、まさか君と会うなんて思わなかったなあ。ここの近くの？」

こくんと頷くと、急いで言った。

「あのあと香奈と飲みに行っただですよ？」

香奈が電話で嬉しそうに話してましたよ」

「ああ…… 香奈さんがどこかへ連れて行ってくられて頼むものだから」

「それより、今日は何をやるの？」と卓也がかごを覗きこむのを見て、

「今日は豚肉の特売だから生姜焼きにしようかと思っただけ」

「へえ、生姜焼きかあ、いいなあ」

卓也がちよっと羨ましそうな顔で隆子を見た。それには反応せず隆子はそそくさと退散する方を選んだ。これ以上いると何かへまをし

そうな気がした。隆子が軽く会釈をしてその場を立ち去ろうとすると「今度美味しい生姜焼き、ご馳走してよ」と笑って言う声が追いかけてきた。隆子は振り返り、了解したともダメだともわからない中途半端な状態で軽く手を振って立ち去った。

慌てないで、普通の感じで、そうそう自然にね、歩きながら隆子は自分に言い聞かせていた。ああ、なんで今日はジャージ穿いてきちゃったのよ、ばかばか、わたしってほんとにばか。胸はどきどきが止まらなかった。

部屋に戻っても作ろうとした生姜焼きの材料には手をつけずにベッドに座り、例の瞑想の姿勢を取った。いくら時間が経ってもさつき見た卓也の姿が頭にこびりついて離れない。へ隆子さん〜って呼んだわよね？ 香奈の友人ってだけで声を掛けてくれたの？

土曜の夜は長く、テレビは三角関係の恋愛ドラマを映している。漠然と見ていた隆子の目にヒロインの優柔不断さが自分と重なるように映った。恋愛に興手な自分、恋愛だけは香奈には敵わないと思っていた、まさか香奈と同じ人に惹かれる？ この感情が果たして恋愛と呼べるものなのかすら、隆子にはわからなかった。

卓也の笑顔が画面の男性に重なっていく。

突然、携帯が鳴った。「先程は驚きました。生姜焼きは美味しくできましたか。兄貴のところではパスタをご馳走になりましたが、僕には生姜焼きの方が魅力的でした。いつか食べてみたいです。隆子さんの生姜焼きを。卓也」

画面に映る文字を信じられない気持ちで見入る隆子だった。こういうときすぐに返信すべきなの？ それより香奈とはどうなってるの？ 結局、隆子は返信しないまま次の日を迎えてしまった。一つの返信によってこの先の香奈と自分の関係が変わる気がした、その先を考えるのが怖かった。傍から見ればそんなこと考えずに単なる知り合いとして返信すれば…… と言われそうだが、隆子にとっては大きな問題に思えたのだ。

〈最初が肝心よ、最初が。きつぱり距離を置くことが大事よ〉

隆子は自分を戒め、香奈の気持ちを優先することにした。多分、返信しない隆子に卓也から連絡が入ることはもうないだろう。

あれから一カ月が経った。香奈からは時折メールや電話が入った。隆子は自分でも知らないうちに香奈に連絡することがなくなっ

いた。香奈から「この頃冷たくなった」とか非難の言葉を何度かもらったが、その都度「忙しいから」と言っただけで切った。隆子にとって自分の中の変化を言えばすぐにでも見破られる気がした。香奈には妙な嗅覚がある。何度か「飲み」の誘いを受けたが、その度に断った。断つているとそのうち連絡が遠のいた。

隆子はあれから数回『マイルス』に足を運ぶ。いつ行っても、ひとりの時間に躊躇なく浸ることができる空間だ。時には以前会ったあの男性と同じ時間帯になり会話を楽しんだ。偶然にもその男性も溝口と名乗った。一瞬、隆子の中に卓也の姿が浮かんだ。溝口やマスターとの会話を楽しむ余裕さえできた。隆子にとってこれが大人の時間なのだと思えた。香奈とは味わえなかった時間だ。

それは年の暮れが差し迫っていた頃だった。ここに来るのも今年最後になるかなと思いが、『マイルス』の扉を押した。寒い中歩いてきた顔を店内の空気がほのかに暖かく包む。いつもの定位置が空いている。コートを椅子の背にかけるとマスターに声をかけた。

「マスター、珈琲お願いします」

マスターが軽く頷いて、年季の入った銅製のポットをガスにかける。しばらくするとシュンシュンという沸騰していく音が白く立ち上る煙と共に聞こえてくる。この店の珈琲はドリップ式だ。マスターが細い注ぎ口から湯気が立つポットを手に布製のドリップで二杯分の珈琲を落とした。いつものように隆子にはブラックで。残りの分をマスター愛用のマグに注ぐ。マスターも一服するつもりなのだろう。

目の前のCDラックに視線をむけると沢山並んだCDの中で、ショートカットの女性のジャケットが目飛び込んできた。隆子の視線の先を感じたのか、つとマスターがそのジャケットに手をかけ次の一枚にした。今かけているCDのジャケットは左端の壁の棚に置くのがこの店の流儀だ。

まず一曲聴いてから手に取ってみようと思っただけだが、低い声が店内に漂っていくとジャケットを見ずにいられなくなった。アン・バートン。吸い込まれるような大きな目、少し頬がこけた印象が、ベルナル・ビュッフェが描く女性を思わせる。洗練された音の世界にたちまち隆子の耳がスピーカーに釘づけになっていく。ああ、やつぱりここで聴く音は格別だな。

隆子が目を閉じていると心なしか音が高くなつた気がした。しばらくして目の前の珈琲がすっかり冷めていることに気が付き、慌てて半分ほど入っていた中身を一気に流し込んだ。

「この女性、いいですね」と言うと、

「僕はね、ボーカルではこの人が好きなんですよ。なんといいても声がいい。歌い方も変に癖がなくて好きなんですよ」

そう答えていたときに、ドアが開いて、男性が二人入ってきた。二人はスピーカーに近いカウンターの前に立った。

「マスター、今日はぼくの弟を連れてきましたよ。この店の話を教えていたら一度連れていってくれとせがまれましたね」

「こんにちは。噂どおり素敵なお店ですね」

その声にCDジャケットを熱心に見ていた隆子は驚いて顔をあげた。隆子に気がついて溝口が少し手を上げた。隆子が軽く会釈をした。

二人は席に座るとそれぞれ注文した。隆子の心臓が早鐘のようにどくどくと鳴っていくのがわかった。

「溝口さんの弟さんって卓也さんだったのね。」

「どうしよう、挨拶しなくちゃ」

卓也が珍しそうに店内をぐるりと見回すと、

カウンターの向こうにいる隆子の上で目が止まった。卓也はハツとした顔をしたが、

「やあ、しばらくぶりです。君もこの常連だったの？」と声をかけた。隆子はメールの返信をしなかったことを思い出し、ぼつの悪そうな顔で

「ここはわたしの隠れ家なんです」

とマスターの顔を見た。マスターが少し微笑んでいたのが救われた気がした。溝口が

「なんだ、知り合いだったのか。高島さんとはここであれこれ話が弾んでね」と言った。その後、隆子は早々に立ち去った。

そんな年の暮れを過ごし、お正月は胸がもやもやしたまま過ごしていた。香奈からの新年の挨拶メールには「話したいことがある」と書いてあったが「後で」と簡単に返し、寝正月を決め込んだ。テレビのチャンネルをあちこち選び、見たい番組がないことに気が付くと、ベッドにドンと体を預けて天井を見た。頭の後ろに両手を組んで、脚も投げ出してしばらく天井を眺めていると、何もないはずの天井にぼんやりと浮き上がってくるものがあった。それはあのスーパーで偶然会った時の卓也だった。別れ際の笑顔がくつきりと浮かんだ。

メールの返信をしなかったことへの後悔がずっと残っていた。あれから香奈と卓也の関係がどうなったのか聞いていない。だが、あの香奈のことだ、順調にいつているのだろう。むろん香奈と会うこともあれ以来避けていた。

そのときベッド脇の棚に置いた携帯が震えた。

「新年明けましておめでとう。先日はびっくりしました。兄が通っている店で会えるなんて。」

それにしても世間は狭いですね。ぼくの兄と知り合いだったとは。以前のメールに返信がなかったから、何か失礼なことを書いたかなと思っていたけど、また会えて嬉しかったです。卓也」

思いがけない内容に隆子の胸はことんと鳴った。そしてコトコトコトとその音は早く鳴り続けた。

「どうしよう。今度こそ返信しなくちゃ」

しばらく卓也のメールを何度も開き、その文面を読み返した。この真意がどこにあるのかと考えると、堂々巡りの中で頭は冴えわたっていった。メールへの返信をしない限りこの不安はなくならない。ベッドの上で例の瞑想のポーズを取りしばらく気持ちを落ち着けた。おもむ

ろに携帯を手にし、メール画面を開く。返信メール作成ボタンを押す。自分の文面を入力……ああ、なんとということだ、指が動かない。今更ながらこんなに優柔不断だったのかと思った。こんなたつた一通のメールを出すことに悩んでいる。さつさと入力して送ればいいでしょ。自分にイライラしながら文字を探した。

「こちらこそまさかマイルスでお会いするとは思っていませんでした。お元氣そうで何よりです。お兄様にもよろしくお伝えください。隆子」

なにこれ、あまりにも素っ気なさすぎる。ビジネス文書でももつとましなのがあるでしょ。隆子は削除ボタンを押し続けた。それから一体何度入力し直したことだろう。

「こちらこそ今年もよろしくお願いいたします。本当に驚きました。まさかあのお店でお会いするとは…… 以前のメールに返信しないでいてごめんなさい。出しそびれてしまいました。今度は香奈と一緒に会いましょう。隆子」

最後に香奈を入れたのは、一応、香奈に気を使ったつもりだった。勢いで送信ボタンを押した。なんだか大きな仕事をやり遂げたような

気分で珈琲をマグにたつぷり淹れると、ヘッドフォンでアン・バートンを聴き始めた。あの時『マイルス』で見つけたアルバムだ。すぐにアマゾンで手に入れた。ベッドの壁に腰掛け背中に大きなクッションを当てて目を閉じた。テールの上の携帯がしばらく震えていたが、やがて隆子が出ないことに諦めたのかブルブルはぱたりと止まった。隆子は歌を聴きながら、はたしてこれで良かったのかと考えていた。香奈と付き合っているのにわたしと会えて嬉しいなんて、社交辞令もいいところ。こんな調子いい男だったのか、それとも香奈とはなんでもない？ あり得ないと思った。香奈に確かめてみたかったが、結果を知るのが怖かった。とうとう最後の曲が終わるまでずっと卓也のことを考え続けていた。

着信があったことに気付いたのは、次の日の朝だった。卓也からだ。急に不安を感じたが、今年初出勤の日だ。すでにいつもの時間より遅くなっていた。電話をかけるのは諦めた。

外は昨日よりずっと冷え込んでいて、コートの上にマフラーを巻いてきて良かったと思える寒さだった。急ぎ足で行くとカッカッと地面を打つ音がやけに大きく響いた。この雑踏の中で

は、不安という覚束ないものが自分を満たしているとバランスを崩してしまいそうな気がした。今までこんな不安感が自分の中にあっただろうか。

「わたしは冷静でいつも達観したような印象を与える女、周りからそう見られてきたんじゃないか？」

心ここにあらずといった状態で初仕事を終えた隆子は、そのまま帰宅する気になれず足は自然と『マイルス』に向いていた。いつもの角を曲がると、見知ったランプの灯りが見えた。灯りが見えるというだけで張り詰めていたものが緩んでいくような気がした。

ドアを開けると、店内にトランペットの音が響いていた。抒情的な繊細な音の渦に店内が満ちていた。美しい、トランペットの音ってなんにも美しかったのか、隆子は空いていた席にすくと腰掛けると、新年の挨拶をするのも忘れ、棚のジャケットを見ていた。曲が一つ終わってから、慌てて

「すみませんマスター、注文するのを忘れてました。あんまり素敵で……」と言うと、マスターが笑って

「いやいや、そんなに気に入ってくれるのなら

かける方は嬉しいですよ」と言ってくれた。

少し頭を持ち上げてカウンターを見回してみると、隅の方にラフな格好をした溝口がいた。

隆子の方を見て軽く手をあげた。隆子も軽く会釈した。トランペットはクリス・ボッティ。まるで映画俳優みたいないい男だ。天は二物を与えずと言うが、それは嘘だと思った。完璧すぎるじゃないの、隆子は心の中でつぶやいていた。そのつぶやきが聞こえたかのように溝口が「不公平だね、こんな男が世の中にいるなんて」と言った。

「いや、こんな人もたまにはいるでしょ。溝口さんだって、エリートじゃないですか」

とマスターが笑って言った。ちよつとびつくりした顔で溝口の方を見ると、照れたような困ったような顔をした溝口が、とつてつけたように

「そういえば、卓也があなたのことを話していましたよ。同僚にあなたと昔からの友だちがいるそうですね」

隆子は溝口の方から卓也のことを話題にしてくれたので、

「そうなんです、中学時代からの友人で卓也さんと同期入社した可愛い子がいるんですよ。わ

たしとは月とスッポン」と笑って返した。

「隆子さんは綺麗ですよ」

「まさかぁ。わたしなんて男に間違えられてばかりです」と言いながら手を横に振ると、それまで口を挟まなかったマスターが

「おやおや、一体だれが隆子さんのことを男に間違えるのだろうね」と笑った。隆子はなんとなくそれ以上言うことができずクリス・ボッティのジャケットを手に取ることにした。マスターや溝口だって香奈に会ったらわかる、わたしとは全然違うもの、と思った。世の中に香奈を選ばない男性がいるのかも思った。

急に黙り込んだ隆子を見て、溝口はそれ以上話しかけずマスターにクリス・ボッティのコンサートが凄かった話を始めた。隆子はこんな演奏を間近で聴く様子を想像してみた。マスターがふと思いついたように、隆子の方を見た。

「来月の第二土曜の夜、ここでライブがあるんですよ。アマチュアだけど、上手いですよ。来てみませんか？」

「ライブですか？ まだジャズのライブを聞いたことないんです。来てみようかな……」

「マスター、それ何時から？ ぼくも時間が合えば聴いてみたいな。もしかして佐藤くんたち

のバンド？」

マスターが笑って、なんでもお見通しだねと頷いた。溝口が隆子に言った。

「佐藤くんたちはね、ここでも何度かライブやっているんだけど、いい演奏してくれるんですよ。珈琲一杯でいい演奏を楽しめる所なんです、そうそうなんです」

「初めてジャズライブを体験できるってことです。わくわくします」

卓也に電話をしなかった自分に苛立ちを覚えながら時間は過ぎていった。もうあの電話に付いた日には戻れないのだ。

香奈からしびれを切らしたような声で電話があったのは、新年の『マイルス』訪問から二週間ほど経った日だった。冬真つただ中の寒さのときだ。窓の外は勢いのある風が横殴りにガラスを打っている。雨が交じつていなかったのは幸いだが、いつになく強い風が町を取り囲んでいた。風の音に負けじと甲高い大黒摩季の曲が部屋中に響いた。ちよつと躊躇したが、携帯を手にした。

「ちよつと、隆子！ 一体どうしちゃったのよ。全然音沙汰なしで。このままずっと冬眠し

てるつもり？」

開口一番、口を突きだして話しているだろう
香奈の姿が目には浮かぶ。

「何度も誘ったのに、ちっとも顔見せないんだ
から」

畳み込むように香奈の声が耳元で続く。

「ああ、ごめんごめん。なんか億劫になっ
ちゃって。でもいたって元気だよ」と少し笑っ
て返した。久しぶりに聞く香奈の声が懐かし
かった。長年聴き慣れていた声から遠のいてい
た自分が器の小さい人間に思えた。へわたしは
何をやってたんだ、全く」

「あれから、どう？ うまくいってる？」と訊
いてみた。

「ん？ なんのこと」と香奈が少し首をかしげ
て言っているようだ。

「ほら、最後に会った合コンで、同僚の彼にア
タックするって言ってたじゃない」

「ああ、卓也くんかあ」

香奈がなんとも気の抜けた声で言うので、隆
子は、おやつと思つた。

「卓也くんってさあ、いい人なんだけど、行く
場所は全然おしゃれじゃないんだよね。期待し
たわりには結婚対象には向かなかつたなあ」

「へえ、香奈も結婚考えているんだ」

「当たり前でしょ。いい男は早目に捕まえてお
かないと。で、さあ、今、すごくいい彼と付き
合ってるのよ」

明るく華やいだ声が続く。その声に隆子は気
持ちが軽くなつていくのがわかつた。卓也さん
とは付き合っていないかつた、それだけでも外
の強風も気にならなかつた。香奈、もつと話し
て。香奈の声がコロコロと響いていく。

小一時間も隆子は話に付き合つた。ランチの
誘いにも二つ返事で答えていた。なんて現金な
奴なんだ、わたしって。隆子は自分に苦笑いし
た。笑いながら、そういう自分がなんだか可愛
く思えた。

一晩中、外は荒れ狂い、建物を揺らしていた
が、香奈と卓也さんはなんでもなかつた……
そのことが心地よい振動となつて眠りへと誘つ
ていった。

一夜明けると青く澄んだ空が広がっていた。
冷え込んでいるのに全然冷たさを感じない。深
呼吸すると体に新鮮な空気が入ってくる。新し
い自分に生まれ変わった気がした。

二月の第二土曜、開演は八時だ。ドアを開け

ると、三十分前に着いたのに思いがけず混雑し
ていた。長身の隆子が立っていると、マスター
が手招きした。

「悪いけど、今日はカウンターの中でもいいで
すか？ もう少し人が入る予定なんですよ」と
言つた。

「もちろん、いいですよ。お手伝いしましよ
うか」と隆子が笑つて言う

「そりゃ強い。じゃ、早速向こうのテーブル
席にこのグラスと乾き物を運んでくれないか
な」とすぐに銀のトレイを渡した。隆子はテー
ブル席にそれらを運ぶとカウンター越しにマス
ターの顔を見た。次にマスターが用意した珈琲
カップ二客分をトレイに置き、隣のテーブル席
に持つていった。てきぱきと動く隆子の姿を見
て、マスターがホツとした顔をしていた。

隆子が何度目のテーブル席との往復を終え
戻ってきたとき、ドアが開いて男性二人が入つ
てきた。隆子が顔を上げるとそこにはあの溝口
兄弟が立っていた。隆子の手にトレイがあるの
を見て「あれ、今日は隆子さん助っ人？」と兄
の方が笑つて言つた。隆子は軽く微笑んだ。店
内を見回し、カウンターの向こうに誘導した。

開演前に店内は満杯になった。カウンターの中

の丸椅子に座るとちようど目線左側に卓也たちがいた。隆子はどきどきしながら珈琲を一口飲んだ。卓也が自分を見ている気がした。

演奏が始まった。佐藤さんはギター担当で、大きなベースを弾いたのは森本さんと言った。ドラムは少し年配の方で高橋さんと紹介された。痩せていて弱弱しい印象が、演奏では真逆だった。喝采を浴びるドラムソロ。ギターも負けていない。ベースは飄々とした感じでマイペース、どつしり落ち着いた雰囲気だ。三者がソロを取るとお客様からは熱い拍手が出た。拍手で足りなくて口笛を吹く人も。店内が音の渦にぐるぐる巻きこまれていく。珈琲を飲んでいたのに人と演奏とで軽く酔ってしまう。

ライブは休憩をはさんで九時半過ぎに終わった。メンバーが片づけ始めると、店内は帰り支度をするお客様が並んだ。口々に「今日は良かった」という声をメンバーやマスターに掛けていく。隆子は気の抜けた顔でカウンターの中に座っていたが、ハツとして銀のトレーを持つと、席を片づけ始めた。背中

「隆子さん、もう手伝わなくていいですよ。席も空いたし、何か作りますから座ってゆっくりしてください」とマスターが声をかけた。隆子

は目の前のグラス数個と灰皿をトレーに乗せカウンターまで持ってくる

「じゃ遠慮なく座らせてもらいますね。マスター、スペシャル頼んでもいいですか」と言った。マスターが軽く頷いて、水の入ったグラスをカウンターに置いて、座るよう促した。「お疲れ様」とカウンターの向こうから声が出た。顔を上げると端の方に卓也が溝口と並んで座っていた。笑いながら隆子の方を見ている。

「よく手伝わっているの？」
「ううん、今日は特別。ライブも初めてだったの」

「どうでした、初めてのライブは」と溝口が聞いた。隆子は兄の方を見て

「すごく楽しかった。ジャズのライブってお客との一体感があるんですね。ドラムソロなんか圧倒されてしまいました」

と興奮した口ぶりで答えた。それを見ていたマスターが

「そんなに喜んでくれるとは、嬉しいねえ。佐藤くんたちも演奏した甲斐があったというものだよ」と顔をほころばせた。

楽器を片づけ終わったメンバーが店に入ってくると、マスターと溝口との音楽談義が始まっ

た。隆子の知らない世界が展開している。少しずつスペシャルを飲んでいると、いつのまにか卓也が隣に座っていた。みんなはテーブル席でテンションが上がっている。CDはケニー・バレル。隆子のグラスの氷が小さくカランと音を立たした。

「電話、くれるかと思ってたよ」と卓也がぼそつと言った。ハツとした顔で卓也の方を見ると少し厳しい横顔がそこにあった。隆子は言葉を探した。メールといい電話といい、変化を恐れる自分がいた。

「ごめんなさい。気がついたのが遅かったの、かけそびれて……」

「メールに書いていたけど、香奈さんと一緒にらつて……」最後まで言わずに遮った。

「ああ！ ごめんなさい、ごめんなさい。勘違いだったんです。ずっと勘違いしてて」

「勘違い？」

卓也が隆子の方を見て怪訝な顔をした。

「その……、香奈と付き合っているとはばかり思っていて。誤解してたんです」

隆子は卓也にびよこんとお辞儀した。

「ああ、それでかあ、無視されるから嫌われているのかなと思っていたよ」と卓也がホツとし

た顔で笑って続けた。

「それじゃあ、誤解だったんだから誘ってもいいんだね」

隆子は耳を疑った。今、誘ってもって言った？突然、隆子の心臓が早く打った。

「あ、あの、た、た、卓也さん、誘うって、わたしを？」

目を白黒させている隆子に向かいにはかみながら、顔を覗きこんできた。

「他に誰がいるって言うの？」
隆子は急に酔いが回ってくる気がした。

卓也と付き合い始めたことを香奈に伝えようと思っていたが、言い出しそびれていたところに「ちよつと、日曜空いてる？」と、香奈が連絡をくれた。これ幸いと二つ返事で応じた。何度か行ったことのある、野菜中心でヘルシーさが女子に人気の店だ。お昼時を避けたせいか店内はまばらで、大きな窓のあるテーブル席に座れた。何カ月ぶりかで見える香奈は、相変わらず可愛い。アイボリーの生地にパステルピンクの花模様が入っているワンピースは香奈のためにあるといった感じがした。そして隆子は相変わらずシャツにジーンズ姿だった。

「なんだ、おしやれしてくるかと思ったのに。

全然変わっていないんだね」と香奈が笑っている。隆子はその言葉をさりげなくスルーするとう。どう、最近」と尋ねた。

「どうって……わたしより隆子の方でしょ。上手くいってるの？」

香奈が悪戯っぽい目で隆子を見た。隆子は顔

が赤らむ気がして目を落とした。追いかけるように「卓也さんと付き合ってるんでしょ」と、

さらりと言われ、目が点になった。

「卓也くんは隆子の好きなタイプだものね。卓也くんったら隆子のことばかり訊いてくるんだもん。頭来ちゃうよ」と、ちよつと口を尖らせて言う姿、久々に目にした。

「電話でそのこと教えようと思ったのに隆子ったら話の途中で電話切っちゃって。長年そばにいれば、隆子の好みはわかるって。卓也くんは隆子にびつたりだよ」

「でも前は卓也さんにアタックするって言ったじゃないの」

「ふふふ、隆子はわたしのことわかっているでしょ。卓也くんがわたしのタイプじゃないって」

香奈と自分のタイプ…… そう言われてみればそうだ。

「でも、何度か一緒について」

「合コンの時一緒にバーに行ったけど、そのあとは会社の人たちも一緒。隆子ったらすぐ話逸らすし、連絡もよこさないし。脈なしなのかなって思うところだったわよ。そのうちあなたも彼氏といえることが多くなったら」

そう言いながら、香奈が首元に手をやるとそこにキラキラと輝くダイヤのネックレスがあった。

「あれ、何それ。どうしたの」

「ふふふ、彼がね、バレンタインのお返しにくれたの」

お返しがダイヤのネックレスとは、内心あんぐりだ。

「彼とは順調よ。このままゴールインするかも。そのうち隆子にも会わせるからね。それより卓也くんとはどうなの」

「うくん、何度か会ってるよ」

「ふくん、卓也くんが定時に急いで帰るのを見ていたけど、あれってデートってことね」

とウインクして見せた。隆子の頬がポツと赤くなる。それを見て言った。

「隆子ったら、いい加減に恋愛慣れしてよね。キャプテンのときだって、わたしが彼の本性に

気がつかなかったら隆子は痛い目にあっていたんだからね」

香奈にはかなわないなと思った。最後に出た珈琲は『マイルス』のより苦みが強く、ミルクを入れないと飲めなかった。今日は久し振りにお店に行ってみよう。そうだ、卓也さんを誘ってみよう。

「ちよつと、隆子つたらあ、何考えてるのよ。全くう、人の話聞いてないでしょ」

香奈がすねた顔をした。「何よ、また卓也くんのことでも考えていたの？」

答えずに隆子は外を見た。青空にふんわりと雲が浮かんでいる。風もないのだろう。動かない雲のある空は一枚の絵のように見えた。青い空にぽっかり浮かぶ白い雲はルネ・マルグリットの絵のように見える。空を見ながらぼつんと言った。

「香奈、ありがとう」

「は？ 何、突然」

「卓也さんに会わせてくれてありがとう。すごく嬉しい」

香奈が慌ててカチャカチャとカップをかき混ぜた。

「隆子には素敵な恋をしてほしいんだ。いつも

あたしのこと応援してくれたでしょ。だから絶対隆子にはいい人と出会ってほしいって……」

最後の方は聞こえなくなった。カップの中にぽとりと落ちたものがあつた。隆子は驚くと同時に、香奈の気持ちに気づけなかつた愚かさを悔いた。そしてそんな仕草をする香奈はやっぱり可愛いかった。

二羽の鳥が窓の向こうを飛んだ。舞い降りる先はそれぞれ違うのか。それとも同じ場所に止まるのか。隆子には香奈と自分が、この鳥たちのように陽光の中で互いを受け入れながら年を経っていく姿が目に見えかたがした。

入選 神崎牧師の多忙な一日

秋田市 小池 卯花

神崎牧師の一日は、午前九時に牧師館から教会の牧師室に出勤することから始まる。

平屋の古びた一戸建ての牧師館は教会の敷地内にあり、教会から五メートルと離れていないので出勤というより部屋を移動するといった感じである。

とは言え、神聖な職場であるから多少の緊張感を持って、どうしても跳ね上がる後頭部の寝癖の髪を抑えながら教会の横の扉を開けた。

まず、玄関の自動ドアのロックを外し、それから、礼拝堂、台所、事務室、祈祷室と教会内を回りながら窓を開け、新鮮な空気を入れていく。

最後に二階にある牧師室に辿り着き、東側と南側にある窓を開け放した。

東側の窓からは派手なオレンジ色に塗られたマッチ箱のようなアパートが三棟規則正しく並んでいるのが見える。

南の窓からは残雪の残る太平山が見えた。近所にはまだ田んぼが残っていて、水のはられた

畝を超えて、甘い緑の香りがする風が吹いてきた。牧師は胸いっぱい爽やかな朝の空気を吸い込んだ。

一日の始まりは、プレゼントの美しい包装紙を開ける時のように期待と希望に満ちている。

窓に向かって大きな机が置いてあった。

そこが神崎牧師の仕事場である。がっしりとした木製の机は二十数年前に建ったこの教会よりもずうっと年季が入っている。何処かの骨董屋の隅で長年、埃を被りながら陽の目を見るのを待っていた品物であろう。

この机の前に座ると先輩牧師たちの無言の励ましを感じて、困難に立ち向かう勇気が湧いてくる。

明日の礼拝では『ルカの福音書』の放蕩息子の譬え話から説教をしようと準備を進めていた。

机に原稿を広げ、神様のみに心に沿った説教ができるようにと静かに祈った。

放蕩息子の譬えは聖書の中では比較的世間にも知られた話である。

ある人に二人の息子がいた。弟の方が「父よ、

あなたの財産の中から私が頂く分をください」と請求した。父が分け与えたのでそれをもらって、遠くへ行き放蕩の限りを尽くした。財産を使い果たした頃、その地方にひどい飢饉が訪れた。息子は豚飼いに雇われたが、食べる物に窮して豚の食べるいなご豆を食べて腹を満たしたいと思うほどの状況に陥った。

それで息子は雇人にでもしてもらおうと父の元へ帰って来る。父は遠くから息子を認めて走り寄り、首を抱いて接吻して喜び迎え入れる。

父親は神の、放蕩息子は信仰から離れ、罪に落ちた人間の譬えである。神の深い愛について教会員の心に届くような説教が出来ればと思う。

しかし、神崎牧師はどうも説教が下手である。真面目過ぎるし、人生経験も少ない。

教会員の悦子さんはとても率直な人で、「先生、今日の説教は詰まらなかつた」とか、「何だか結論が良く分からなかつた」など、説教が終わると必ず感想を言ってくれる。褒められることは少ない。

他の教会員が

「あら、良い説教だったわ」

と牧師を庇うと

「だって、先生に良い説教をして欲しいの。足りないところが分かると次はもつと良くなるでしょう」

と自分の使命がそこにあるように主張する。

神崎牧師は本心から

「私には悦子さんのご意見は有難いです。これからも厳しい感想を期待しています」

と言って悦子さんを喜ばせた。

三十九歳の神崎牧師は信仰的には教会員を指導する立場にあったが、年長の信者から見れば、人間としてはまだ心もとなく目が離せないのであった。

悦子さんは六十代初めの婦人で、夫と二人で小さな定食屋を営んでいた。二十代で洗礼を受けたので信仰生活はずいぶん長い。家庭の事情で高校を中退しているの、難しいことは分からないと言って、掃除や食事作りなどに体を厭わず奉仕していた。

しかし、悦子さんは中々の勉強家で、そのくるくると良く動く大きな目には人生の叡智が秘

められていた。

悦子さんは子どもがいないので、「私は先生を自分の子どものように思っています」といつて神崎牧師を見守っている。牧師は早くに両親を亡くし天涯孤独の身の上であったので、その言葉を大層嬉しく聞いた。

神崎牧師はそんな悦子さんに「今日の説教は良かったです。私の信仰が深まりました」と言わせてあげたい。

神の愛と罪深い私たち。自分も本当にそのことを理解できているのか。神崎牧師の目は遠く太平洋のごつごつと無骨な稜線をたどりながら意識は内側に向いて、原稿の推敲に集中ができていない。

「神は罪びとである私たちをも愛しているのです」との一節で、青白い相原智子さんの顔が浮かんできた。

「世の中には神も仏もありません。今までイエス・キリストを信じて来た私は馬鹿でした」

相原智子さんの目は心持ち釣り上がり、絶望で瞳孔が大きく見開かれていた。

それは昨年十一月の初めであった。タクシーの運転手をしている相原さんの夫がダンパーに追突されて亡くなった。

寒い朝で、前夜に降った雨が凍結していたのかも知れない。全身打撲で病院に運ばれた。

教会員全員が相原氏の回復を祈った。

神崎牧師も朝夕に祈った。相原さんは必死に祈ったに違いない。

相原氏は三日後に亡くなり、妻の智子さんと高校生の娘と中学生の息子が残された。

遺体が病院から戻った時、神崎牧師は相原家を訪問した。玄関に出て来た相原さんは三日三晩眠らないで付き添ったのだろう、青白い顔に乱れた髪、随分と憔悴していた。

「先生、帰ってください。私はもう教会とは縁を切ります。神様は夫を助けてくれませんでした。植物人間でも良いから、命だけは助けて下さいって祈ったのに。」

夫は真面目で良い人でした。まだ四十九歳です。どうして夫は死ななくてはならなかったのですか。どうして夫なんですか？」

普段は大人しい相原さんのこめかみの動脈が青く膨れ上がっていた。

神崎牧師には「この世の不幸や災難、不条理

は神様がおられるのに何故存在するのか？」という問いに対して、十分に納得させる説明はできなかった。

信仰は言葉ではなく心で理解するものであるということも、上手には言えなかった。

「神様のなさることは人の知恵では、はかり知ることではできません。信仰を捨てるなんて間違っています。被害者がご主人でなく、私だったら良かったのに。私は家族も身寄りもないのですから、私がいなくなっても誰も困りません」相原さんの嘆きを見て神崎牧師は心からそう思った。

相原さんははっとして、「先生は教会にとって大切な人です。先生がいなくなれば皆が困ります。私は信仰に確信が持てなくなったのです。もう放っておいてください」

一瞬、子どもが泣きべそをかいたような表情になり、それからすっかり薄くなった体を翻して、素早く居間の方へ戻って行った。

「貴女のためにお祈りをしています。いつでも教会へ戻って来てください」

神崎牧師はそう言い残して、手伝いに集まっ

ていた近所の人たちの好奇と同情の視線に曝されながら帰って来た。

相原さんの切ない棄教の決断を止められなかった不甲斐ない自分に神崎牧師は暫らく落ち込んでいた。

しかし、「先生は教会にとって大切な人です」と呟いた言葉は意外であった。自分が誰かに必要とされている人間であるとは一度も考えたことがなかったからだ。

神崎牧師は約束通りに彼女の平安と救いのために祈ってきたが、彼女は教会には戻ってこなかった。

保険金や賠償金であんがい優雅な暮らしをしているらしいという噂を聞いた。しかし、お金が入ったからといって、彼女が幸せであるとは考えられなかった。

「せんせい」

一階ホールから元気な声が聞こえた。時計を見ると十一時十五分。一行も推敲できずにぼんやりと時を過ごしてしまっただ。

自分を呼ぶ声に現実に戻った神崎牧師はパタパタとスリッパを鳴らしながら階下に降りて

いった。

山内祥子さんが段々畑のようにでこぼこした風呂敷包みを持って笑いながらホールに立っていた。

山内さんは五十代後半の主婦。ご主人は小さな工場で働いている。息子が一人いる。その息子が昨年、東京の会社に就職した。家族の中で信仰を持っているのは彼女一人。

夫はクリスマスなどのイベントの時に何度か教会に来たが、腰の低い温厚な人である。

山内さんはニコニコと嬉しそうに「昨日、正樹が出張で近くまで来たから泊まって行ったの。ご馳走を作ったからお裾分け」と言った。

「正樹君、元気に働いていますか」

「仕事にも東京の暮らしにも慣れたようで、彼女もいるみたい。父さんに似て、もてるのかしらね」

と山内さんは自慢そうに言っていて、すぐに「ああ、血は繋がっていないけれどね」と慌てて訂正した。

「正樹君は優しいから女の子に好かれると思います。教会のご婦人たちにも評判が良いですよ」

「先生、教会はご婦人ばかりでお嬢さんは少ないですから」

山内さんはそう言いながら台所へ入って行った。神崎牧師も後について行くとテーブルに風呂敷を広げ、タッパーを一個一個出して説明した。

「これは五目御飯。正樹が母さんの五目御飯は最高つて言うから必ず作るの」

山内さんは少女のようにちよつとはにかんだ。

山内さんは近所の農家に手伝いに行つて家計を助けて来た。両手の節々がゴツゴツと変形していて、彼女のしてきた労働の重さを示していた。

「これはから揚げ。それからサラダは冷蔵庫に入れておきます。これは煮豆。これはほうれん草の胡麻和え」

次々とタッパーの中身を説明しながらテーブルの上に広げていく。広げながらサラダや胡麻和えは手際よく冷蔵庫に入れた。

「ずいぶんご馳走ですね。お蔭で私もお相伴にあずかって幸いです」

牧師は普段のささやかな食生活を思つて山内さんの差し入れに心から感謝した。

「正樹がね、昨日父さんと飲みながら『実の子でもないのに育ててくれて本当に感謝してる』つて言ったの。立派な大人になったなって私も感慨無量でした」

山内さんはこの話をしたくて料理を持って来たに違いない。

この緑ヶ丘教会に赴任して二年目の神崎牧師は各教会員の家庭の事情を詳しくは知らない。

しかし、教会員同士の多くは、この教会がまだ小さな集会所だった頃からの付き合いで、夫々が辿つた人生の喜び、悲しみ、苦しみを身近に見て、共に祈りあつて来たのだ。

山内さんは昔、幼稚園児だった娘、茉莉ちゃんを亡くしている。インフルエンザの高熱を下げるのに使つた解熱剤の副作用だった。その時代にはそんな事故が何件かあつて、茉莉ちゃんもその犠牲者だった。

可愛い盛りの一入娘を失つた山内さん夫妻の嘆きはどんなに深かつただろう。山内さんはその時、この教会の前の前の牧師に聖書の話聞いて、天国で茉莉に会いたいと洗礼を受けたのだった。

それから何年かして、事情があつて施設に預

けられることになつて来た遠縁の男の子を引き取つた。それが正樹君で、小学校五年生だったそうだ。

その正樹君が中学二年生の頃からぐれだした。本当の親でないというので学校で苛めにもあつていたらしい。

高校生になると髪は茶髪に、だぶだぶのズボン、煙草だ、酒だと停学処分を何回か繰り返した。そんな事情を切れ切れに他の教会員から聞いていた。

それが高校三年生になつた時、「父ちゃんかね。正樹を呼んでこう言ったの」と祥子さんは語つた。この話は神崎牧師も「祈り会」で、山内さんから直接聞いた。

「正樹、何時までそんなことをやつているんだ。俺たちに不満があるかも知れない。本当の親だつたらと思うこともあるかも知れない。でも俺たちはお前のことを本当の子どもだと思つて大切に育てて来た。」

正直、俺たちも茉莉が生きていればつて思うこともある。思い出して涙を流すこともある。でも茉莉は死んでしまつたし、お前の親もいない。

過去はどんなに頑張つても変えられない。だ

から過去に縛られていては幸せにはなれない。今現在を後悔しないように生きて欲しい。俺たちは正樹の幸せを一番に願っている。

もし正樹が希望するのなら俺は今日から酒もやめて、母さんにも協力してもらって大学まで教育してやる。家を出るにしても世の中で、しっかりと生きていける手立てを身につけてから出て行け、って初めて叱ったの。

それから暫らくして、正樹は不良グループと縁を切ってまじめに勉強 شدしたの。

私は毎度、口うるさいばかりで何の足しにもなっていないかった。父ちゃんは立派だった」

山内さんは心から嬉しそうに言った。周りの者も何度聞いても飽きずに「そう、そう、立派」と深く頷いた。

「きつと、実の親は頭が良い人たちだったのよ。一年間、頑張って正樹は国立の大学に入ったんだもの。優秀な頭をもらって正樹は幸せなのだ。神様に感謝です」

と最後に付け加えた。その時、神崎牧師は平凡に見える家庭にも様々な事情があることを知った。

「先生、タッパーはざつと洗ってテーブルの上

においてください。明日、来た時にもらって帰ります」

山内さんは風呂敷をくるくると丸めると手に持って忙しそうに帰って行った。

台風が去ったような気分だった。山内さんと話していると暖かい空気が牧師の孤独な心にも流れてくるようだった。

部屋に戻った牧師は、少しも進まない原稿を片づけて、お湯を沸かし、早めの昼食に取りかかった。今朝は有り合わせの野菜や卵、チーズを挟んだポリウムたつぶりのサンドイッチを作って来た。山内さんのご馳走は夜に食べることにして、お昼はコーヒーとサンドイッチにした。

具が多すぎて口からぼろぼろとこぼれ落ちる。それを一つ一つ拾ってまた口に入れる。一人暮らしも気楽で良いと思いつつながら、コーヒーを飲んだ。

「過去は変えられない。今が大事だ」山内氏は考えの深い人だ。それをしっかりと受け止めた正樹君も偉い。

自分は何時になったら過去の呪縛から解放放たれるのだろう。神崎牧師は神にもそう祈り、

理屈で分かっているても変わらない自分を嘆かわしく思った。

そう、叱ってくれる父がいる正樹君が羨ましい。一心に祈っても神崎牧師には神の声は聞けない。

「私が何度、どうしてと問いかけても神様は沈黙されたままだ」

相原さんの苦悩に共鳴する牧師らしからぬ弱い自分がいた。

神崎牧師はコーヒーカップとパン皿を洗って、午後の仕事にとりかかった。

放蕩息子が帰って来ると父親は喜び迎えて、最上の着物を着せ、指輪を手にはめ、履物を足に履かせる。そして肥えた子牛を屠って祝宴を開く。それを見た兄は「私は何年もあなたに仕えて、一度でもあなたの言いつけにそむいたことはなかったのに、友達と楽しむために子ヤギ一匹も下さったことがあります」と父親に抗議をする。

すると父は「子よ、あなたはいつも私と一緒にいて、私のものは全部あなたのものだ。しかし、弟はいなくなっていたのにみつかったのだから、喜び祝うのは当たり前である」と答える。

この兄の気持ちは誰にでも共感しやすい。反対に父親の言葉は欲深い人間にとつて素直には納得しがたい不公平感がある。

しかし、冷静に謙遜な心持ちで自分に与えられた賜物のあれこれを数えてみれば、弟を妬むことはないのである。

どのような言葉で、またどのような実例で話をすれば神の溢れるほどの愛を理解してもらえるのだろうか。神崎牧師は頭を悩ませる。

難題に行き詰まり、お腹も満腹で神崎牧師はふっと眠気を覚えた。

ピンポン。呼び鈴がなった。

神崎牧師が壁の時計を見ると一時半を回っていた。

「はあい」と声を出して、パタパタとスリッパを鳴らしながら、かね折り階段をくの字に降りて行った。

玄関には着物姿の小柄な老女が立っていた。

「こんにちは。お水を一杯飲ませていただけませんか。道に迷って疲れてしまいました」

老女は日傘もささないで、額に少し汗をかいていた。

「どうぞ、この椅子に座って少し休んでいかれるといいですね」

神崎牧師は老女をホールのベンチに座らせると台所からコップに水を入れて持って来た。

「ご親切に有難うございます。息子の家に行こうと思っていたのですが、途中から分からなくなってしまうって。」

私の女学校はミッションでしたの。十字架を見たので、ここなら安心して思いました。神父様ですよ」

「ここはプロテスタントの教会ですから、私は牧師です」

「でも神様に仕えているのですからどちらも同じですよ。ああ、牧師様は結婚できるのですかね。奥様は？」

「私は独身です」

「とんだ失礼を申しあげました」

老女は丁寧に詫びてから、美味しそうにコップの水を飲み干した。空のコップをテーブルに置くと懐から白いハンカチを取り出して口元を拭いた。

「ご馳走様。人心地がつかまりました」

「息子さんのお宅はこの近くですか。住所が分かれば私が送って行きましょう。それとも息子

さんに電話をしましょうか」

「それがね、嫁が意地悪をして教えてくれないものですから、住所も電話番号も分からないですよ」

老女は悔しそうに少し口を失らせた。

彼女は白地に細い緑の縞の着物に焦げ茶色の帯をしていた。白髪交じりの頭をすつきりと結び上げ、背筋をピン伸ばし、ちんまりと座っている。

「ああ」と牧師はパズルの最期のピースがはまったように状況を了解した。

「もう、沢山歩いてお疲れでしょうからお家に戻りましょうか」

と聞くと

「そうですね」

と観念したように言つて、懐から書き付けを取り出した。

紙を見ると住所と電話番号の下に「大変ご迷惑をおかけして申し訳ありませんが、連絡をよろしく願います」と書かれてあった。電話をすると神崎牧師も名前を知っている老舗の呉服店で、すぐに孫娘と名乗る女性に替わった。

「私の祖母です。大至急、迎えに参ります」と大層恐縮して電話を切った。

「息子の正太郎は本当に優しく良い子でした。自慢の息子でしたが、嫁と折り合いが悪くて家を出たのです」

老女は、ぼつり、ぼつりと身の上話を始めた。

神崎牧師は質問を挟まず「うん、うん」と相槌を打ちながら聞いていた。

二十分もすると、教会の前に青いアウディが止まって、まだ若い、ほっそりとした着物姿の美しい女性が急ぎ足で降りて来た。

「すみません。お手数をおかけしました」

と頭を深々と下げ、手に持った菓子折りを差し出した。毎度のことといった手慣れた感じであった。

老女と神崎牧師が睦まじく話しているのを見て、女性は少し躊躇してから事情を話した。

「私の父は、絵描きになりたいと言って、家業を捨てて、アメリカに渡り、そこで病死しました。母は私を育てながら祖母を手伝って店を切り盛りしてきました。この頃、祖母は時々父が死んだのを忘れるのです。母が父を追いつ出したと思っっているようです。母は父のお蔭で随分と苦労をしたのに、祖母は母を悪者扱いにして」

女性は形の良い赤い唇をかんだ。

「でも絵描きになるのを反対したのは祖母です

から、そうやって人の所為にでもしなければ生きていけないのですよね」

女性は少し喋り過ぎたように急に言葉を切つて、老女の手をしっかりと握りながら何度も頭を下げて帰って行った。

祖母と孫娘はほっそりとした姿形も意志の強そうなあごの線も良く似ていた。そこには明らかに血の繋がりが感じられた。二人が帰って行く家は、夫々が喪失の空虚を抱えながらもお互いを許し合い、寄り合う暖かい場所に違いないと神崎牧師は感じた。そうであつて欲しいと願つた。

教会員の中にも高齢になつて「先生、先生」

と同じ話を二度、三度と報告する者もいる。

祈り会の曜日を間違えて、アタフタと違う日に駆け込んでくる者も珍しくはない。

しかし、あの老女のように自分の妄想の世界に生きている者には初めて出会つた。

牧師は人の心の不思議を思つた。いや、人の脳の働きの不思議さである。記憶は書き換えられ、自分の都合の良いように塗り替えが可能なのだ。過去は確かめようがない。真実の所在は藪の中である。

神崎牧師は濡れたようにテカテカと光る赤い唇を思い出していた。あの唇は何と言つただろうか。

記憶は濃い霧の中に閉ざされて何も思い出さない。

神崎牧師は部屋へ戻ろうとして、郵便受けに何通かの郵便物を見つけた。それを持つて。パタパタと階段を上つて行った。

時計を見ると三時半になるところであつた。

このままでは悦子さんに「先生、今日の説教はまとまりがなかつたです」と言われかねない。

郵便物は五、六通あつたが、その中の一通が白い封筒の私信であつた。まずそれを手に取つて見た。九十二円切手が貼つてあり、手に微かな重みを感じた。

宛名は丁寧な文字で緑ヶ丘教会内、神崎守様と書かれてあつたが、裏の差出人には、遠慮がちに喜久と名前だけが記されていた。

神崎牧師は小さく溜息を漏らした。

匿名の手紙の封を切るのは気が重い。素性を秘して書かれた事柄に何処まで真摯に向き合え

ば良いのか分からなかった。

人を告発したり誹謗したりする手紙は読んだだけで、見知らぬ人の悪意がたばこの煙のように心に沁みつくのが辛かった。

それでも神崎牧師は花柄の切手を傷つけないように丁寧にハサミで封を切った。

「突然お手紙を差し上げる失礼をお許しください」

上質な白い便箋にペンで書かれた文字がびっしりと重なっていた。

神崎牧師は何か真剣な雰囲気を感じて、少し姿勢を正した。

先生、イエス様を信じたら本当に人の罪は許されるのでしょうか。

私はこの頃、早朝に目覚めるようになって、何度か先生の『希望の光』というラジオ番組を聞きました。そして先生のお話に変な興味を持ち、お優しいそうなお人柄に甘えて、失礼を顧みずにお手紙を書くことにしました。

私は、先日余命四か月の宣告を受けました。膵臓癌の末期だそうです。

今のお医者さまは全く事務的ですね。インフ

ルエンザとか、逆流性胃炎とかの病名を告げるように淡々と「膵臓癌の末期。手遅れで、治療法はありません」って、検査結果を話すのです。こちらは何の心の準備もないのですから、まあ、愕いたと言いか啞然としました。

私は今年の誕生日で七十三歳になります。平均寿命にはまだ十年以上もあるのです。

腹痛と体重減少があつて、胃腸の具合が悪いとばかり思っていました。胃腸科の病院には半年以上も通っていたのですから、突然、手遅れと言われても私には信じられないことでした。

今でもこの診断が医者者の誤診のような気がするがあります。

「すみません、検査の結果を見間違いました」とあの薄情な医者が謝る姿を想像したりします。

何だか未練がましい手紙になってしまいました。こんなことを聞いて頂くためにこの手紙を書いているではありませんが、私は連れ合いに先立たれ、孤独の身の上で、愚痴を言う相手もないのですから、どうぞ大目に見て下さい。

私は神も仏も信じていませんが、いよいよ死ぬとなると自分が犯した罪を誰かに告白しなくては死に切れない気がするのです。

もう四十年も前ですが、不倫のために子どもを捨てたのです。自分の犯した罪の深さに慄いています。

私と夫は小さな地方都市にあった会社で出会いました。私は派遣で、夫は東京の本社から出向で来ていました。夢中になったのは夫の方です。

夫と書きましたが、今はもう夫ではありませんので、ここから先は「元夫」と書きます。

私は学歴も短大卒で、安月給取りのサラリーマンの娘でした。ただ幼い頃から小町娘などと言われ、年頃になってからは美人で通っていました。男性にも多少はもてました。

自慢しているように思われるかもしれませんが、そうではなく、元夫が慣れない街で私の人間性ではなく、外見に惑わされたのだということです。

元夫は有名な大学を出たエリート社員で、実家も由緒のある名家でした。

身分違いの結婚ですから、元夫の方では親や親戚が挙って反対しました。でも元夫も若かつたのです。反対されるほど、恋心が燃え上がるという状態でした。後から、じつくりと若氣

の至りを後悔したことだと思えます。

私は友人たちに羨ましがられ、玉の輿に舞い上がっていただけなのです。今になってみればどれ程、元夫を愛していたのかは疑問です。

元夫は暫らくして本社に戻ったので、新婚生活は東京で始めました。

間もなく男の子を授かりました。私は、もう子どもに夢中でした。子どもがこんなにも可愛いののだとは想像もしていませんでした。

元夫も子供を可愛がり暫らくは平穏な暮らしが続きました。

でも子供が生まれても夫の実家は私を嫁とは認めてくれず絶縁状態が続いていました。

私は東京では全くの田舎者で、友人も知人もおりませんでした。私程度の美人は掃いて捨てるほどいました。

そのうえ、夫の希望で子どもが通った幼稚園も、私立の小学校も所謂ハイソな人たちの集まりで、何の取り得もない平凡な私には周りの人が眩しいばかりでどうしても馴染めませんでした。

そんなことで元夫の愛情も徐々に冷めていき、私には内緒で実家に入り浸るようになっていました。

私は子どもが小学校に入学して時間に余裕ができた頃、近くのカルチャーの広告を見て詩の教室に入りました。講師は五十代半ばの男性で少しは名前の知られた詩人でした。

私は小さい頃から読んだり書いたりすることが好きでしたが特別な才能があるとは考えたこともなかったのです。ところが、その教室では思いがけずに私の詩が高く評価され、私は有頂天になりました。

私は初めて自分の居場所を見つけた気がして詩作に夢中になりました。

そして、指導する講師への気持ちが尊敬から恋心へと変わっていったのです。

講師は妻帯者でした。私も夫のある身ですから、二人の関係は世の中でダブル不倫と呼ばれる許されない関係でした。

世間的には余りにも陳腐な話ですが、でも私たちは真剣でした。

彼は元高校の教師で、体を悪くして途中退職したのですが、奥様も教師でまだ在職中でした。二人の息子さんは大学を終えて社会人になっていました。

私の元夫は怒り狂いましたが、世間体もあるので、その男と別れるのなら今回は許そうと提

案してきました。でも私の夫への気持ちは冷めきっていましたし、講師に対する気持ちは後戻りできないくらいに高まっていました。

子どもが問題でした。

私の息子は小学校の三年生で、まだまだ母親の手が必要なほんの子供でした。

それなのに、私は夫の提案を退けて、真夏の暑い日に身一つで講師と申し合わせて家を出ました。息子は学校へ行っていました。

その日は水曜日で、夫が残業なしで早く家に戻って来る日でした。それが私のせめてもの心配りでした。

幼い子を捨てたのです。私は非道な母親です。でもあの時はそれ以外の道は考えられなかったのです。

ただ、心の奥底では、私が連れていくよりは元夫に付いた方が息子の将来は開けるだろうという息子のための計算もありました。

他人が聞けば卑怯な言い訳と感じるでしょうね。

夫はすぐに離婚届けを出して、元夫になってしまいました。

講師の奥様は離婚を承諾しなかったので、私たちはずっと内縁関係のままでした。

それが奥様の意地であったと思います。

私たちは東京を離れ、地方の小都市でひっそりとささやかに暮らしていました。外からは、幸せて穏やかな日々に見えたことでしょうか。でも、私の心は、息子のことで、深く傷つき、罪の意識に苛まれていました。

でも、息子は幸せに暮らしていると、そう信じていました。息子には何の罪もないのですから。

それが十年以上も経つてから、風の便りに息子の死を知りました。東大受験に二度失敗して、自ら命を絶つたそうです。

息子は祖父父母に母親の血を引いているから、頭が悪いのだと言われ続けていたそうです。

元夫の実家の人たちは大切な自分の息子の人生を狂わせた女を憎んでいたのでしょう。それで私の息子も愛することができなくなったのです。でも半分は元夫の血ですのに。

息子は母親の名誉のために東大を目指したそうです。息子は自分を捨てた母親を恨んでいなかったのでしょうか。

神崎牧師は心臓の鼓動が早くなり、息苦しく

なつて大きく息を吸った。

手紙を読み進みながら、もしかして自分を捨てた母親からの手紙ではと疑った。しかし話の内容が余りにも嘸み合わなかった。

神崎牧師の母親も小学一年生の彼を捨てた。父親がアル中で母親に毎晩暴力をふるっていた。そしてある日、母親は裸足で逃げて、そのまま帰ってこなかった。

「男と逃げた」父親からそう聞かされていた。その当時の記憶は濃い霧の中で、鮮明に覚えているのは母親の赤い唇だけである。あれは紅の色だったのか、いや唇が切れて流れていた血の色ではなかったのか。そして、何か言ったはずだ。

「さようなら」と言ったように思っていたが、喜久の手紙を読んだ今は「迎えに来る」と言ったような気がした。

時計は四時を回り、空の色は青いままに夕暮の気配がそこはかとなしい憂愁を漂わせていた。

母親がいなくなつて一年も経たないうちに父親は肝臓癌で亡くなった。

天涯孤独になった神崎少年は施設に引き取られた。施設の近くに教会があった。おやつに惹かれて日曜学校に通うようになり、高校生になつても続けて通っていた。

内気な神崎少年は学校や施設よりも教会の一番後ろの席にひっそりと座していると心が落ち着いていた。

母親に捨てられたのは自分が悪い子だったからだという自責の念が幼い神崎少年の心を蝕んでいた。顔をあげて世の中を歩けない、そんな罪悪感があった。

何時の頃からか「浮気者で、男と逃げた」と言う父親の言葉に縋るようになった。悪いのは自分ではない、母親なのだ。

今はどちらも違うように思えた。そうすると記憶の霧が風に流されるように少し晴れて、母の白い小さな顔が思い出される気がした。

母は何時も少し悲しそうに、でも優しい笑顔で神崎少年を見ていた。

神崎牧師は自分の思いから離れ、心を平らにして、手紙の続きに目をやった。

息子が私を憎まなかったことで私の罪は何倍

にも重くなりました。

実は今回、病気になったのは罰が当たったのだと思うと少し気が晴れます。僅かでも償いができると思うからです。

先生は人間の罪と許しについて話しておられました。それから永遠の命について。

私の罪は許されるのでしょうか。もし許されるのであれば、私の魂は息子とどこかで巡り合うことができるように思うのです。

先生は取り成しの祈りということも話されていました。

私と息子のために祈ってください。先生の神様に宜しくお願いしてください。

これから死ぬ時までの肉体的な苦しみは全て受け入れるつもりでした。でも例の薄情な医者「ホスピスで痛みは完全に抑えます」と言ってくれました。ご親切なことです。

長々と取りとめもなく書きましたが、自分の気持ち聞いて頂いて、少し楽になりました。

ここに書いたことは一緒に暮らした彼にも話したことはありません。話すまで私の罪に引き入れるような気がしたからです。

手紙を読んで下って有難うございます。お祈りを忘れないでください。私はそのことを心の

支えに死ぬまで頑張ります。

神崎牧師は両肘を机について頭を抱えた。

自分の感情を鎮めることも考えをまとめることもできなかつた。

それで、目を閉じ、頭を垂れて喜久と自分のために静かに長く祈った。

階下の礼拝堂からピアノの音が聞こえて来た。気づかなかつたが、聖子さんが明日の演奏の練習をしているらしい。

耳を澄ますと讚美歌三百十二番、神崎牧師の好きな歌であつた。

いつくしみ深き友なるイエスは
罪とが憂いをとり去りたもう

こころの嘆きを包まず述べて
などかは下ろさぬ負える重荷を

声には出さなかつたが心に歌詞が浮かんできた。

聖子さんは鈴木長老の一人娘で、神崎牧師がこの教会に来る少し前に東京から出戻ってきていた。

優秀な成績で東京の音大を卒業してプロのピアニストを目指して勉強をしていた。ところが

指揮者志望の青年と恋に落ちた。

彼女は自分の夢を諦めて、相手の青年を助けるために働き始めた。

鈴木長老の家は夫婦と聖子さん、弟の家族全員が信者のクリスチャンホームであつた。

鈴木夫妻は熱心な信者で、牧師の補助となる長老の重責を十年以上も担っていた。

信仰を守るためには信者同士の結婚が望ましかつた。そして信者の若者たちの殆がそんな結婚をしていた。未信者同士が結婚して、片方だけが信者になることは良くある。しかしそれも家族の理解がなければ日曜日ごとの礼拝出席や、様々な教会の関わり合いの中でストレスを抱えることになるのだ。

長老の娘が未信者と結婚するというので教会は大騒ぎになつた。しかし、誰も二人の結婚を阻止する権限は持っていなかつた。

聖子さんは親の反対と、教会中の懇願を退けてその男性と結婚した。

その男性は指揮者として成功の階段を昇り始めると更なる飛躍を求めて聖子さんを切り捨てた。長老は聖子さんを東京から連れ戻した。

神崎牧師が出合つた聖子さんは熱烈な恋愛をした情熱的な人にも、男に捨てられて塞ぎ込んだ

でいる人にも見えなかった。明るくて、呑気そうであっけらかんとしていた。

家でピアノを教え、教会の日曜日の礼拝の奏楽を楽しそうにこなしていた。

年齢は神崎牧師よりも三歳若い三十六歳であった。神崎牧師が緑ヶ丘教会に赴任した時に教会中の婦人たちは、お似合いの二人として大いに盛り上がった。

しかし、神崎牧師は結婚する気持ちは全くなかった。誰ともするつもりはなかった。

自分は家庭と言うものを知らない。家庭を持つことは無理だと考えていた。

聖子さんの方はただ、「牧師にはもつとふさわしい人が現れると思います」と言った。

今日は落ち着かない一日であった。

自分は昼間の老女のように自分の過去を勝手に作り変えていたのかも知れない。

そしてその過去がどのようなものであれ、山内氏の言うようにそれに囚われる必要はないのだ。自分の母親もどこかで息子の幸せを祈っているのかも知れない。

太平山の稜線が薄墨色の空に溶け込んでいた。電灯をともしてテーブルの上の見捨てられ

た原稿を見た。

放蕩息子の譬え話の最後は父親が長男に向かつて言う。

「このあなたの弟は、死んでいたのが生き返り、いなくなっていたのにみつかったのだから、喜び祝うのは当たり前である」

自分という存在も「いなくなっていたのにみつかった」のだと思った。神様が喜び祝ってくれている気がした。

自分にも家庭が持てるかも知れない。

悦子さんや、山内さん、鈴木長老、手本は沢山ある。聖子さんの優しいピアノの音色を聞きながら二人で生きてみたいと思った。

神崎牧師は階段の明かりをつけ、パタパタとスリッパを鳴らしながら礼拝堂へ下りて行った。

詩

詩

最優秀賞 巻き貝

井川町 小林 康子

母は時折着ぐるみを着る
透明な着ぐるみを着る

寒いから

怒りたいから

怖いから

着ぐるみを着た母の声は
くぐもる

視線が一方方向になる
表情が見えなくなる

夜半私もその着ぐるみを着てみる
世界から隠れ

私が私だけでいられる

ゆるやかに息をつける静穏な広がり

透明の自在さ
大きくなり小さくなる私という存在

母の折り重なったものが
さらさら抜けていく

つかみよのない何かに
この中なら向きあえる

混沌としたやわらかさの内へ
静かに

深く
沈む

脚がすくむから

思いが揺れるから

着ているものが

一枚ずつはがされるから

喧噪から身を守り

自分の世界に引きこもる

海の巻き貝のように

母は時折

透明な着ぐるみを身につける

奨励賞 雨の蝶

大仙市 深町 一夫

天気予報の

太陽マークを裏切って、

醒めかけた夢の中にまで

雨が降っている。

それは左肩の

腱が切れてしまって、

ドクター・ストップのかかった

夏の予定表のように切ない。

空も病気なのだからと

諦めてはみるけれど、

時の流れの暗闇に

ブラック・コーヒーすら甘い。

テレビのニュースもゴシップも

雨の涙が重すぎて、

デジタル画像のモザイクも

再起不能に消えてゆく。

雨という字の中にまで、

雨はそぼそぼ降り続き、

それでも雨は哀しくて、

雨の海には地球が浮かぶ。

机に置かれた画用紙に

詩の一行を置いたなら、

カーテン越しの雨音が

言葉をやさしく溶くだろう。

湿度の高いため息で

ベッドの横に手を伸ばし、

雨音濡らす心にも

ヘッド・ホーンを付けてみる。

音を忘れたグルルドの

不眠を治すその曲は、

医者が見んだ手術の糸を

蝶のかたちに変えてゆく。

やがて大きな雫が落ちて

みどりの葉陰に目覚めた蝶は、

時をかけゆく少女のように

虹の光に飛立つだろう。

奨励賞 銘度利加^{メトリカ}

秋田市 十田 撓子

さきの世で繋がる人たちはどうに立ち去った
とても遠い呼び声を
ずっと聞いていたような気がする

人口に鍵はかかっていたいなかった
焚き染められた香の名残で清められている
その家で、金縁の聖像^{イコン}を見初めた
閉ざされた扉の上にあつて
薄青色の衣をまとった白哲の、かの人は
右手を大らかに掲げ、掌を隠さず
左手にはこちらへ開かれた書物を携えていた
どこかで、見知らぬ父母^{おちはおは}の声がうたう
閉ざされた扉の向こう側から
語りかけるように聞こえてくる
受け継がれなかった物語

乗り込んだ船は壊れていた
戊辰の果ての泥船は、落ちていく箱さながら
揺れに揺れてあちこち叩きつけられた
息を止めて、ひたすら痛みをこらえた

この船のゆくえを

自らの意志として努めて引き受けたのは

敗残者、迫害された者、脱走者、

蝦夷、奥筋^{おくすじ}からの者、混血のみなしご

故郷を二度と見ることは叶わない

北の辺境をさまよう一群

十和田の湖を見下ろす岨^{せま}で古馬は呻吟する

崖下の紺碧の、計り知れない巨大な沈黙

精霊たちの特別な話し声が真空でざわめく

湖水が小波立ち、何か黒いものが渡る

原始のプナの梢が白くひらめいてそよぐ

こちらへと、さしまねく人の姿

不遇をかこつ者たちは慰めと祝福を受けた

与えられた名前はすべて名簿に記された

銘度利加ⁱⁱⁱ、生の証し

内なる祈りによつて生きながら殉じる

運命をさだめるもの、その手が

何者のものであるかを

考え尽くさなければならぬ

それは巡礼^{ちかひ}の誓

山の奥深く、古の来満道^{らいまんみち}

伝教者と共に国境の隧道を歩いた人たちがよ

大主教の日記に留められた湯坂の上の椽^vよ、
かの人のなつかしい面影は

落日に消えたあの絵姿は、いま何処か

もはや誰に尋ねるすべもない

銘度利加に記された名のみの人々、父母よ

永い眠りにあつて、尚も、尚も生きよ

i ハリストス正教会で用いられる聖像画。

ii 現在の鹿角市大湯から来満山中を経て青森の三戸へ至る
道筋を奥筋往来といい、これを越えてきた人を大湯では
「奥から来た」と言った。それは向こうの村人ではなく、
むしろ、維新と戊辰の不遇に遭つた旧土族、鉱山労働者、
外国人及び北方系移民、隠れキリシタンの子孫など公に
されない人々と伝承される。

iii 正教会の信徒原簿。

iv 奥筋往来と同じ。幾つかの峠ルートがあり、鉱山の坑道
を隧道（トンネル）として物資を運んだほか、日本に正
教を広めた聖ニコライも明治十四年これを歩き大湯を訪
れたことが記録されている。

v 明治二十六年に大湯を再訪したニコライは宿泊した信徒
宅の坂の上にあつた椽を愛で、いつまでも見上げていた
という。「ニコライの日記」にもその記述がみられる。

奨励賞 ん

由利本莊市 豊島 カヨ子

んと目を丸くせば聞き返して

うなずけば 同意

ん、ん は疑問か つつ込み

んーん は考え中となって

んだな はそうですねと同調

今日 何気なく思った

ん は

五十音の一番尻さ

ぼつんと 独りぼつちだと

標準語なば

ん から始まる言葉が無^ねんだと

なんだが 可愛^{んどさがね}想^ねなあ

んだども 大丈夫

私^{おえだ}達のしゃべことなば

ん は大活躍だで

んだなあー と優しくのばせば

好意的な共鳴の証しとなって

小言や文句・悪態の話さなば

絶対に出でこね 相槌となる

ふと 気がつく もしかして

今の自分の日常さ一番必要なのは

んだなあー の言葉かもしれねなど

んだ んだ……

んだ は納得 同意で

んだんだ はさらに同意を強調

んでね は否定で

んだども は別の意見有り

んだが は^がの^{こわね}声^ね音^ね次第^ねで

問いにも納得にもなるし

んだろ は同意の催促になる

まだあるぞ

入選 私のことなど

秋田市 谷 恵美子

私のことなど誰も知らない

だって私の情報は

固く守られているのだから

たどえ孤独を感じても

強固な守りが最優先

家族のことさえ

証明なしには語れない

今日も私は

堅固な守りを盲信し

住所と氏名と

大事な事項を書き込んで

重ねて署名捺印を繰り返す

鋼の鎖を追加するため

私が私であることに

さらなる同意を求められ、

秘密厳守の約束を取り結ぶため

個の私を提示する

で、いったい

何を守っているというの？

扉は二重三重に施錠され

自身の手で触れることもできないのに

見知らぬ誰かには筒抜けだなんて

何が分かるというの？

本当の私のことなど

知らないくせに

入選 哀しみの貯金

秋田市 秋仁 由紀

つくづく思った

喜びはすぐ消化される

そして 一瞬で開花される心地よい感情

でも 哀しみは決して消化されることなく

どんどん蓄積されていく

少なくとも私の場合は

そう まるで貯金のように

こんな貯金いらぬ

もしも「感情銀行」があつたなら

私は一生哀しみを預けたまま貯金をおろさない

だろう

父が亡くなった哀しみを胸にずっと抱えたまま

どうすることも出来ない現実

どこか静かな誰もいない山の中で

独りで思いつき泣きたい

そう これっぽっちも泣けていないのだ

泣きたいのに：

煩わしいことに

泣く間もなく現実の生活を続けなくてはならない

そうやって人は 哀しみを預けたまま
生き続けるのだろうか

そして 時には感情銀行から

「哀しみ」をおろして泣くのだろうか

「明日ね」

「今度ね」

「もう一回」

今まであまりにも簡単に使いすぎていた言葉が

あれ以来恐ろしくなった

父を入院させ 帰りに

「あさつて退院できるみたいだよ 明日また来

るからね バイバイ」

それが 父との最後の会話だった

そう ごく普通の会話

「明日」の来ない日はないけれど

父はもう帰って来ない

もう一回 お寿司屋さんへ連れて行きたかった

な

もっと茶の間に会話すればよかったな

毎日 散歩に連れ出せばよかったな

「もっと」や「もう一回」の後悔が

後から後からやってきて止むことがない

その中でも最大の「もう一回」は

動物園へ連れて行って 今度こそ象やキリンを

見せたかったこと

私もいつかそっちへ行ったら 出来なかった親

孝行を思いつきりさせてね

パパ 今までありがとう

私が逝く時は迎えに来てよ

絶対だよ

入選 家族もどき

能代市 渡辺 正子

受話器のむこうの弾んだ声

おまえは 言った

ネコを飼ったの

生まれ落ちた 記念の日

人と群れるのが苦手なおまえが

家族にネコを選んだという

保護センターの檻の中

哀願する目に 手招きされた

誕生日に ネコなんて…

数ある生き方の中

その道にやっと辿りつき

現在^{いま} 数ある家族に

捨てられた猫を選んだ

大丈夫 大丈夫がおまえの口ぐせ

不安の裏返しとも気づけず

手を振るおまえを

のほほん^{ほほん}と見送った春

想い出を置いてけぼりに
旅立った子よ

世間を妙に狭くして

早くに 大人になってしまった

ネコのほの暗い生き方に

ひき寄せ合うものがあつたの

朝起きて 大きな欠伸をし

餌と愛をねだる

四角い部屋で おまえを見つめるだけ

猫なで声など無縁で

ぶきつちよな生き方を通す

そんなおまえの 幸せを招き入れる

存在になつたらいいね

走り続けるおまえに

ネコはただ 纏わりつくだけ

もしかしたら

おまえを呼ぶ

かあさんの声に似てたのかな

おまえの落とした幾多のため息を

拾ってくれたらいいね

寒い夜 お陽様になつたらいいね

誕生日にネコを飼った

ネコは家族になった

今日も傍らで ニャーと鳴き

私のように 娘をみーと呼ぶ

入選 まな板の音がする

秋田市 鈴木 いく子

何という木なのか知らないが
時々いい音がする

『カン』と

まっすぐな

突き抜ける

日本古来の楽器のような

厳かな音もする

モロヘイヤを刻んでいる
まな板の上でトントントン
リズムカルに響いている

季節によつては

ミズやワラビ、ギバサ

まな板の上で叩かれる

青臭い草っぽい春の香り

ミズたたきワラビたたき

味噌や山椒を入れてみる

茶色から真っ青に変わる

生臭いような海のギバサ

トロリとするご飯の友に

どれも粘り気があつて

喉越しがいいが

叩く方も根気が要る

力まかせの音もする

昔からある厚い木のまな板は

年に数回

ひたすらに叩く日

そんな日は

季節の素朴な匂いが

台所に広がる

グリーン賞 はさみ

由利本莊市 菅原 聖 美

みんな はさみを 持っています
見えない はさみを 持っています
裁ちばさみ すきばさみ 工作ばさみ
人によつて かたちは いろいろ

その服、今流行つてないよ
じよき じよき じゃきん
その髪、似合つてないねえ
しゃき しゃき しょきん
いっしょにさ、テキトーにやろうよ
ざあぁー じゃっきん

みんなで わたしを切りとつて
古くさいセンスで 不器用な手先で
頼んでもないのに わたしを削つて
おそろいだねつて 笑い合つ

切り刻まれた わたしの残骸
使い古された雑巾ほどの 誇りも持てず
ごみばこに ぽい と捨てられて

燃えるごみの日に バイバイですか

悲しくつて しかたがない
悔しくつて しかたがない
ぐいん ぐいん 腕をふりまわして
ぜえ はあ 息をきらして
叫びたい 喚きたい

ほんとうは
かわいい お洋服 着たいです
自由に ヘアアレンジ したいです
全力で 努力 したいです
わたしの 全部 受け入れてほしいです

だつて わたしは
ひらひらの 布きれでも
ばさばさな 髪の毛でも
ぺらぺらな 紙の切れ端でも
ないのだから

なのに ぐにやりと うごいた唇から
もれた言葉は ありがとう
どうやら 今日

燃えるごみの日だったようです

それなら
わたしも 切りとりましょう
みんな 切りとりましょう
そして ぐちゃぐちゃに そろいましょう

グリーン賞 銀河

青森県弘前市（由利本荘市出身）

工藤 望

眠れぬ夜、

あおくつめたい田んぼを越えて

潮吹く列車の声がかこえた

LW100Vはどうに眠り

煤は闇に融けぬまま

脳幹を震わす鈍^{にび}た音が

胸に一本の釘を刺した

頭の中ではとおくとおく

銀河鉄道が走っている

短
歌

短歌

最優秀賞 春の教室

秋田市 石田 幸栄

授業中挙手競ふごと子どもらは目を輝かす春の教室

おとなしき子もゐる春の教室に寄り添ふやうに朝顔は咲く

利かん気の子どもに怖気付く子どもさままにゐて愉しきクラス

校庭のポプラの木より見守られラジオ体操操励む子どもら

詩人ゐて大将もゐて放課後の春の教室個性あふるる

寝ころびて五月の空を傾ち合ふ少年少女夢限りなし

黒板の教師の文字を書き写す子の眼差しは未来見詰むる

奨励賞 八橋伝説

秋田市 貴志 白柊

細々と八橋油田の生き延びて息づきてをり黄色のポンプ

苔むせる官軍墓地の全良寺いまだ漂ふ無念の気配

知られたるサナトリウムの影消えて旧国道に寂しき日差し

キリシタン殉教地なる草生津の刑場跡に石の大仏

目立たざる「おでんつあん」とふ社なり閑に坐せる筆塚七基

志望校書く学生の絵馬多き山王さんは紅葉頻り

ひところは競馬場とふ草地にて男ら燃えし八橋伝説

奨励賞 川と共に

能代市 塚本 佐市

園児たち声をかけかけ放流す稚鮎けなげに瀬に向き直る

沼守が水門操作して眺む川に代田に映ゆる夕焼

雑草に紛れ群れ咲く捩花も蛇行して来る川も生きもの

草いきれしげき川辺にゆらゆらとサーカステントとんがり建ちぬ

里川のさやけき音に近寄りて児ら蚩呼び歌声となる

滝壺を溢れふたたび川となり海へ急ぐ瀬に胡桃また落つ

父の忌に母の忌も済みひとときを鯊釣る河口の空ただ広し

奨励賞 穂孕む稲穂

仙北市 千田 千佳

本籍地離れてすでに五十年荒れ地となりし家跡に立つ

茅葺きの家の跡地に虎枝の伸び立ち白き花に蝶舞ふ

夫や子と食べしすもの木の朽ちて細き流れの上に横たふ

五十年変はず流るる水音に虹鱒飼ひぬし舅偲びをり

この土地を離るる時に委託せし田の耕作は今年限りと

屋顔の咲く土手降りて畔に立つ今年限りの稲は穂孕む

夫逝きて二年は過ぐ家跡に続く稲田を守る術なし

入選 戦史

秋田市 竹下 氣平

無神論者ですと言えば目をむきぬ神風信じた昭和の世代

焼夷弾にバケツリレーで立ち向かう戦さの途今なら笑える

終戦時軍曹の位に持ち帰る父の軍刀錆び付くまゝに

廃校の敷地に残る奉安殿平和に在れば不毛の遺産

終戦のひと月前に母逝けり帰還の父の顔は見られず

抗日へ軍事パレード何になる日本は疾うに棄てたる戦

「平和の為の戦争はあり得ない」秋山ちえこ心離れず

入選 花の咲くころ

大館市 小林 瞭悦

薬師山に辛夷たいちやぎの咲き初めて裾野の村の田打ちはじまる

堰普請 道普請終え村人は花見酒酌む満開の下に

咲き匂うエゴの木下のあぜ道を少女は小屋の包み下げ来る

屋根葺きの妻も屋上で身の軽しアカシヤ咲ける木々より高く

野良終えし母を自転車に少年が桐の花咲く坂を漕ぎ来る

マルメロの初夏をすがすがしく朝棟上げ賑わい槌音はずむ

懐にコスモス揺らす風を受け汗を拭きおり豆打つ婆さん

入選 さくら

由利本荘市 熊谷 すが子

幹黒く雨に濡れつつ静もれる桜はあまた蕾をむすぶ

漲れる力弾けて桜木の梢やうやく花開き初む

さながらに思ひを遂げてこのま昼桜一気に満開となる

しろじろと花咲きみちて朝日差す桜は磁器のごとく冷たし

思ひ出の桜言ふ母満開の桜かの日の社の桜

ひとときの風に花びら散り初めて桜はその後とめどなく散る

散りしきる花びら風にさらはれて風のはたてに吹き溜りをり

入選 庭の白

横手市 佐々木 ヨリ子

こでまりの米粒程の花びらを足にからませあめんば泳ぐ

自生せしほたるぶくろは門先に竿燈さながらゆれて夏呼ぶ

風無きに白芍薬の崩れ散る子育て、介護、なつかしむ夕

大家族に幾度煎じし妣ならむげんのしょうこの株増えて咲く

四季に添ひ移りゆくもの静かなり朝に咲く沙羅夕べには落つ

遠目には沙羅と見紛ひからすうりレースの白花夕闇に浮く

根こじ来て瓶に挿したる半夏生白の葉みどりに戻りつつ秋

入選 点景

秋田市 照井敬司

梅雨晴の陽射しに庭草勢いゆく負けじと聳る老いの一徹
梅雨明けの花店明るし切り花のグラジオラスの花軸多彩に
新しく今日の始まる暁に熱帯夜の余熱窓を開け追う
夕立ちに降り込められてコンビニでしばし立ち読む週刊ポスト
熟れ赤きミニトマト摘む日暮時蚊に刺さるるを払い払い
農業に転職果たせし青年の未来を語る農民の顔
今に見る稲田の案山子朴訥になくはならぬ点景として

入選 苔むす石に

秋田市 佐々木鏡子

「泣いてるよ」雪に撓むる老木のいちひを指差し幼は告ぐる
芽ぶきたる樹々の間より太平の山巒ふかく残雪の見ゆ
枝差の見目麗しき夫婦松手を尽くせども日々末枯れゆく
御祖より継ぎきし家を捨てむとし幾夜を迷ふ星仰ぎつつ
廃屋となりゆく庭に小鳥らのさへづり聴きつつ在りし日偲ぶ
とこととはに遺るものをと購ひし母の頭ちくる苔むす石に
繁茂せる下枝払へばさはさはとわが影ゆらし風わたりゆく

入選 祭

由利本荘市 佐藤榮悦

電車待つホームに風は祭礼のかすかな笛のひびきをはこぶ
土手をゆく山車の明かりは連なりて川の面に映えゆらめき流る
夜の闇を大太鼓の音ひびきくる原始の祭り呼びいるごとく
観衆のとよむ竿灯大技に抱く幼は身をかたくする
舞い終えて社殿を降りし獅子頭つどう人らを八方に囀む
打ち揃い神輿をかつぐ男らの白足袋歩む調べとのう
笛太鼓総身にあびて社より帰りきたれば常なるうつつ

入選 湖底探査

仙北市 大山文穂

国鱒の再生の道探るべき調査ときけば期待ふくらむ
湖底なる探査カメラの照明に堆積物が白く舞ひ立つ
湖成りてはじめて覗くその底ひ瞬き惜しみ映像に寄る
雪解けの濁流渦巻く田沢湖の意外に静か闇の底ひは
水位変動の被害のさまは岸にこそ残りをらむとわれは思へど
絶滅とされし国鱒移殖地の西湖にいのち存へたりき
国鱒の復活あらば環境の奇跡と後の世まで残らむ

入選 時の流れ

にかほ市 佐藤 静子

真昼間のひかりあまねき雪原を鶴の群鳴きつつわたる
大根を掘らんと雪を除きたる窪みよりたつ土の香りは
夕ぐれの路地に街灯ともらんとしてまたたくは息づくごとし
くれなゐの海の夕焼け見るわれをめぐりて時に砂とぶ音す
むらさきに煙りて森の見えぬるはにはかに木々の芽吹きゆくらし
バス降りてひとり歩めば春潮のかをりも旅のあはれをさそふ
みづうみの面を移りゆく雲よ時の流れと言はばいふべし

グリーン賞 色

由利本荘市 田口 友実

朝の五時寝たふりしながら感じてた消えた足音紫の空
大勢の中にゆらゆらクラゲたち青白い中何を思うか
プラタナス緑の中に入り込みふと見上げれば果てない緑
五年ぶりラムネの瓶は青春色今も変わらぬ匂いと共に
「雲みたい」そう言うあなたの赤い口溶けた綿菓子ピンクに染まる
涼しさに腰を下ろすと熱感じ黒の中にも太陽の影
深い青沈む橙ゆらめいて時間と共に全て消えゆく

俳

句

俳句

奨励賞 後三年合戦

奨励賞 夏書

横手市 高橋 遙

秋田市 松井 憲一

最優秀賞 羽後天天

秋田市 和田 仁

拗れたる身内の戦弟切草

兵糧攻め折り重なりし杉落葉

修羅の日の血飛沫天に実南天

泰衡の首桶の蓮実を結ぶ

鉦叩永久に眠りぬ敵味方

若武者の潜みとふ沼水澄めり

弔ひは稲田百枚古戦場

夏書すや母の遺愛の端溪硯

良寛の臨書を連ね夏書とす

まなうらに亡き母置きし夏書かな

夏書する一字一字の清らなり

母訪はむ夏書の墨や海に満つ

空の字を揃へて写経夏逝ける

秋声のはやいづくより経納む

連山を越え来し羽後の初茜

もてなしも家訓のひとつ木の芽和へ

羽州嶺の全貌あをき五月来る

早乙女の指の先まで繁忙期

羽後の地に絵巻なしたる踊りかな

野となりし真澄の道や女郎花

完璧な冬天家郷毅然たり

奨励賞 永久の旅

秋田市 大橋 風太

病む妻に靴を揃へて菊日和

車椅子押す手に触るる秋桜

秋時雨妻頷きて永久の旅

亡き妻に声掛け灯す秋の暮

手入れせし妻なき庭の冬薔薇

亡き妻と語るひと時花の寺

妻と手をつないでみたき春の星

入選 保育園

秋田市 種村 聖巴子

入園や泣く子笑ふ子むづかる子
てふてふや一人駆ければみな駆ける
チューリップ結んでひらく手の撓り
天翔ける園児の声やこどもの日
息たてて眠るみどり児夏盛ん
歓声の中ごろごろとさつま芋
運動会すがられやすき保母の腕

入選 菩提寺

三種町 三浦 静佳

父の忌や本堂にみな着ぶくれて
底冷えのくぐもる会話位牌堂
輝の手の母立ち止まる撫仏
山眠る奪衣婆は齒を剥き出しに
梵鐘も響きもむかし冬夕焼
風花や何も語らぬ父の塚
冬虹の架かる菩提寺法事あと

入選 光

横手市 片倉 万葉子

鈴虫の長きひげから星生まる
桃むいて白き光をほうばる日
真つ青に茄でし枝豆きらり落つ
小鳥来て大空の色もらいけり
秋雨を言いわけにして一と日かな
表情の多くなりたる柿の秋
無花果に日のぬくみあり甘さあり

入選 城址万緑

秋田市 進藤 利文

青年のブロンズ像や夏燕
御番所をすこし離れてえごの花
河骨や武将ゆかりの手水鉢
藩制のころに無き景針糸んじゅ
二の丸の池の一角大賀蓮
万緑の久保田城址を歩きけり
青鷺もときに見かくる水辺かな

入選 久保田城

秋田市 上松 ひろし

空蟬や土塁を掴む大櫓
階に膝の痛みし蟬時雨
鐘楼の門閉ざされて葛の花
雨蛙舟形手水鉢きらり
本丸の礎石はいづこ百日紅
殿の馬洗ひし跡の大賀蓮
緑さす三森山や久保田城

入選 母

能代市 岸部 吟遊

角巻の母の翼にくるまるる
割烹着の母に火の香や盂蘭盆会
虫時雨追ひ書き沁むる母の文
耐ふること多き母の世石露の花
雛飾る鏡の中に母の顔
梅酒澄む母亡きあとの月日かな
母在すと秋の灯のともりたる

入選 平和を祈る

秋田市 鈴木 栄司

戦跡の野にあらがわぬ雉ほろろ
かぎろいやグラマンを見た少年期
セピア色遠い日の飢え大夏野
はらからの疎開のきずな素足ぐせ
青田風無口なむらの戦死の碑
水無月や異国の人と碑に合掌
終戦日平和を祈る初心かな

入選 参禅

八峰町 柳川 大亀

参禅の晴着とまとふ寒月光
無心底字ばむ寒の杉木立
降る雪の音のあかるさ結跏趺坐
笹鳴きがとび込む坐禅解きし臍
参禅の素直さすする雑煮椀
絵襖や禅の筆致といふ竹林
参禅のいのちまつさらばたん雪

入選 稲の香

大潟村 田村 陽子

灰均すやうに均して種を蒔く
田水張る一番星に見守られ
白鷺の来てをり舞ふな飛び立つな
照り返す陽を掻き混ぜて田草取
稲の花青き音色の風渡る
稲の香に包まれ吾子に乳飲ます
見過ごせず拾ふ落ち穂や夕茜

入選 払田の柵

秋田市 秋野 護

際やかに政庁の丘青田波
外柵の槍砲痕夏の川
復元の遺構も古ぶ蝉しぐれ
青すすき争闘の血の幾度や
束帯の武官思ほゆ雲の峰
蘇る千年のとき夏つばめ
謎多き柵やロマンの風薫る

入選 蛍の詩

大潟村 佐藤 豊

弟とかこのとりあふ蛍狩
河童淵のぞくもこはき蛍舟
蛍火やちの寝床に北斗星
叔母逝きて母に寄りそふタ蛍
流し場の母の手の止む蛍の火
父刈りし馬草に朝の蛍かな
初恋の君の手もとに蛍籠

グリーン賞 夏の恋

秋田市 杉江 藍

入口の見えぬ世界や昼気楼
木下より紫陽花の美をちらり見る
冒険や夜の火に入る夏の虫
蝉生まれ移り行く世の時を知る
梅雨明けの光に濡れて山の靄
笑み配る天女になつて夏を酔ふ
ひと夏の恋を例えば林檎飴

川

柳

川柳

奨励賞 歳を重ねて

秋田市 谷 口 心 平

奨励賞 希望から天使へ

五城目町 齊 藤 一 輪

最優秀賞 幾曲がり

五城目町 加 藤 円 心

雨しとど 逃れ切れない義理がある
勝つための汗がなかなか乾かない
焼き鳥の煙にまみれ夢が消え
飴と鞭 どうにか物になりそうだ
跳箱の向こうに僕の夢が待ち
返す物 返して春の絵に溶ける
幾曲がり 父の頑固が実を結ぶ

奨励賞 至福どき

秋田市 小 畑 寒 丈

至福どきほわーと過ごす春の午後
日捲りを捲れば時がゆるり往く
あるがまま偏屈じゃない惚けじゃない
こせこせも苛苛もせず身を任す
穏やかに広いところで過ごす椅子
ほうらねっ 笑顔絶やさぬ君がいい
六十年 君と過した時間だよ

ひまわりの笑い上戸に掴まった
汗拭いて凜と生き抜く茄子の花
風船に乗った種です希望付き
いい映画泣いて涙と響き合う
芋の芽が明日を探して突き上げる
真っ白な雪洗われている決意
滝壺の虹が天使を連れて来る

入選 揺れる想い

五城目町 佐藤 ちずる

夏の日の花火の様な恋でした
背伸びして転んだ傷がまだ癒えぬ
花瓶の底水の濁きは我がこころ
愛憎の深さを知っている鏡
満たされてそれでも寒い風を抱く
雨は無色で過去の私を流し去る
そして秋愛は記憶の底で揺れ

入選 二人の城

大仙市 佐藤 啓子

プロポーズ大きな傘になるつもり
凸凹が番いになったミステリー
味噌汁を装う幸せ暴露して
ときめきのページそろそろ鈍化する
定位置を守り続けるくすり指
汗積んだ二人の城があたたかい
真珠婚やがて空気を吸うように

入選 輝く瞳

秋田市 加藤 晨風

厚化粧しても隠せぬ国訛
鬼はそと愚痴も丸めて豆を撒く
ときめかし大空飛ばすホームラン
キラキラの瞳はなぜか嘘が好き
花咲かすピンクでなくていいですか
漆黒のトゲ押しとおす冬の薔薇
サザンクロス閃く冬の月明かり

入選 再起の空

秋田市 石田 幸栄

忘却の彼方飛べない空がある
忍の字を辞書に拾って明日見据え
泥濘ぬかるみに見る青空は眩しくて
生かされている身役目はきつとある
挫折さえ味となるのを待つ夜明け
決意した心の灯り絶やすまい
ロマン抱き再起の空へ漕ぎだそう

入選 村の詩

大潟村 佐藤 豊

百年へひまわりロード愚直行く
夢を追う千拓村のうたせ舟
女子会に故郷の「がっこ」全国区
汗染みるへドロが足を離さない
遠くなる故郷の空の北斗星
亡き兄の村史に語る一ページ
何時の日に湖底のロマン語り逝く

入選 愛反芻

五城目町 鷺 谷 凡 葉

弾まないボールをじっと待って 旬
幸せに背伸びしたくてフライング
旬な娘この得体を知らぬ 魔性
切れそうな仲を取り持つキャッチホン
ネクタイの裏 知り尽くして 愛
仕合せな振り子に澄んだ音がする
愛反芻 グラスの中の回り道

エッセイ

エッセイ

奨励賞 終活の旅

秋田市 嵯峨雄 二

旅のプランは、師走に立て始めることにしている。ずっと行きたいと思いつけてきた幾つかの先について、理屈を捏ねながら候補を絞っていくのである。例えば、「昔、某局のシルクロード特集で見たあの国は、今は世情が安定しているが、紛争地に近いから、今のうちに行っておこう。善は急げだ。」といった具合にある。私の中に眠り続けていた、その場所への旅心を目覚めさせ、長い冬の間に育んで春を待つのである。

過去に兆した旅心が、生涯消えないのは因果な話でもあるが、私の場合、こういった作業は、最近のはやり言葉でいう「終活」の一部と心得ている。そして、まだ幾つか残っているこの作業を終えないうちは、気ままに旅行は楽しめなれている。一種ノルマのようにもなっているが、拙速とならぬように、心して取り組

もうと思う。

ところで、旅心といえば、蕉翁の「奥の細道」序文の一節が、やはり思い出される。洒落の効いた調子の良い文章で、そぞろ神に取り憑かれ、その上、道祖神も手招きしているの、もはや旅立つしかないとの件は、責任を神に転嫁しているようで、落語的な面白味さえ感じさせてくれる。

実際には、蕉翁が事前の手配を何もせずに旅立ったとは考えづらく、蕉門のネットワークをフル活用した、計画性の高い旅だったろうと想像するのだが、旅に関わる様々な困難を灰汁抜きして、読む人を自らの作品世界へ誘う筆法は実に見事である。この序文を読むすべての人に、そぞろ神が取り憑いてしまいそうであるが、蕉翁の旅には、一定の年齢に達した人ならではの理由もあつたのではないかと、わが身に照らして、想像を逞しくしている。

蕉翁は、数え歳三十九の時に真冬の大火で焼け出され、その翌年には郷里の母を亡くしている。「命」を意識させる出来事に、時を置かずに見舞われたのである。母の死の翌年に、彼は墓参のため帰郷するが、その旅を契機に、物に憑かれたように旅を重ねながら、成果作品を世

に問い始める。当時、「人生五十年」という観念があつたかは不明だが、これまでの創作生活の集大成を図ろうとしたようにうかがえる。しかし、蕉翁には焦燥感もあつたと考えるのは、私だけだろうか。

それは、敬慕する西行らの先人が訪ね、自らも訪れたいと願っていた歌枕の地へ、早く行かなければとの思いである。そんな眼で先の序文を読み返すと、肉体よりも先に魂が旅立つて行くような状況が感じとられるのである。そして、この状況は、今の私にも、わずかながら共通しているように、思われるのである。

四十年前の東京、学生だった私は、ある自動車会社のショールームで、清清しい少年の風貌の釈迦像に見入っていた。そして、その日以来、この像のふるさとをいつか訪ねたいと願っていたのだが、今年四月に、その思いを叶えることができた。ジャワ島のボポドゥール遺跡を訪れたのである。

終活の旅に出る時、「若い頃に見たいと思つた風景なんて、今ごろ出かけても残っているはずはない。」との疑念に、私はいつも囚われる。確かに、時が流れれば風景は移ろい、はたまた自分自身も変質して、もう心が動かないかもし

れないのである。私はこの疑念と一緒に、日の出前の薄闇の中、ボロブドゥールの丘を登っていったのである。

しかし、果たせる哉、朝もやの中で探し当てた釈迦像は、薄朱い陽光を浴びて体温を得たようにも見え、実に美しかった。そして釈迦像の視線の先には、巨大な火山が薄く噴煙をたなびかせていた。私はその時、天穹の下、自分が壮大な風景の一部と化しているのを実感したのである。帰り道、丘を下りながら、つくづく来てよかったと思った。憑き物が落ちたのである。

蕉翁は「奥の細道」の完成後、大阪で「人生五十年」を地で行くように生涯を終えてしまったが、その病床でも「旅に病んで夢は枯野を駆け廻る」の句を残している。創作意欲はいまだ衰えず、死の覚悟とも無縁だったように思える。私には、旅を重ねたことで、旅することでは得られないインスピレーションがあることを、蕉翁が体得したように思われてならない。きつと病床では、新たな旅の構想を練りつつ、詠むことができなかつた松島の月にも、想いを廻らせていたのではないだろうか。蕉翁こそが永遠の旅人といえるのかもしれない。

私の残り幾つかの終活の旅にも、旅すること

でしか得られない何かが待ち受けていると思うと、そわそわした気持ちになる。来年の春までには、まだ間があるというのに、もうそぞろ神に取り憑かれたのだろうか。

奨励賞 五月の散歩道

大仙市 小松 紀 子

加齢が主な原因とされる脊椎後側彎症の矯正固定手術を受けてから、来し方を振り返り、行く道を考えながら、四季を眺めて一年が経過した。

手術前は腰曲がりのせいで立っているのも辛かったのが、今こうして歩けるようになったのがとてもありがたい。退院後は家に閉じ籠りがちだったが、そろそろ外に社会に出なくてはならない。そうでないと、あの大変な手術を乗り越えた意味がないではないか。

今日は春の日差しが暖かく、リハビリのウォーキングにはもってこいの一日だ。

体幹コルセット装着の体に、ウインドブレーカーを羽織り、帽子、運動靴、ジム用の指なし手袋をつけた手に二本のウォーキングポールを軽く握って、気分が上がるように身なりを整え、さあ玄関の扉を開けよう。

自宅は国道一〇五号線にほぼ面していて、背側は出羽丘陵の山裾であり、成沢遺跡がある地域である。縄文の昔から生活があったとはいえ、

里山の集落はご多分にもれず、少子高齢化の過疎地である。

国道は避けて、西の山道方向に歩き出す。いつもなら、シルバーカーのご老人と出会う

か否かの道なのに、向こう側から、お揃いのブルーのジャージを着た女の子二人が風と共に軽快に走ってくる。

この限界集落にこんな若い子は住んでいないと思う。五キロくらい離れた市街地の高校から走ってきたのかな。

「こんにちは」と挨拶したいなと思っているうち、みるみる私の前に接近してきた若者たちの澄んだ声が飛んできた。

「こんにちは」「コンチワー」の合唱。

「こんにちは、がんばるね」とできるだけはきした声で答えると、「ハッハッハッ」「ハイッ！」とまぶしい笑顔と笑い声が、私の脇をすり抜けていく。ひかり色の風が瞬時私の体の周囲に纏わり着き、遊んだ。

病み上がりの老女に笑顔を向けてくれる若者がいる。(婆でも、限界集落でも大丈夫、笑うことができる)の思いがこみあげて、温かな希望の感情をしばし味わった。

振り返るともう二人の姿は消えていた。

椿や、松の木の葉が風に揺れている。さわさわ、ざわざわ。見上げると、杉の木のでっぺんまで絡まり着いた藤の花が淡紫色の長い花穂を垂れている。

先人は、もしくは神の手による自然の業は、この杉の苗木を植えた時、隣に藤の苗木を植えたのだろうか。異なる種の木々は寄り添って成長し、寂しさと喜びを分かち合って、巡る季節を暮らしてきたのだろうか。

山の斜面に広がる、地元民の幾多の先祖が眠る墓地に着いた。少々の勾配を両手のポールを頼りに登り、拙宅の墓に詣でる。

大きな汚れも見えず、透き通った空の中に真っ直ぐに立つ墓石が黒光りして神々しい。

(仏様がお休みになっているのに神々しいという表現はおかしいかな)。しばし、浄土の義父母と話した。

椿が、赤い花を地面に落として墓石を守るように厚く茂っている。ユキツバキの枝は地面を這うと、どこかで聞いたことを思い出した。

それから来た道をもどり、田に沿った農道を歩く。水が張られた短い期間だけ見ることができる水田の水鏡。山、木々、青空が映り込み、一幅の絵を成している。風が渡り、田の面にさ

ざなみが立つ。

白いサギが一羽飛び立って行った。

耳を澄ます。

向こうの田で働く耕運機のガンガンという音、ラジオが何かをしゃべっている。遠く国道を歩きかう車のブーン、ゴーという音。

風が時々音にならない音を奏でる。鳥の鳴き声が姦しい。

路傍に目を落とす。

黄色だったはずのタンポポが、今日は白髪頭になっている。オオバコ、ツユクサ、ハルジオン、ヒメオドリコソウ、他に名前を知らない雑草がたくさんある。草刈機や除草剤に命を仕舞う時があるかもしれないけど、きつとまた小さな花を咲かせるよ。

田の中で農婦帽の女性が植え直しをしている。

今は機械の性能がよいので、植え直し作業の光景はあまり見かけない。四十年近く前に、わが家の田植え機は乗用ではなく、四条植えの押して歩く機械だった。夫は丁寧に作業するのだが、ぼつぼつと、植わっていないところがあった。二日後くらいに、その穴に、苗を植えたものだ。私も手伝ったが、若かったし、楽しい作

業だった。あんな遠い日もあったなあ。

無我夢中で働いて定年退職し、子を独立させ、親の浄土への旅立ちを見送った。自分のための時間が存分に使える今、人生がしみじみとおもしろい。

風と空を背景に、月と星と太陽の明かり、山や川、木、花、それぞれの色と音と匂い。自然の営みが不思議で、ありがたくてたまらない。年をとって分かってきたことの一つかな。

働く社会の一線からは身を引いたが、この地域社会の中で、もうしばらくの間生かしていたらどう。

歩き出しは潔く、さつさとポールを大きく使ってウォーキング。数分もしないうちあれこれに想いが移り、だからたちの散策状態。

歩数計は三千くらいなのに、ほぼ一時間の散歩を終えた。

次回の整形外科受診日に、元気に歩けるようになったことを伝えよう。きつと主治医は、あのまぶしい笑顔で喜んでくれるだろう。

風渡り田の水鏡波走り映る山揺れ鷺が飛び立つ

奨励賞 明日に見たい夢

横手市 皆川 順子

テーブルを挟んだ二人はランチを終えた。隣席でヒートアップ中のママ友たちが椅子を引き「じゃあ、また、バイバイ」と、二オクタールほど高い声を投じたのは人生が瑞々しい証明になるだろう。

潮が引いた静けさを取り戻したレストランでバッグから何やら取り出した友人は、言葉を添えもしないでそーっとそれをテーブルの上に押し出す。この場で絵本？ 咄嗟に飲み込めない私はきよんとした。

旧友が会いたいと連絡をくれたのは一年前の夏だった。長らく疎遠放題の二人の間に電話で済まされない用件が転がっているはずはなく、唐突感を抱きつつも再会は待たれた。

八十年代に或る病院の産科婦長を辞した友人は「男子産室に入るべからず」、それまでの既成概念を覆し、男性が産産の場に臨むラマーズ法分娩を秋田で先駆けた助産師である。県都に助産院を開業した時は驚いた。

一億総人口がスマートフォンへと奔走するご

時世に「助産院なんて開いてうまくいくべか」とひそかに心配したが、非常に彼女らしい選択に違いない。

命の誕生の瞬間に立ち会う感動と仕事冥利を知らせてきた当時、意欲に満ちてマスコミにも注目される彼女が眩しかった。それに引き換え、昨日も今日も紙に追われて電卓を叩くだけの自分を、必要以上に虚しいと感じた私も、また若かった。

時の余白を充分と計測したのは未熟ゆえの誤算で、実に淡々と冷酷に過ぎ去った。この歳月に揉まれたお互いが一回りも二回りも小さくなったとて誰に罪を問えよう。

そうはいっても他者を交えずに二人が共有した時は、まるで静止していたかに何ら変化していない。

滅多なことに動揺したりふれたりしない彼女の冷静沈着な性は承知しているつもりだ。無言で押し出された絵本の何たるを訊きもせず次の言葉を待つ。だが、内心ではよくある私教版で贈呈してくれるものと決め込んで、

「私にくれるの」

「あげられない。三冊しかないから」

あっさり斥けられた。こうも率直だと後に濁

りがない。

表紙にはお嬢さんが満面の笑みを湛え、はち切れそうな健康を誇示していた。下部に著者として友の名が印字されている。

制約のある時間を惜しんだ私は直ぐさまにページを捲って、次に曇ってきて役に立たない眼鏡を外して拭いて、掛け直してと、煩多な動作を繰り返した。

お父さんお母さんいつも見守ってくれてありがとう。またこの世に生まれることがあつたらお父さんとお母さんの娘に生まれたい。

ゆがんだ活字を追い終えてようやく事の次第を把握した。

友は長女の靖子さんを喪った。

靖子さんの自筆手記も挿入された絵本よりは詞入り写真集に近い。あの日あの時の亡き人を偲ぶ貴重な記録集だ。最後のページを閉じた私は遺族がお墓を建てる意味と同様の感触をその小さな冊子に重ねていた。

「ごめんね。ごめんね。ごめんね」と三回繰り返して、最後「お母さん」と呟いて息絶えたそうだ。

「ありがとう」でなかった「ごめんね」を何

度も咀嚼し続けたが、よく分からないと友は言う。う。

「両親よりも早い旅立ちのお託びよ」

と慰めても、

「周りも口を揃えてそう言う。私にはどうもそれだけではないような気がして、これから先ずっと考えて行かなければならない」

性急な結論を出さない。静穏な表情に滲む喪失感を見た。掛ける言葉がなかった。ご愁傷さまも言えなかった。

もしや、私の肉親が忽然とこの世を去ったとしたら、このようにシリアスに正視できるだろうか。空白で空疎で低密度な悲嘆に終わってしまふ可能性が怖い。

靖子さんは痛くて痛くて痛かった。が、つらい抗がん剤の治療や手術も明るく乗り越え、人格破壊もなく、より人間らしい最期を迎えている。

体の激痛はモルヒネで緩和されても、日々に衰弱していく肉体を見て、宣告された時間を懸命に消化して、生まれ変わるなら同じ両親のもとへと望む心はあまりに痛々しい。

私を溺愛した祖母には、がんの告知をしなかったが、死ぬならば自宅で死にたいと無理を

承知で退院した。母は昼夜となく傍らに侍り背や足を摩ったが気休めにもならず、七転八倒の苦しみの中で死んだ。

息を引き取った瞬間、悲しみよりも先にこれでようやく楽になったと胸を撫でたことがかすかな咎として網膜に焼き付いている。

生老病死は世の常である。

事故で、犯罪で、また病魔に侵されて惜しまれつつ亡失した若い命は、星の数ほどであろう。人命に軽重がないのは普遍的常識でも、何の罪科もないのに生ききれなかったから、理不尽は拭えない。

進んだ医療は長寿社会を現実にした。こんどは非常に困難な研究課題でも、大事な青少年たちが一人として病没しない明日の医療を夢に見たい。

再会の日、友はみすまるのストラップをプレゼントしてくれた。古代の神々の装身具、みすまるは御統みすまると書き、はじまりも終わりもない永遠の循環を示すという。

人の世の苦痛も無痛も生死をも一切合切を綾に織る時とは、もしかしたら流れずに循環している……

不意にこんな想いが走った。

奨励賞 マルのじゅん

由利本莊市 坂本 愛子

近所の犬が子を産んだ。ひと目見た母が手離せなくなり、一匹連れ帰った。子犬の名前はマルという。

わが家では、生き物の名はマルと決まっている。長男が同級生からもらったハムスターも、保護した迷子犬も、次男が「道端で震えていた」とポケットに入れて持ち帰ったハツカネズミも、すべてマルである。

ハツカネズミはその名の通り、一か月あまりで動かなくなつて次男を号泣させ、迷子犬は探していた飼い主に再会して菓子折りに姿を変えた。ハムスターはある夜カゴを抜け出し、ネズミの仲間らしく壁際を伝い歩いた末に、ふわふわで暖かいぬぐらを見つけてもぐりこんだ。翌朝、起き上がった母の頭から、ぼたりと落ちたから、家族は母の悲鳴に飛び起きることになる。陸上部の次男の朝練習が、マルの散歩となった。中学、高校と進むにつれ、マルの走力は次男の敵ではなくなつた。弟妹を扱うように荒っぽい可愛がり方をする次男には、マルが人間で

いえば中年の域に差し掛かっているという感覚はなかったのだろう。

やがて長男は伴侶を得、次男も進学で家を離れた。

父によれば、その日、マルは朝からそわそわと落ち着かない様子だったという。

昼過ぎ、マルがあまりけたたましく吠えるので、隣家の主人が様子を見に来たが、マルは鎖を引きちぎらなばかりに暴れ、国道に向かつて吠え続けた。その剣幕に恐れをなして帰ろうとしたとき、救急車のサイレンが交差点のあたりで止まった。「ああ、また交差点で事故か」と思ったという。

国道を横断中の母が、右折してきたトラックにはねられた、ちょうどその時刻であつたと、後日、隣人から聞かされることになる。

次男は大学を卒業して予備校に就職したが、せっかくなか勤めた企業は、そのころ話題になり始めた「ブラック企業」であつた。

次男の異変に気付いたのは、半年も経つた頃である。不眠、食欲不振が続く、頻繁に電話がかかるようになった。社会人一年目はこんなものかと思つてはいたが、喘息発作で救急車の世話になるに至つて、ただ事ではないと気がついた。

「抑うつ状態」という診断書をもたらして退職したが、本人は挫折感と無力感に打ちのめされた。不安に苛まれるといつてもたつてもいらなくなるらしく、夜となく昼となく電話がかかる。泣きごとや練り言が、果てしなく続く。仕事の中であれ、入浴中であれ、電話が手放せない日々が続いた。その一本の回線だけが、彼を辛うじてつなぎとめる命綱だった。

そのころからマルは衰えが目立つようになった。人間でいえば八十歳余り、暮れに動物病院に連れて行くと、心臓も肝臓も弱つていて冬が越せるかどうか、と言われた。

年が明けると、自分の引き綱に足を取られて転ぶようになったので、犬小屋ごと風除室に入れ、綱を外した。

寒冷前線が通過するとかで、大雪の予報が出た日のことである。

マルはますます弱り、毛布の下で薄い腹がかすかに上下するばかりで、時間の問題かと思われた。声をかけると、それでも尻尾を振つて目を開けようとする。背中をなでてやっているところ、電話が鳴つた。

いい歳をした男子が手放して号泣している。大学時代から付き合っていた女性から別れを

切り出されたのだという。もう自分には何も無い、と号泣する電話の奥で、キーキーと耳触りな音がするのは、ひと気のない公園でブランコに揺られているらしい。

慰める言葉もなく、ただ受話器を耳に押しあてているしかない私のそばで、マルがひと声、わん、と吠えた。よろめきながら立ちこうとする。いつも用を足すときには庭に出るので、子機を耳に当てながら扉を少し開けると、いきなりしつかりとした足取りで外に出て行った。そして、脇目も振らず国道に向かって歩き出した。降りしきる雪は斜めの線となって、たちまちマルの姿を隠した。

「ちよつと待つて。マルが出てしまった」と電話を切ることもできた。

だが、蜘蛛の糸のように頼りない電話回線にすぎるしかない彼のことを思えば、白い闇に消えていくマルの姿を、子機を握ったまま見送るしかなかった。

未明に新聞配達員が、国道を歩く犬を見かけた。腹まで積もった新雪をかき分けて、南に向かつて歩いていったという。

雪の下で冷たくなっているのでは、と、春を待つて国道を歩いた。藪をつつき、草むら

をかき分けて探したが、マルの痕跡は見つからなかった。

息子はその夜を境に次第に落ち着きを取り戻した。嘆くだけ嘆いて憑き物が落ちたのか、マルが彼の身も世もない悲嘆をどこかに啜え去ってくれたのか。翌春、秋田に帰って希望どおりに就職することになる。

入社後半年ばかり経ったある日、台風が近づいているというのに出かけた息子から電話があった。国道端で子猫を拾ったが連れて行ってもいいか、という。段ボール箱に入れて連れ帰ったびしょ濡れの猫を拭いてやりながら、「カノジョが見捨てていけない、っていうんだよね」などとのたまう。

そのカノジョはまもなくわが家の一員となる。

仲を取り持った猫の名は、もちろんマルという。

最優秀賞受賞のことば

「無理です」なんてことはない

小説・評論部門 佐藤 龍一

客観的な評価をいただくことができて嬉しいです。ありがとうございます。これからも頑張ります。

さて、私の作品のテーマは「地方活性化」です。秋田県では、人口減少をはじめ様々な問題が山積しているを感じます。どうすればいいのだろうか、と学生の頃から思っていました。町おこしのイベントを立ち上げる力もない。政治的な立場にも立てない。人々の心を動かせるような影響力もない。これといった特技もない私の趣味は小説を書くことでした。

「生まれ育った故郷のために自分には何ができるだろうか」

誰かにとつて、私の拙い作品がそれを考えるきっかけになってくれることを願っています。

受賞によせて

詩部門 小林 康子

高齢の母と一緒に過ごす時間は春の日差しのように暖かく、秋の日暮れのように寂しさがある。

これまで自立した生活を送ってきた九十四歳の母が夏に三週間程入院した。突然のできごとだった。

目の前の現実には句読点をつけるように詩を書き、書くことでその時々自分を受けとめてきたが母の入院はよりリアルな現実だった。退院した母の切ない情景をことばにした詩です。最優秀賞に評価していただいたこと、深く感謝致します。徐々に回復した母も喜んでくれ、二重にうれしくほんとうにありがとうございます。

受賞の言葉

短歌部門 石田 幸栄

思いもよらぬ受賞の知らせを受けて、大変嬉しく思っております。

短歌を詠むことを始めてから、いつか「あきたの文芸」で最優秀賞を受賞することが、夢であり目標でありました。今、望みが実現して感慨深い思いであります。

会派に属さず、師につかず、独学で、二十代より今日まで短歌を新聞に投稿してきました。新聞と「あきたの文芸」に挑戦することが、勉強の場と捉えて作歌に励んできた次第です。受賞作は、学校時代の楽しかった思い出を思い起こし、詠んでみました。

これからも生涯の友として、短歌を詠み続けたいと思っております。

また私の作品に目をとめてくださいました選者の先生方に御礼申し上げます。

本当にありがとうございます。

家郷切々

俳句部門 和田 仁

素直に俳句の骨法に添い情景描写を心掛け、比較的、無心で出来上がった作品でした。

それだけに過度に寡黙で、裡に秘めた家郷への思い、叙情性が読み手に響くか疑念も有りませんでした。

一句で表現出来ない世界を七句で表現する。

散文的タッチに擦り寄らず、如何に俳諧と言う詩性をキープするか。

何れにしても未完の感はありました。

しかし、これが優位に働く場合があるのも俳諧の世界のようです。

修練を積んだ読み手が、自らの内面・詩性と交響・合奏させ、作品を完成させてくれるからです。

幸運をお授け下さいました全てに感謝しております。

傘寿へのご褒美

川柳部門 加藤 円心

私は今年で丁度傘寿の祝いに当たりますが、いろいろとトラブル続きで、少し落ち込んでおりました。

そんな時、「あきたの文芸」最優秀作品賞の朗報が飛び込んできました。私の胸のモヤモヤした霧が一気に晴れました。

今、川柳は多様化し、散文調や、詩性川柳など様々な形に変化しております。私の過去の川柳に「トースターぽんとヒーロー現れる」がありますが、私はあくまでも本道から大きく外れることのないよう努めております。

私は三年前、川柳句集「春の航跡」を上梓致しました。それ以来、少々作句活動が停滞しておりますが、この賞を頂いたことで、これからは焦らず一歩一歩前進するよう頑張りたいと思っております。

そしていつの日にかまた第二の川柳句集を発行することを夢見ております。

最後に推薦して下さいました選者の先生方から感謝と御礼を申し上げます。

選評

小説・評論



希望を

抱かせる作品

渡辺 修

選考を担当して3年目となるが、今回初めて最優秀賞を選ぶことができた。「無理です」は、それだけ素晴らしい作品だった。

書き慣れた感じで文章力、構成力ともにすぐれている。読後感の良さにも感心した。

何より本作で一番驚いたのは、秋田の若者の「今の姿」が、きわめて自然に、リアリティをもっと描かれていることであつた。

地方が抱える課題への問題意識がテーマというより、若者が見失っていた自らのアイデンティティを再発見する物語といえる。

寂れた故郷を嫌悪し、都会で仕事に忙殺され

ることで空虚な心をごまかしている主人公が、たまさか与えられた休暇で、特に目的もなく久々に帰郷することから物語は始まる。

主人公やその友人の口から、過疎や少子高齢化に悩む秋田の現状、それに対する批判、擁護が語られるが、表面的で手垢のついた言葉では、主人公の心を救えない。

しかし、土崎港祭りの準備の場で、地元のおじさんたちの強烈なエネルギーに巻き込まれた主人公は、夢中で演奏に加わってしまう。その体験が、今まで押し殺してきた故郷への愛情を甦らせ、彼の心を解放する。

「地方創生」をテーマにした作文で「そんなのは無理です」と書いた主人公のエピソードを冒頭に持つてくることで、これらの対比が鮮やかに浮かび上がってくる。実に見事な構成だ。家族の距離感や滲み出る愛情、タイヤを太鼓に見立てた演奏シーンの生き生きとした描写、倒れた祖父を見舞う場面でのほほえましい会話など、表現の巧みさに唸らずにはいられなかった。

入選の2作は、ともに確かな文章力、構成力が評価された。特に「女ともだち」は、作者の力量の高さが伝わってくる作品だった。

ストーリーは「女の友情」を描いたもので、よくまとまっている一方、目新しさに欠ける。

残念だったのは、登場人物の言動にリアリティが感じられず、「現代の若者」という感じがしないことだった。これだけ書けるのなら、むしろ中高年を主人公に据えた恋愛小説を読んでみたいと思った。

「神崎牧師の多忙な一日」も「うまい」作品だった。タイトルどおり一日の出来事にしては詰め込みすぎではないだろうか。牧師自身の心の傷が物語に厚みを加えているが、一つひとつのエピソードが消化不良で、浅い印象となってしまう。

家庭を持つことに前向きになるラストも唐突な感じがした。

選考の場で最も議論となったのが「大八州豊葦原瑞穂の国」だった。

困難な歴史物に挑戦した姿勢、物語の面白さは高い評価を受けたが、入選作として活字化するにはあまりに推敲が不足しており、残念ながら選外となった。じっくりと時間をかけ、推敲を重ねていけば、十分入選する力があるので次に期待したい。

同じことは「亜寒帯鉄路」にも言える。着想・

題材は面白く、もっと構成を整理して推敲を重ねれば、良い作品になっていただろう。

「天狗の里」も構想は合格点だが、文章力が追いついていない。推敲を重ねてほしい。

「オレンジ」はストーリーにオリジナリテイがほしかった。文章力はあるので、今後に期待したい。

「思春期のスタンドバイミー」、「私を忘れないで」の2作は、もう少し書きたいことを整理して、推敲を重ねてほしかった。

今回の応募は9作品と、この5年間で最も少ない数となった。大変残念なことであり、次年度は積極的な応募を望みたい。

そんな中で、今回最優秀賞となった「無理です」は一筋の光明だった。入選の2作品も文章のお手本として申し分ない。応募を考えている人たちは、ぜひ参考としてほしい。



推敲に 時間をかけて

加賀谷 真澄

応募作の題材は、郷土の話題から童話風のファンタジーまで幅広く、全て面白く読ませてもらった。ただ気になったのは、回想場面を多用している作品が多く、時系列や語り手が誰なのか混乱してしまうものが複数あったことである。読者の視点から見直す作業をして欲しい。最優秀賞は選考委員全員が高得点をつけた「無理です」に決まった。入選は「女ともだち」と「神崎牧師の多忙な一日」の二作品。

「無理です」は、ふるさとに対して、多くの人が感じていることを若者の言葉が表現している。主人公の健斗は、地方創成なんて無理だし、田舎に埋もれるのが嫌だと都会に出た人物。しかし、だからといって故郷への愛着がないわけではない。その心情表現は無理のない自然体で、軽やかでユーモラス。作者のセンスが光っている。登場人物が多いが、彼らが発するたった一つの言葉や動きによって人柄や場面の雰囲気伝わってくる。田舎の濃密な人間関係と、そこ

に久しぶりに身を置いた主人公の心の変化が、その後の展開を予感させる。心地よい余韻が残る作品。

「女ともだち」には、対照的な二人の女性が登場する。性格が正反対でありながら、長い間継続している友情関係は、よく描かれるテーマであるため、切り口に工夫が求められる。筋立ては少々予定調和的に感じられるため、もっと意外な面に焦点を当ててもよいと思う。友情のためというより自信のなさのために自分を制限する主人公の内面が上手く表現されている。「神崎牧師の多忙な一日」は、巧みな構成で牧師の心の傷と癒しの兆しを描いている。信徒を導く立場の牧師が、逆に信徒たちに支えられ、彼の人生から学びを得ていくという構図が上手い。牧師が、他者の痛みを自分の人生に重ねる視点が共感できる。ただ、家庭を知らない牧師の気持ちに変化が生じる場面には、もう少し説得力が欲しいと感じた。

以下、惜しくも選に漏れた作品に触れておきたい。「大八州豊葦原瑞穂の国」は、日本における稲の起源についての物語である。中国で厳重な管理下に置かれた種を、日本から留学に来た二人の僧が、命がけて持ち出すという内容で

ある。壮大な歴史小説であり、歴史的記述と緊迫した盗みの場面が交互に描かれ、読む者を飽きさせない。残念なのは、表現の重複と、言葉の選択ミスだと思われる箇所があったことである。推敲を重ねて完成度を上げて欲しい。「オレンジ」は、大切な人を失った青年の心の葛藤と内省を描いている。恋人の女性の内面に迫ればより魅力的な作品になるだろう。空の色や、夢の中で愛のシンボルであるタトウが消える場面など、青年の心理を表すディテールが良い。

「思春期のスタンドバイミー」は、少年時代の想い人と再会し、再び別れを経験する物語。途中で語り手の視点が見失われる箇所がある。少女から美しい大人の女性に成長した「ミイちゃん」の姿が魅力的。「私を忘れないで」は、冒頭の夢の世界が物語の展開を暗示するよう期待を持たせる。これをうまく利用すれば幻想的なストーリーになるだろう。場面転換が急な部分があるので、つなぎに工夫が必要。「亜寒帯鉄路」は、緊迫した国際情勢の下、そこで力強く生きる人々の姿を丁寧に描いている。セリフが続くために筋を追いくいのが惜しい。説明文を増やしたほうが読みやすくなるだろう。「天狗の里」は、現代風に描かれた異類婚姻譚。天

狗が怖い存在ではなく、かわいらしい女の天狗もいて、人間と恋に落ちるといのはなんとも微笑ましい。時代設定も昔話ではなく、現代にしているのが面白い。

(秋田県立大学)



「望郷」

高橋 貢

今回の応募作品を概観すると、何らかの形で「秋田」(故郷)について触れたものが多かったように思う。

それは風景だったり、地名だったり、行事だったり、または何十年前前の記憶の中のシーンだったりするのだが、それらは単純に懐かしいというのではなく、どこか屈折している。そしてその屈折の具合が、むしろ個人によって異なるのは当然だが、世代によっても違うのだ。特に、全国一の少子高齢化社会を背負っているかねばならぬ若者たちの憂い、そして真摯な語りには、素直に耳を傾けたい。

まずは、「無理です」。

この作品は、評価が分かれるかもしれないが、内容は高く評価したい。秋田の深刻な将来の課題が、一見軽いタッチで語られているように見えるが、若者たちの郷土への思いは熱い真剣だ。私も職業柄若い年代と付き合うことも多いが、まさにここに描かれたような会話が日常的に交わされている。そうした意味では、非常にリアルな小説だ。

東京で働きながら、秋田への想いに心を揺さぶられている若者がいかに多いことか、その実態にしばしば触れているだけに、大いに共感するものがあつた。こうした作品が生まれたことは、大変喜ばしいことである。的確に時代を反映している。深刻ならず、スピード感のある飾り気のない文章にも好感が持てる。また、さりげない描写に温かさが漂っているのも、作者の技量を示している。ただ、題名にはもう一工夫ほしい。

次は「神崎牧師の多忙な一日」、宗教関係を扱うのは難しいと思うが、読んでいてそれはあまり気にならなかった。一つ概念装置として、効果的に機能しているのではないか。

我々のごく常識的な日常生活の隣に、こうし

た未知の世界が展開していることに新鮮な驚きを感じた。会話を通して、人間模様も鮮やかに描かれている。説明ではなく、描写によって表現しているところは見事である。言葉遣いも優雅で、文章全体に気品がある。

ただ、段落間の一行空きが多すぎるのが少し気になった。あとは、牧師の設定年齢はもっと若い方がいいのかもしれない。多くの人に苦悩を打ち明けられ、また自らの内面にも「過去の呪縛」を抱えた不惑間近の三十九歳にしては、やや「老成感」が足りないような気がした。読後感は、一番爽やかだった。

続いて「女ともだち」、最初の数枚を読めば、作者が優れた書き手であることが感じられる。淀みない達者な文章は、非常に素晴らしい。ただ、登場人物がやや典型的な印象で、安心感はあるが、刺激が不足。背景に流れるジャズの曲についても、もう少し具体的な描写や説明があれば、ジャズに無知無関心な読者にも、作品中に漂う雰囲気は滲みてきたかもしれない。

最後に「大八州豊葦原瑞穂の国」、掛け値なしに面白かった。稲の語源が、「偉」「寧」の話から出ているという説は初耳で、もしかこれが作者の独創であるならば素晴らしい。文章も冷静

かつ簡潔で、実にすっきりしている。気にかかる点としては、文末表現がやや単調であることと、歴史的事実を叙述する地の文が、平板すぎて少し物足りないことがあげられる。また段落も工夫する必要がある。いずれ、並外れた力量には敬意を払いたい。

住の詩人による同人誌や詩集などもずらりと書架に並んでいた。それは時代が要請していた。未来への展望とか夢への渴望が大きなうねりとなっていたのかもしれない。

詩

唐の都で自国を想う学僧も、東京で秋田を想う青年も、その望郷の念に変わりはない。

それがいつの間にか書店から姿を消してしまった。その理由はいろいろあろう。他の出版物に興味関心が移りだしたことにもよるだろう。経済の発展が暮らしを豊かにした反面、いままで見えていたものが見えにくくなってしまった。ところが霞んでしまうという現象が起きてきたといつてよい。

書き続けよう



石川 悟 朗

今は出版物があふれるほど出回っている。しかし詩に関する本はほとんど見られない。だれでも詩を書き投稿もできる。だが詩を書く人は限られている。特に若い人は少ない。

書店で詩集をみつけることはむずかしい時代となった。とくに地方の街の書店で見かけることは皆無にひとしい。私が若い頃（1960年代）の秋田市の書店には、中央から出版された「現代詩」「現代詩手帖」「ユリイカ」などの月刊誌が毎月書店で見ることができた。秋田県在

詩が読まれない理由のひとつに、むずかしい詩が多く、読者を拒否した詩が氾濫し、読者が離れてしまった。だから詩の本も売れない。読者は詩から遠ざかっている。詩は詩人仲間の間にだけ読まれ、閉鎖的傾向を強めてしまった。むずかしいことばを廃して奥深く読者のところに入る詩がぞまれていくように思う。こんなことを思いながら今回の応募作品と向き合った。

応募された詩はどれも若々しく楽しく読ませていただいた。そして私自身も勉強になった。感謝を申し上げたい。

最優秀賞の「巻き貝」は発想がよい。無駄なコトバがなく簡潔さのなかに読者を想像の世界に導き、人間存在の不思議さを提示している。ときには透明人間になって、翼を広げてみたいと思いにかられた。

奨励賞には「銘度利加」「雨の蝶」「ん」の三点。「銘度利加」はやや叙事詩的な面をもっている。鍵のかかった家の中に聖像があり、この聖像にまつわる歴史的な事実を軸にして詩は展開している。現代から見る迫害の歴史に目を向けて重いテーマを取り上げている。作品の欄外に註をつけてある。読者はこれを手がかりに読まなければならぬ。この詩は重層的な構成である。

「雨の蝶」は作者の病気による不眠に悩む場面を上手に書き上げ最後の連で医者が結んでくれた手術の糸が、蝶のように虹の光へ飛んでいくところに明るさが見出される。「ん」は「ん」という文字のはたしているいろんな場面を取り上げた。だいたい「ん」ではじまる文章はなかなか見当たらない。あいうえお順の最後に位置し、人目に付かないこの「ん」に作者は愛着す

ら感じている。方言を交えながらユーモアを醸し読者に共感を呼び起こさせる。ユーモアのある詩は、現代ではほとんど見られない。貴重な作品である。この度の応募作品のなかで、私の最も興味を引いた作品であった。入選「私のことなど」は現代社会で自分を守ることのむずかしさ、不安を表し、「村の音」は米づくりの中で、

農機具機械の音を都会人には騒音としか聞かえないのではないかと、「哀しみの貯金」は父を亡くした哀しみをリアルに描いて胸をうつ、「家族もどき」は娘のひとり立ちを不安そうに見つめている母の目で描かれている。娘が飼ったネコに癒やされているだろうかという娘への想いを書き、「まな板の音がする」は日本古来の楽器のようだと言者は感じる。最後の連「季節の素朴な匂い」という表現が光る。

その他若い人の詩「銀河」「はさみ」に注目した。きつとさらによい詩を書いてくれるだろうと期待している。詩を上手にまとめようとしてはいけない。とにかく書き続けていただきたい。そこからよい詩が生まれる。

「根確かなれば花必ず開く」という。そういう日の来ることを期待している。

「密造者」同人。秋田県現代詩人協会、日本現代詩人会、各会員。



異界

見上 司

新しい詩の扉の前に、僕は佇^たっている。それは新しいようで、本当は古い、しかも相当に古い、詩世界の扉である。…もとより僕はこの異世界を往き来していた気もする。が、こんなにもハッキリと意識するようになったのは、ここ最近である。

これは、じつに興味ぶかい。僕はまるで少年のように、新たな世界に胸が躍っている。僕の感受性は、顛^たえたり畏れたり嬉々としたりを繰り返し、めまいのようなものさえ感じている。世界がまるで違ったものに見えることがあるからだ。これは驚きだ。

たとえば夜ならば、かくも美しく暗く神秘的で、しかも長い。くらぐらと気が遠くなるほどに長い。

僕は部屋で一人灯りをつけて、その下でこうして原稿用紙に向かっている。真夜中の、この不思議な空間を、全身で感じている。すると遠くで踏切の遮断機の音が鳴る。誰も知らない真夜中の貨物列車のコンテナに眠っている、無数の質感。機器や穀類、それに引つ付いた異国の花卉の種、…僕はペンを走らせたリキーボードをたたいたりする。夜は長い、途方もなく。

詩は、ある意味、異世界を描くことなのではないか。そしていちばんの悲しみであれ、二番目の悲しみであれ、書かれたものは、もう僕の手を離れ、遠くへ行ってしまうのである。まるで我が子のようにである。むろん僕は彼を愛してやまないけれど、それはさしたる問題ではない。

そうして詩は、誰にも知られない物語のように、本の中で静かに閉ざされるであろう。くらい図書室の本棚の片隅で、ひっそりと眠りつづけるのである。そして誰かを永遠に待ちつづけるのだと思う。世界に終わりがくるときまで、である。

以下、評。

最優秀賞「巻き貝」

何という美しく哀しい比喩であろう。生きていくということの切なさに、この言い知れぬ切なさに、私は目がくらむ思いがした。「海の中に母がある」と書いたのは三好達治だったか。そして私にも、年老いた小さな母がある。母は巻き貝のように小さく、それなのに海までも思わせる果てない存在である。詩は、ひとつの愛の形であると思う。人は、そのかぎりないとおしさの中で生きるのだと思う。

奨励賞「雨の蝶」

想像力豊かな作者の詩想がほつれるように歌われている。私にも雨の日にグールドを聴いた思い出がある。その後、彼は亡くなり、私は彼のために詩句を綴ったが、ついに一篇の詩とはなり得なかった。ずっと孤独な若者であった私の寂しい思い出である。…洗練された詩語に高い表現力を感じる。一連一連が詩となっている秀作と思う。

奨励賞「銘度利加」

ドラマチックである。劇的で壮大な小説になり得る詩と思う。しばしば作家が歴史の史実をもとに物語を形づくるように、作者は「銘度利

加」の記録に心ひかれ、詩を書き上げたのであろう。この世は、生きることの悲しみに満ちている。今も、遠い遠い昔でもある。

奨励賞「ん」

発想の妙味があり、一読して楽しい作品であった。言葉遊びは言葉の不思議さと相まって魅惑的な面白さを醸し出すことがある。そのよい一例であろう。だからどうしたと言われればそれまでであるが、詩には、言葉そのものを楽しむ一面があつてよいのである、と思う。

入選「私のことなど」

情報社会は見えない顔の社会である。見えなにもかかわらず、人知れず情報だけが露呈される恐ろしさは言い知れぬ不気味さがある。個人的な不安を、詩に形づくつたのは、作者の感受性のなせる業であろう。

入選「村の音」

この現実感(リアリティー)に貼り付いた詩語を好ましく思う。私の亡父もまったき百姓であった。だから私はこの機械音を尊いものと思う。それは生活の音であり、労働する者の音であり、人間の生きること根ざした音だからである。そこに、真実の詩があると信じるからである。

入選「哀しみの貯金」

カタルシスという心の作用がある。古来、人間は悲しみを告白することで、どれほど救われたことか知れない。私も近年、肉親を失くしたことをポツリポツリと詩に書いている。願わくは、私たちの悲しみの蓄えが、優しさという形で、人の世に還元されんことを。

入選「家族もどき」

心の生の言葉である「語り」の温かさを感じて詩である。幼少期、私の家にも猫が飼われていた。猫好きだったのは亡くなった祖父と思われる。そのせいか自分も断然ネコ派である。加えて、猫は、何より詩的な生き物である。詩を書く者の心持ちに似ているのかもしれない。

入選「まな板の音がする」

何気ない日常の生活感が、一篇の詩となった。その素朴な味わいが、この詩の妙味であろう。同時に、たんなる感慨から詩への昇華を願いたい。

グリーン賞「はさみ」

独特の諧謔とペーソスがある。こうした物語性を、私も試行したのである。自分ではない、もうひとりの自分の歌を、歌うように綴りたいのである。この若い作者に、優れた感受性を感じ

じる。

グリーン賞「銀河」

短い、一行一句に優れた表現力を感じる。この「銀河鉄道」のイメージに共感する。むしろ私の中にも同様に、遠く走り続ける「銀河鉄道」があることを思う。つまり私たちは似た感性の持ち主なのかもしれない。

入選外から

「歳月は 流れた」

散文的ではあるが、私はこの詩が好きである。誠実に人生を歩んだ人の、真摯な息づかいが感じられるからである。この書きぶりを私は尊く思う。

「夕顔と朝顔と」

高い表現力を感じた。詩語とイメージが豊かで、変幻し自在する詩の本源がある。書き続けてほしい作者である。

見上 司。三種町在住。県現代詩人協会、日本現代詩人会、日本詩人クラブ会員。「北五星」

所属。



やはり書き続ける
ことが大事

寺田和子

今年の応募作品数は三十二編。昨年と同数で、応募者は十代〜九十代までの各年代にわたる。そのうち十代・二十代の若い人が六人、これは実に嬉しかった。

最優秀賞「巻き貝」

完成度の高い作品。第一連で読み手を詩世界に引き込む。第四連、透明な着ぐるみの中で、母がそれを着る理由を理解する。「世界から隠れ／＼透明の自在さ」を得た私の存在から最終連まで、日常を離れ、自己の存在を確かめるためという、「透明な着ぐるみ」を身につけることの意味を悟るのである。

奨励賞「雨の蝶」

四行一連で九連まで、七五調を基調にリズムカルに展開する。「雨の涙」「雨の海」「雨音濡らす心」など、やや使い古された感のある詩句に対し、組み合わせるもので新しさを感じさせる。例えば「雨の涙」に対する「デジタル画像のモザイクも／再起不能に消えてゆく」、「雨の

海」に対する「地球が浮かぶ」など。第九連のイメージは美しい。

奨励賞「銘度利加」

正教会の信徒原簿を素材にまとめた叙事詩。力作である。現存するのはこの銘度利加と大主教の日記のみという。古へ、といっても二百年に満たない過去、歴史の狭間に消えていった殉教者の姿が眼裏に浮かぶ。

奨励賞「ん」

方言詩。ふと気づいた「ん」の働き。「ん」から始まる言葉のない共通語に対し、方言で話される「ん」から始まる言葉とその説明に肯く人は多いだろう。最終行について必要かどうかもう一度考えてみてほしい。

入選「私のことなど」

二〇〇三年に制定された「個人情報保護法」に対する鋭い諷刺詩。終わりの三連はことに痛烈である。

入選「村の音」

「村の音」に焦点を絞るためには第二連は削るべきではないだろうか。第四連「どこまでも広がっていくような音／＼／真空の空のような音」や、「村の音はもしかして／＼／／与えるかも知れない」の表現がいい。

入選「哀しみの貯金」

溢れる想いを息継ぎなしで五〇行、一気に書いている。そこで提案だが、一度全部書いたら、声に出して読んでみよう。本当に必要な部分が見えてくるはずだ。全て書き切るよりは少し抑えめの方が人の心に染み入る。適切な構成、用語を考えることが大切である。

入選「家族もどき」

構成から詩を書き慣れている感じを受けた。娘を思う母親の気持ちが伝わる。詩中、「ネコ」と「猫」とはどちらかに統一した方がよいだろう。最終連は必要だろうか。

入選「まな板の音がする」

第四連と第五連、実際の調理の過程で「まな板」を繰り返し「叩く」ことで発見した「音」をよく表現している。

グリーン賞「はさみ」

人間誰しもが持っている「見えない はさみ」、時にその「はさみ」は言葉で「わたし」を切り刻む。第六連「わたしの 全部 受け入れてほしいです」が切ない。最終連、本当に必要だろうか。第七連と第九連で十分「わたし」の怒りを強く印象づけていると思うが。

グリーン賞「銀河」

「眠れぬ夜」の夢か。夜空をゆく蒸気機関車の煙突から鯨が潮を吹き出すように煙を噴き上げる音を聞く。と同時に連なる車輪が、見えないうレール上を走る鈍い音を。賢治の「銀河鉄道」にあるような真黒で大きな機関車に牽かれて夜空を走る列車が見えるようだ。

大事なのは書き続けること。素材は身近に幾らでもある。先達の作品を読むことも必要だが、見聞きし感じたことや考えたことをまず書いてみる。その際、辞典を活用する。その繰り返しで語彙を増やすのである。

最後にお願がある。原稿を清書する前に見直してほしい。表記や用語の間違いがなく、うか、しっかりと確認してほしい。たった一語、一文字で詩が台無しになることがあるからである。

来年の応募を期待し、この稿を終える。

詩誌「密造者」同人

日本詩人クラブ会員

秋田県現代詩人協会会員

秋田市在住

短歌



小林 絢子

選歌寸懐

せるやさしさが、又「詩人みて大将もみて」に、冒頭に述べた「人間は多様でいい」の思いが込められています。

「八橋伝説」

○若むせる官軍墓地の全良寺いまだ漂ふ無念の気配

○キリシタン殉教地なる草生津の刑場跡に石の大仏

抄出の二首に見る具象の他にも黄色のポンプや筆塚等が秋田の栄枯盛衰を物語っており、なつかしさと哀感を覚えます。

「川と共に」

○園児たち声をかけかけ放流す稚鮎けなげに瀬に向き直る

○滝壺を溢れふたたび川となり海へ急ぐ瀬に胡桃また落つ

題名が示す様に、川と共に在る作者の身巡りを、術うことなく、細やかな愛情をもって歌いあげている佳作。状況描写も適確です。

「穂孕む稲穂」

○本籍地離れてすでに五十年荒れ地となりし家跡に立つ

○昼顔の咲く土手降りて畔に立つ今年限りの稲は穂孕む

家の存続、家族の在り方が昔とはすっかり変わってしまった現代の苦悩とも言うべき遣る瀬無さに対して、「穂孕む稲穂」という豊かな具象を配した事に依り、作者の心情の深さが表白されていると思います。

「戦史」「戦争」の体験をベースにした静かな反戦歌。「花の咲くころ」春の菑びと共に水彩画の様な田園風景が豊かに詠まれている。「さくら」自分自身に引きつけて詠んだ「桜」はやはり意義深い。「庭の白」対象を細やかに見る目に「歌よみの眼」を感じる。言葉の選択が佳い。「点景」この表題が生かされた一連と思うが、五首目の下旬に少し疑問が残る。「若むす石に」苑の小百合、なでしこ……と遠い昔に口ずさんだ歌が想い出される様な七首一連です。「祭」ローカル色に富んだ一連の作。言葉の端々に作者の個性を感じます。「湖底探査」ややもすると「報告歌」に陥り易いところを踏み止まっている作者の力備。「時の流れ」私達の持つ「五感」の力の素晴らしさを存分に知らしめた一連。

「色」

○五年ぶりラムネの瓶は青春色今も変わらぬ匂いと共に

○「雲みたい」そう言うあなたの赤い口溶けた

「短歌を作ろうと思わなければ何ということもなく見逃していたことも、短歌を作ろうと思うと自然に光をあてた様に見える」と水野昌雄氏は述べて居られます。又同じ様なことを馬場あき子氏は著書「歌よみの眼」に表わして居ります。右の様な観点に作歌に於いての基本的なルールを加味しながら、七十二編の応募作品を拝見いたしました。

「春の教室」

○おとなしき子もある春の教室に寄り添ふやうに朝顔は咲く

○詩人みて大将もみて放課後の春の教室個性あふるる

「人間は多様でいい!!」が子供達を通して生き生きと描写されており、感動を覚えます。「寄り添ふやうに朝顔は咲く」に作者の子供達によ

綿菓子ピンクに染まる

若い感性とひびき合う色が織りなす日々が、
歳月と共にどんな色に変化して行くのでしょう。
う。紫、白、緑、ピンク、黒等に対してパレット
には無いのが「青春色」であり、それが青春
そのものなのでしょう。

結社「太陽の船」(同人)

能代短歌会(代表)

秋田県歌人懇話会(理事)



加藤 トシ子

選を終えて

○最優秀賞「春の教室」

・授業中挙手競ふごと子どもらは目を輝かす春
の教室

・詩人ゐて大将もゐて放課後の春の教室個性あ
ふるる

平易な言葉で小学生を描写し卓抜。歌の中で
子供が生き生きと動き出す。視点があくまでも

優しく明るく、命への賛歌が響いてくる。

○奨励賞「八橋伝説」

・苔むせる官軍墓地の全良寺いまだ漂ふ無念の
気配

・キリシタン殉教地なる草生津の刑場跡に石の
大仏

油田の盛衰と今昔を詠む。1首1首の印象的
な具体を通して、作者の深い感慨が滲む。

○奨励賞「川と共に」

・雑草に紛れ群れ咲く振花も蛇行して来る川も
生きもの

・草いきれしげき川辺にゆらゆらとサーカステ
ントとんがり建ちぬ

川を巡る情景が確かな表現力での確に描かれ
る。作者独自の視点がユニーク。

○奨励賞「穂孕む稲穂」

・夫や子と食べしすもの木の朽ちて細き流れ
の上に横たふ

・昼顔の咲く土手降りて畔に立つ今年限りの稲
は穂孕む

過ぎた歳月に思いを馳せ、声を低めるように
詠まれている作者の悲しみが胸を打つ。

○入選「戦史」

・「平和の為の戦争はあり得ない」秋山ちえこ心

離れず

戦争拒否を語り継がれ、歌い継がれるべき。

○同「花の咲くころ」

・野良終えし母を自転車に少年が桐の花咲く坂
を漕ぎ来る

農村を明るく希望的に点描する。口語調のリ
ズムも、よく働いていて効果的。

○同「さくら」

・しろじろと花咲きみちて朝日差す桜は磁器の
ごとく冷たし

さくらの蕾から散り果てた後までを描き、繊
細で美しい秀歌。感性の鋭さに脱帽する。

○同「庭の白」

・四季に添ひ移りゆくもの静かなり朝に咲く沙
羅夕べには落つ

庭の白い花。その1首1首の花の映像を見る
ようだ。言葉が洗練されていて美しい。

○同「点景」

・今に見る稲田の案山子朴訥になくはならぬ
点景として

日常を気負わずに歌い、暮らしが見える。

○同「苔むす石に」

・御祖みおやより継ぎきし家を捨てむとし幾夜を迷ふ
星仰ぎつつ

「幾夜を迷ふ」に家を捨てむとする痛烈な思いがこもる。一連の悲しみは深い。

○同「祭」

・夜の闇を大太鼓の音ひびきくる原始の祭り呼びいるごとく

歌から祭りが現出し人の氣息まで聞こえる。

○同「湖底探査」

・湖成りてはじめて覗くその底ひ瞬き惜しみ映像に寄る

たんたんとした詠み口ながら、示唆に富む。

○同「時の流れ」

・バス降りてひとり歩めば春潮のかをりも旅のあはれをさそふ

日常の場面を拾い、しみじみと味わい深い。

○グリーン賞「色」

・プラタナス緑の中に入り込みふと見上げれば果てない緑

ぎこちない表現も散見されるが、素直な見方で七つの「色」を発見したのは手柄。

・「かりん」同人・『かりん秋田』編集長

・飯田川短歌会・「寒流」

・県高校文化連盟短歌部門講師

・秋田県歌人懇話会事務局長



選歌寸評

佐々木 勉

最優秀賞 「春の教室」

どの歌も児童らの様子を詳細に、生き生きと明るく描写し表現している。それに児童らに注ぐ作者のまなざしも慈愛に溢れて真情が込もっている。ほのぼのと温もりを感じさせる七首であり、読後感が実に爽やかである。

奨励賞 「八橋伝説」

八橋地域の史跡や諸伝説等に歌材を求めての七首。焦点を絞りこんで、考察ふかく作者なりの感慨を込めて詠嘆している。

奨励賞 「川と共に」

春から秋へと季節を追って、里川に関わる現実の、又は過去の事象を叙情ゆたかに詠いあげている。

奨励賞 「穂孕む稲穂」

五十年の歳月を経て家の跡地に立っている作者の尽きざる追懐の想いが、この連作を生んだのだろう。脳裡につきつきと去来して浮かんて来る思いを、そのままに詠んでをり作者の哀感が

伝わって来る。

入選 「戦史」

七十年を経ても、ありありと甦る戦時の記憶を詠んだ五首と平和を願う二首ともに作者の心情を率直に表白している。

入選 「花の咲くころ」

さまざまな諸事や情景の中に早春の辛夷、晩秋のコスモス等、その季節の花を必ず取り入れて一首にまとめられている。作者独自の工夫と味わいがある。

入選 「さくら」

蕾から花散りしきる桜の情景を作者なりの感情を込めて詠んでをり、風情がただよう。

入選 「庭の白」

歌の対象が庭に咲く白い花々で、その花を際立たせる為の必然の内容が一首の中に盛り込まれている。七首共に結句の納まりが良い。

入選 「点景」

○今に見る稲田の案山子朴訥になくはならぬ点景として

現在では珍しくなった稲田に立つ案山子である。その情景を見ての作者の感慨がこの一首を生んだ。郷愁の思いが下句の表現に深く込められている。

入選 「苔むす石に」

家を廃さねばならない作者の悲嘆の心情が、平明な表現の中に吐露されてをり読む者の心に響いて来るようだ。

入選 「祭」

○観衆のとよむ竿灯大技に抱く幼は身をかたくする

○舞い終えて社殿を降りし獅子頭つどう人らを八方に囃む

下句の具体的な表現が、上句の情景とうまく照応してをり巧みで鮮やかである。

入選 「湖底探査」

国鱒の絶滅した田沢湖の湖底探査という特殊な情景を詠んでいて異色な連作となっている。臨場感あふれる幾首もの歌や国鱒の復活を祈る歌など、感慨を深くして拝見した。

入選 「時の流れ」

私はこの作者の七首の歌に注目した。そして高く評価した。どの歌も写生が行きとどいてをり感覚も効いている。洗練された語句と表現力を使用して、手堅く一首に詠みあげている。この作者は叙情詩としての短歌を充分に理解し認識しているのだろう。

グリーン賞 「色」

若々しく、ういういしい感性が、にじみ出ている。この感性を大切にして短歌を作り続けて貰いたいと思う。

短歌誌「歩道」同人

歩道賞受賞

にかほ市広報歌壇選者

象潟町短歌会代表

俳句



表題に合う

七句を

岡部 いさむ

俳句を選するには、一に俳句の本質である五七五の諷詠を、季語を語る花鳥の有無、あるいは季語重ね、更に今回の募集要項のテーマは俳句の場合七句全体に対しての題名としており、これらを配慮して選考する。

最優秀賞「羽後天天」

羽州嶺の全貌あをき五月来る

羽後の地に絵巻なしたる踊りかな

野となりし真澄の道や女郎花

題名の「天天」は若く美しい、和らぐさま、

さかななさま、心や顔のかたちのおだやかでのびのびしているさまを言い、最初に題名が目を

惹いた。

出羽の国の別名の羽州の嶺の全貌が青々の五月来ると詠む。西馬音内の絵巻とする盆踊り、

菅江真澄の旅の地に女郎花が咲き誇る。七句全体が羽後絶賛を貰いて好感がもたれた。

奨励賞「後三年合戦」

拗れたる身内の戦弟切草

修羅の日の血飛沫天に実南天

兄に秘密を口外したために弟を切り殺したと伝える弟切草。戦で飛び散った血潮が天に赤々と実る南天と詠んで後三年の歴史に焦点を当てた。

同「永久の旅」

手入れせし妻なき庭の冬薔薇

妻と手をつないでみたき春の星

亡くなった妻の痛恨が語られている。庭には

妻の手入れの冬の薔薇が咲き、面影を薔薇に求め、春の星を見ながら手を繋いで見たい夢を追

う。

同「夏書」

夏書すや母の遺愛の端溪硯

良寛の臨書を連ね夏書とす

書道の名品としての端溪硯を使う母を偲び、

良寛の臨書は難しいと言われるが夏書として行

う先祖供養の信仰心の篤いことを伺わせる。

入選「保育園」

入園や泣く子笑ふ子むづかる子

入園はとにかく賑やかで、どの句からも仄々

とした保育園が浮き彫りである。

同「城址万緑」

河骨や武將ゆかりの手水鉢

千秋公園の一角宣庵と言う茶室がある。由緒

ある大きな手水鉢があり、池に河骨が咲く。

同「菩提寺」

底冷えのくぐもる会話位牌堂

菩提寺とする七句であるが、位牌堂では話し

する声も底冷えに似て内にこもってくぐもる。

同「久保田城」

空蟬や土塁を掴む大櫓

久保田城址の現在の県民会館の土手に残る

大櫓である。小さな空蟬と大樹の対比が効く。

同「光」

桃むいて白き光をほうばる日

食べようとして桃の皮を剥くと白い汁が滴

り、頬張る日の桃は俳句までも旨い。

同「母」

角巻の母の翼にくるまるる

母を追慕しての七句。どの句にも亡き母が偲

ばれる。母の翼が効いて母が活きる。

同「平和を祈る」

青田風無口なむらの戦死の碑

戦死者は無口である。青田の傍には墓の碑が

あり、戦後七十年の平和を祈る追憶が潜む。

同「払田の柵」

謎多き柵やロマンの風薫る

仙北にある払田柵は謎に満ちた柵跡として発

掘が行われ、まさにロマンを秘めた柵跡である。

同「参禅」

参禅の晴着とまとふ寒月光

参禅とは、座禅して禅を修行する、結跏趺坐

にあり、七句にそのものが彷彿とさせる。

同「蛭の詩」

初恋の君の手もとに蛭籠

蛭に統一した作品。仄々と蛭狩りや蛭との付

合いが見え、神秘的な力の光と若々しさが佳い。

同「稲の香」

稲の香に包まれ吾子に乳飲ます

どこかでみたような俳句であるが、田圃の畦

に座り、稲の香に包まれ乳飲み子に乳を与える。

グリーン賞「夏の恋」

入口の見えぬ世界や蜃気楼

蝉生まれ移り行く世の時を知る

ひと夏の恋を例えば林檎飴

蜃気楼には出入り口は見当たらないし、蝉が

生まれて移り行く世の中を知る。そして何より

夏の恋は林檎飴のようだと詠む。特に林檎は甘

酸っぱく、口中で溶ける淡い恋を描き佳かった。

グリーン賞は昨年三人、今年一人と少ない。

来年度は多くなることを期待する。

昨年より一組少なく八十四編、五十代まで六人、

六・七十代四十四人、八十代以降三十四人と世

相を反映し高齢者が多い。今後の課題である。

公益社団法人俳人協会・同秋田県支部会員

秋田市俳句人連盟会長

ぶりこ・明德・大正寺・俳句会主宰



選を終えて

木村 登 龍

今年度の応募数は八十四名の五八八句であった。選に当たっては三人の選者が、その評価にまったく一致することはなかったが、順位に多少の差はあっても、入賞候補の作品は概ね共通しており、良い作品は人に感動を与えることを実感させられた。

選にあたって目についたことは、無季語や誤字の多い句があること。必要外のルビや、季語のダブリの句があること。口語・文語が混在している句があること、等であった。

これ等の理由は、推敲不足によるものと考えられるので、投句に際しては十分留意し、これ等の課題を克服されるように強く要望したい。

さて、最優秀賞には「羽後天天」をいただいた。題名に凭れることもなく、その構成と一句としても独立して充分に鑑賞し得る一連である。句ごとに地域の特性を取り入れ、題名と七句の関連性が大変良く融合してそつが無く、佳句が続き格調の高い句群。どの句も完成度が高く、作

者の経歴の深さを想像することが出来た。

羽州嶺の全貌あをき五月来る。

羽後の地に絵巻なしたる踊りかな。

完璧な冬天家郷毅然たり。

奨励賞「後三年大合戦」では、文献史料によると、その惨状を「地獄のごとし」と伝えていている事からしても、関係氏族全てにおいて拗れや、権力・武力の限りを尽して争ったことが偲ばれる。この戦を経て「平泉の文化遺産」へと継承するものであるが、作者は歴史上の事実を忠実に纏めてそつが無く、七句を格調のある一連としている。

拗れたる身内の戦弟切草。

兵糧攻め折り重なりし杉落葉。

修羅の日の血飛沫天に実南天。

甲ひは稲田百枚古戰場。

奨励賞「永久の旅」は、重篤の奥様を、必死に看取り続けた甲斐もなく、永久の別れを迎えられた作者。苦渋生活に屈することなく、奥様への愛情や家族の絆を大切に、一句一句を切切と構成し、題名との関連性も良く融合して、心情が格調高くうたわれていることに、作者の人間性を垣間見ることが出来る。

病む妻に靴を揃へて菊日和。

秋時雨妻顔きて永久の旅。

手入れせし妻なき庭の冬薔薇。

亡き妻と語るひと時花の寺。

妻と手をつないでみたき春の星。

奨励賞「夏書」については、夏書は、夏安居中(夏季の九十日間)経文を書写し、心の修養や、供養などのために行うものとされるが、作者も日々心をこらして必死に取り組まれている姿がよく知れる。無の境地で夏書に専念する一日は尊い。

夏書すや母の遺愛の端溪硯。

夏書する一字一字の清らなり。

秋声のはやいづくより経納む。

なお、紙面の都合上入選作品には触れないが、奨励賞とは正に紙一重であった。

今年、青少年の投句において、将来性と今後一層の奮起に期待して「夏の恋」一編にグリーン賞を出せたことが、選者として喜びであった。次に、入選出来なかった作品の一句を。

杣小屋と見まがふ寓居小鳥来る。

息災と継続誓ふ初日記。

水張りし田の面に生氣満ち溢る。

かなかなの交互に降ろす夜の帳。

木洩日のやうな余生や石路の花。

また今回入賞を逸した方々も、その差はほんの少しなので、是非来年度に捲土重来を期して、今から御健吟下さることをお祈り致し筆を擱きたいと思う。

俳人協会秋田県支部副支部長

秋田県俳句懇話会副会長

「新雪」同人



森田 千枝子

独自性

今年度の応募者は八十四名。独自の視点で見つけられた素材をどう生かし料理されたのか、期待感を抱きながら読ませて頂いた。

最優秀賞「羽後天天」

連山を越え来し羽後の初茜

羽後の地に絵巻なしたる踊りかな

完璧な冬天家郷毅然たり

明治四十年、俳人河東碧梧桐が「初めて絵になる盆踊りをみた」と記している西馬音内盆踊

り。羽後の地がもたらす無窮の豊かさを広大なスケールで詠み上げた七句。「完璧な冬天」「家郷毅然」に作者の崇高な愛郷心、精神性が滲み出て強い感銘を覚えた。

奨励賞「後三年合戦」

拗れたる身内の戦弟切草

兵糧攻め折り重なりし杉落葉

清原家の内部分裂で骨肉の争いが繰り広げられた戦。史実の暗部を季語が柔らかに包む。

奨励賞「永久の旅」

車椅子押す手に触るる秋桜

妻と手をつないでみたき春の星

夫の手に触れたのは、たおやかに揺れる秋桜のような優しい妻の手。伝え切れない思いの手。咀嚼された言葉に深い哀感。

奨励賞「夏書」

夏書すや母の遺愛の端深硯

まなうらに亡き母置きし夏書かな

背筋をピンとし、ゆっくりと墨を磨る。亡母もまたこの安らぎの時間に身を置いたのである。今、生きている有り難さを夏書を通して母へ感謝する。余情が豊か。

入選「保育園」

てふてふや一人駆ければみな駆ける

臨場感に溢れ、駆け引きのない素直な表現。

入選「城址万緑」

御番所をすこし離れてえこの花

歴史を見守り、風景を知り尽くした作者の視点に確かな詩情。

入選「菩提寺」

風花や何も語らぬ父の塚

語らぬが故の教えは深い。風花の優しさが作者の生前の父に対するイメージを象り佳句。

入選「久保田城」

殿の馬洗ひし跡の大賀蓮

古のロマンの花、大賀蓮。殿の馬を洗ったという具象が時空を越えて物語を紡ぐ。

入選「光」

鈴虫の長きひげから星生まる

鈴虫の音色がひげの先からつると滑って星になる。作者に魔法がかかった瞬間である。

入選「母」

虫時雨追ひ書き沁むる母の文

親の本当の有り難さは亡くなってから。長い手紙も追伸一行が母の正文。

入選「平和を祈る」

戦跡の野にあらがわぬ雉ほろろ

反戦への独自の切り口。今年はおバマ大統領

が広島を訪れた歴史的記念の年。「野にあらがわぬ」措辞が巧み。

入選 「払田の柵」

復元の遺構も古ぶ蟬しくれ

軍事的拠点だった払田の柵。復元され尚も廃れゆく遺構が語るものとは。

入選 「参禅」

無心底字ばむ寒の杉木立

無心の境地は、果てのない厳寒の空にそびえ立つ杉木立。熟成された七句に作者の高い洞察力。座禅は空。

入選 「蛍の詩」

父刈りし馬草に朝の蛍かな

追懐の情をあつさりと表現。切り取った風景の朝の蛍に作者の豊かな詩心。

入選 「稲の香」

稲の香に生まれ吾子に乳飲ます

長閑な田園生活。生きるための乳を我が子に与える母の眼差しは深い慈愛に満ちている。

グリーン賞 「夏の恋」

ひと夏の恋を例えば林檎飴

「例えば」がこの句の鮮度を保つ。素材を縦横無尽に組み替えてみるのも面白いかと思う。感性豊かな作者の今後に期待したい。

秋田県現代俳句協会幹事

秋田県俳句懇話会幹事

「麦」同人 井川町

川柳



館岡 稲風

選後短評

入賞者の最優秀賞から入選までの十作品について寸評的な感想を述べることにいたします。

三名の選者の高得点を得た、最優秀賞の作品から順を追って入選作品まで触れてみましょう。

最優秀賞 「幾曲がり」

雨しとどど 逃れ切れない義理がある

勝つための汗がなかなか乾かない

幾曲がり 父の頑固が実を結ぶ

今までの優秀作品以上に味のある句だと思っ。人間の機微に迫り魅了する作品を見せてくれま

した。

奨励賞 「歳を重ねて」

人生の季節をきざむ風の音

若さという呪縛 きつちり切り捨てる

良寛の詩歌にこころ遊ばせる

もう人生の残り時間を重ねる歳になりましたでしょうか。残りの人生、良寛さまのように遊び心を大切に。

奨励賞 「至福どき」

至福どきほわーと過ごす春の午後

日捲りを捲れば時がゆるり行く

あるがまま偏屈じゃない惚けじゃない

人生、至福の境地で過ごせたら最高、でもそのように行動しても誰からも文句が出ないのはいささか物足りない。

奨励賞 「希望から天使へ」

ひまわりの笑い上戸に掴まった

汗拭いて凜と生き抜く茄子の花

風船に乗った種です希望付き

よく我慢すると先が見えてくると言う、実際には、試行錯誤の繰り返しであるが希望をもって凜と生き抜くことが大切である。

入選 「揺れる想い」

夏の日の花火の様な恋でした

背伸びして転んだ傷がまだ癒えぬ

そして秋愛は記憶の底で揺れ

この直接的な言い方には脱帽である。

入選 「再起の空」

忘却の彼方飛べない空がある

決意した心の灯り絶やすまい

ロマン抱き再起の空へ漕ぎだそう

あれこれと迷った末にようやく決心を固めた再起、もう後戻りはできないと自分に言い聞かせている。強い意志が読みとれる。

入選 「二人の城」

プロポーズ大きな傘になるつもり

汗積んだ二人の城があたたかい

真珠婚やがて空気を吸うように

微笑ましい限りである。見習ってみたらいかがです。

入選 「村の詩」

夢を追う干拓村のうたせ舟

亡き兄の村史に語る一ページ

何時の日に湖底のロマン語り逝く

夢を追って入植、並並ならぬ決意だと思ふ。客観的な視線に説得力がある。表題の「村の詩」も内容によくマッチしている。

入選 「輝く瞳」

キラキラの瞳はなぜか嘘が好き

ときめかし大空飛ばすホームラン

サザンクロス閃く冬の月明かり

野球のホームランとは限らない、実生活において

てもあの人がと思える人が、ホームランを放すことがある。

入選 「愛反芻」

弾まないボールをじつと待って 句

旬な娘の得体を知らぬ 魔性

愛反芻 グラスの中の回り道

時間も環境も整っているのに、なぜか行動に移れない。魔性という言葉葉にスイッチが欲しい。

全日本川柳協会常任幹事



選考にあたって

荒川 祥一郎

昨年より応募が13名多かったことに感謝いたします。事前審査の集計結果は三者三様でしたが、選考会では忌憚なく意見を交わし、厳正に

審査しました。

最優秀賞 幾曲がり

○雨しとど 逃れ切れない義理がある

○返す物 返して春の絵に溶ける

作品と体験とが重なり想いが広がる作品。親への感謝の念を抱く半生の時間軸を巧みに描写。

写。

奨励賞 歳を重ねて

○わが子にも涼しい距離を取っておく

○良寛の詩歌にこころ遊ばせる

全体のまとまりが良く三者とも評価。老いても自立し、今を楽しむ姿勢に共感。

奨励賞 至福どき

○至福どきほわーと過ぐす春の午後

○あるがまま偏屈じゃない惚けじゃない

漸く得た平穏という幸福感。力強さには欠けるがハーブティーのようにほっとする作品。

奨励賞 希望から天使へ

○汗拭いて凜と生き抜く茄子の花

○真っ白な雪洗われている決意

やさしい表現ながら余韻に前向きさが感じられ、心に溶け込む作品群。

入選 揺れる想い

○愛憎の深さを知っている鏡

夏の日の恋が秋へと移ろう中で揺れる心を、
水、鏡、風、雨などに託した表現に拍手。

入選 再起の空

○ロマン抱き再起の空へ漕ぎだそう

失意から飛び立とうとする心の綾を詠んだ作品。だが川柳が修身や道徳の教科書では面白くない。角度を変えはつとさせる表現を！

入選 二人の城

○真珠婚やがて空気を吸うように
力量ある作者と見る。まとまっていて安定感があるが、報告句で終わるのは惜しい。

入選 村の詩

○汗染みるへドロが足を離さない
干拓の村に賭する農への心意気を感じる。

入選 輝く瞳

一句一句には作者の視線と想いを感じるが、
題と作品全体を貫くものが欲しい。

入選 愛反芻

○弾まないボールをじっと待って 旬

比喻と巧みな措辞で現代詩的なイメージとり
ズム感に仕上げた小気味良い作品。だが「川柳
は五七五の定型詩である。この斬新な切り口は
残し、少しの推敲で定形を守るのでは。」と
の意見で最後まで討議。全作品の中でこの作品

だけが果敢に新しさに挑戦していた。字足らず
や破調を責めるより「あきたの文芸」に新風を
吹き込みたくて入選とした。

事前審査で各作品を5・4・3・2・0点と評価
したが、三者が共に評価したのは三作品のみ
だった。選者の個性もあろうが全体的に低調
だったためとも思う。この責任は私も含めた選
者にもあると思う。なぜなら応募者は選者にお
もねる。過去の入選作の傾向に従うからです。
また日常の指導者にも責任があると思う。秋田
の川柳をもっと前進させるためには、応募者を
うんぬんする前に選者や指導者がもっと広く、
もっと深く川柳を学び、川柳愛好者をリードす
べきでないかと感じた。

見渡すと全国のあちこちで個性的な川柳が
次々発表されている。ひとり秋田の川柳だけが
化石化するのではと危惧してしまう。読んで
「あ、そうですか」「その通りですね」と思う報
告句や何度も出会ったような表現、逆に単語の
積木のような作品も卒業したい。

守るだけでは衰退となる。攻めねばならぬ。
守るべきものと攻めるべきものを見極めねばな
らぬ。川柳は抵抗の文芸。心の叫びでもある。「王

道に非ずしてしかも妙義を述べる」という意外
性こそ川柳の本質であろう。秋田の川柳界が川
柳の本筋を邁進することを願いたい。

川柳グループ柳山事務局



明日に繋がる

川柳を

藤 咲子

去年まで頭を悩まし句を作っていた私です
が、この度選者として委嘱を受け、どんな作品
に出会えるのか不安と期待を持ちながら、作品
を丹念に読ませていただきました。

ただ私は「あきたの文芸」は文芸の戦いの場
であるとの認識の下に文芸である以上、誤字
脱字等はあるてはならないと考えていましたの
で、丁寧に辞典をひき選に入りました。が、あ
まりの誤字や送り仮名の誤りなどが多く驚きま
した。

でも皆様が真剣に取り組んでくださった事
もあり、私なりの評価をさせていただく事にし

ました。集計の結果として、三人の選者が協議を重ね決定しました。

最優秀賞「幾曲がり」

雨しとど 逃れ切れない義理がある

勝つための汗がなかなか乾かない

幾曲がり 父の頑固が実を結ぶ

ベテランの作品と思いますが、男の心情を上手に詠んでいて、読む人に説得力をもつて迫ってくるように感じました。

奨励賞「歳を重ねて」

人生の季節をきざむ風の音

若さという呪縛 きつちり切り捨てて

わが子にも涼しい距離を取っておく

選者三人の合点で二位となりました。人生における斜陽の想い、年齢、気力、体力などは作者の実感としてすんなり表題に入ってきます。ただ私個人的には、若さという呪縛は捨てずについて欲しいと思います。

奨励賞「至福どき」

至福どきほわーと過ごす春の午後

ほうらねつ 笑顔絶やさぬ君がいい

六十年 君と過した時間だよ

なんともいえない素朴で落ち着いた温かさのある作品で、心地よく心にスッと入ってきます

した。飾らない作風がいい雰囲気醸しているのかもしれない。

奨励賞「希望から天使へ」

ひまわりの笑い上戸に掴まった

芋の芽が明日を探して突き上げる

滝壺の虹が天使を連れて来る

なんとなく新鮮味を感じました。滝壺の虹が素敵なフレーズです。

入選「揺れる想い」

満たされてそれでも寒い風を抱く

雨は無色で過去の私を流し去る

ドラマ風の仕立てが良く、表題に合っていると思いました。

入選「再起の空」

生かされている身役目はきつとある

挫折さえ味となるのを待つ夜明け

しなやかなタッチの作品、やや表現の乏しさはあるが、今後を期待したいと思います。

入選「二人の城」

ときめきのページそろそろ鈍化する

定位置を守り続けるくすり指

手慣れた手法であり、ベテランの方だと思えますが、少しずつ手法や視点を変えていくことが次への途だと思えます。

入選「村の詩」

夢を追う千拓村のうたせ舟

何時の日に湖底のロマン語り逝く

生真面目に村を思う気持ちがあふれていきます。やや粗削りなところが見られますが、これから大いに期待しています。

入選「輝く瞳」

花咲かずピンクでなくていいですか

漆黒のトゲ押しとおす冬の薔薇

意表を突く表現はいいのですが、作品全体のバランスに配慮して欲しいと思いました。

入選「愛反芻」

幸せに背伸びしたくてフライング

愛反芻 グラスの中の回り道

一字あけが多く、また破調句にもなっていますが、ドキツとする新鮮さが魅力でした。

川柳銀の笛吟社 副主幹

エッセイ



柴山 芳隆

書き手の

おもかげ

英文学者で文芸評論家でもあった厨川白村は、「エッセイにとつて何よりも大切な要件は筆者が自分の個人的人格的色彩を濃厚に出すことである」と述べ、「筆者その人のおもかげが浮き出して居なくては面白くない」と言い替えている。玩味すべきである。

今年、残念ながら最優秀賞が出ず、四編が奨励賞となった。全体的にあと一步という応募状況の反映なのであろう。

まず、受賞作について触れたい。「明日に見たい夢」は、生老病死について、改めて読者に考えさせてくれる。仏教で言う輪廻転生のな雰囲気もあるが、その中で、明日を見ている点が良い。あまり感情を入れず、淡々という趣で客観的に叙述しようとしている姿勢もよかった。〈疎遠放題〉など、漢語の無理な使い方は改善

すべきである。「五月の散歩道」は、描写がしっかりしていて安定感があるし、擬音語にも工夫が見られる。末尾に添えた、全体のまとめのような短歌は、この作品の中では生きているとは言い難い。「終活の旅」には、旅をすることが終活につながると考えている作者が、ジャワ島の遺跡を訪れた折の感慨が述べられている。『奥の細道』に重ねながら叙述しているのはよいが、芭蕉の文学のなかで占める旅の位置づけといった点ではまだ底が浅いと言わざるを得ない。「マルのこと」は、小説風の運びでもおもしろい。ただ、ストーリーの展開中心で終わっているのは残念である。文芸作品としての質を高めるにはもう少し描写が必要と心得てほしい。

惜しくも賞は逸したものの、今後に期待させる作品も少なくなかった。「天空からの贈りもの」は、脳梗塞を患って右半分のマ痺と言語障害を抱えてしまった作者が、懸命な努力によって職場復帰するまでの経緯を綴った物語風の作品である。人生や社会に対する姿勢が前向きで、読んだ人に元気や勇気を与えてくれる。末尾の三行に代表されるように、ややスローガンの印象を与えるところは文芸作品としては欠点である。「ちよっとした贅沢」は、亡き夫の七回忌

を機に、亡夫の入院していた郡山市のがん病院を訪れたことにまつわる話である。かつての伴侶に対する思いが行間から滲み出ている点は評価できる。ただ、旅の叙述に追われ過ぎていて情感の深まりに欠ける憾みが遺った。「ペルセウス流星群の夜」は、星々のまたたく夜空の情景描写がとてよい。しかし、配偶者が恋人の密会場所を探しているらしい不審な車に關わる部分は全体の興趣を少なからず損ねている。星空だけで一編を成すべきであった。「母の励ましと孫娘」や「鳥海山と飛鳥」等もやはり構成上の問題を内包している。前半と後半のつながりやバランスがよくないのである。

「山河こそ我が師なり」と「私の決断（ゆずり葉に寄せて）」は趣向がおもしろかった。ただし、前者は懐旧談で終わっており、後者は原稿用紙の使い方を含む表記面でまだ課題が残る。小説風の書き出しの「不調和な旅人」は、エッセイとしてはやや作り過ぎであろう。「推測を愉しむ」は、文題どおりの愉しい推測だが説得力が不足している。「めぐり逢いて」を読むと、本人が感動していることは理解できるが、その感動が読者にまでは伝わってこないし、「テレビの話」「紫のよろけ縞のセル」「二日を築し

く」の三編は、作品世界の伸びや広がりにはさか欠けるといふ点で共通している。「外交の妙」は、立ち位置の明確な意見文である。広い意味のエッセイではあるが、文芸コンクールのような場では誰も賛否の意思表示ができない。そういう意味では、投稿先について一考の余地があるかもしれない。

紙数も尽きたが、ここで取り上げられなかった作品のほとんどは作者の色合いがあまり出ないか、作文の基本がまだ整っていないかである。文章講座のような企画があつたらぜひ一度受講してみるようお勧めしたい。

選考を終えて

佐々木 義 幸



奨励賞「五月の散歩道」は、手術後のリハビリテーションを兼ねたウォーキングを始めてから一年がたった作者の、歩きながらの様々な出会いや思索が淡々と綴られている。散歩道で出会った人々や景物などによって触発さ

れた、来し方や集落の現状への思い、若い人への期待などが嫌みなく書かれ、滋味ある作品に仕上がっている。

初読時は後半に改行が多いのがやや気になったが、読み返してみると、改行が視線の移動や思考の切り替わりに対応しているのでむしろ効果的といえる。末尾の短歌は必要であつたかどうか。

奨励賞「終活の旅」は、年末に旅のプランを立てて春を待つ心情や旅にかける自らの思いを、芭蕉の旅とも重ね合わせながら綴り、旅と人生や、自分の中を流れる時間というものを考えさせてくれる作品である。

まことに、哲学者三木清が、

人生について我々が抱く感情は、我々が旅において持つ感情と相通するものがある。

(「旅について」)

と、『人生論ノート』に記しているように、旅は私どもの心に特別な感情をもたらす。

作者自身の体験としては、ポロブドゥールを訪れ、学生の日に見た仏像との現地での再会を果たした美しいエピソードが中心であるが、芭

蕉の旅への言及が分量としては多い。この点の整理と自分の思いをさらに掘り下げることができていれば、一層深みのある作品になっていたのではないかと惜しまれる。

奨励賞「明日に見たい夢」は、友人との疎遠であつた時間の長さ、再会後に知った、友人の肉親との死別、自らの肉親との別れ、さらには若い人が病気で亡くなることのない未来や生老病死の循環に思いを致す。

一読、生硬でこねない表現が目につく。

長らく疎遠放題の二人の間に電話で済まされない用件が転がっているはずはなく、唐突感を抱きつつも再会は待たれた。

息を引き取った瞬間、悲しみよりも先にこれでようやく楽になったと胸を撫でたことがかすかな咎として網膜に焼き付いている。

といった部分である。

しかし、肉親の死に関するだけにややもすれば湿った情緒的な表現になりがちなどころを、この硬質な文体が救っている。これがこの作者の持ち味なのであろう。

奨励賞「マルのこと」は、飼い主と生き物との不思議ともいえる関わりを、いくつかのエピソードによって構成した佳品である。「マル」と呼ばれた歴代のいろいろな動物たちのうち、子犬の頃から育てた犬の話を中心に据え、心理的に抜き差しならないところまで追い詰められた次男の立ち直りと、それに符節を合わせるようにいなくなった老犬の話を軸にした、エピソードの配置がいい。ペットのかわいらしさやそれへの愛情に寄りかかりすぎていないところも好感が持てる。結びの一文も効果を上げている。

最後に応募作品全体を通じて気になる点があったので、二つ提言したい。

作者一人一人の人生経験は、かけがえない貴重なものであることはいうまでもない。しかし、一篇の文芸作品の材料とするのならば、どのエピソードにどれだけの重みを持たせるか、時には思い切って省略できないかなど、よく吟味してみるべきである。

また、段落や内容のまとまりをもっと意識してはいかがだろう。意味の不明な改行や行空けの多い作品が散見されたからである。



選評

羽田朝子

エッセイ部門には個人の人生経験や思い出、紀行文、社会問題に至るまで様々な題材の作品が寄せられ、テーマも地域の風土、家族愛、友情、生老病死など多岐にわたりました。その背後には様々な人生を歩んできた応募者のみなさんの姿が浮かびあがり、すべての方に賞を贈りたい気持ちで目を通しました。

私が選考の基準としたのは以下の二点です。まず一つは、文章の明確さです。的確な表現と構成によって第三者が読んでも意味が通じ理解できるものであるかを最低条件としました。そして二つ目は、作品において独自の視点や思索が表現されており、はっと気付かされるものがあるかということです。

「終活の旅」(奨励賞)は、終活の旅としてポロブドゥール遺跡に向かう「私」の様々な心境——旅への衝動、その背後にある焦燥感が描かれています。「私」は時空を超えて芭蕉の心境に思いを致しており、江戸時代の芭蕉と現代に

生きる「私」とが交錯するユニークな構成になっています。とくに芭蕉の旅とポロブドゥールの情景の鮮やかな対照には心をつかまれました。ただし、作品において芭蕉の存在があまりに大きく、「私」がやや存在感を失っている印象であるのが残念でした。

「五月の散歩道」(奨励賞)は、リハビリのためにウォーキングを始めた「私」の何気ない日常を切り取ったものになっています。何より構成が面白く、ウォーキングの最中に「私」の目に映る情景や頭に浮かんで消えていく思索をテンポよく描写しています。動くことも困難だった「私」が再生を果たし、日常の些細な事象にも喜びを見出して人生を大切に生きているさまが窺えるものになっています。背景の新緑の風景と相俟って爽やかな気持ちにさせられました。

「明日に见たい夢」(奨励賞)は、旧友の娘さんの死についてのエピソードを中心に、「私の死にまつわる記憶や思索が淡々と述べられていきます。結びでは旧友から手渡された御統(みすまると)から「永遠の循環」を連想しており、輪廻転生にも似た「私」の死生観が示されています。ただこの直前の段落では高齢化社会にお

ける医療の発展に対する希望が述べられており、ここから話しが飛ぶのが少し唐突な印象をうけました。この二つを結ぶ思索を丁寧を描く必要があったと思います。

「マルのこと」（奨励賞）は、ペットの犬「マル」を通じ、「私」の家族史——母の死、子供たちの成長と巣立ち、次男のうつ病と再生——を描いています。とくに次男に関する描写には独特なユーモアが含まれており、全体的に軽妙なタッチに仕上がっています。「私」が次男の父なのか母なのか明らかにされておらず、一部情景を思い浮かべにくくなっていました。淡々とした筆致のなかに「私」の家族愛に満ちたまなざしが表現されており、温かな気持ちにさせられました。

選考からは外れてしまいましたが、私にとって印象深い作品だった「ばんばの花」を取り上げたいと思います。この作品は、「私」の曾父母である「ばんば（婆）」の思い出を、子供の頃の視点で描写したものです。厳しくも思いやりのあるばんばを芍薬の花に譬え、厳しい自然に育まれた力強さに満ちた人柄や生き方を鮮烈に描きだしています。よく練られた構成や迫力のある筆致にも惹きつけられました。なによ

り作品には秋田の風土性が色濃く反映されており、秋田の文芸というにふさわしい作品であると思います。

最後に選考に当って気づいたことを挙げておきたいと思います。ほとんどの作品が自らの経験に基づくものでしたが、なかには言葉が足りないがために、状況をよく把握できないものがありました。読み手は自分を知らない第三者であることを念頭におき、独りよがりな表現に陥っていないか留意しながら作品を書くことをお勧めします。

あきた県民文化芸術祭2016「あきたの文芸」応募状況

1 部門別（応募作品数）

	小説・評論	詩	短歌	俳句	川柳	エッセイ	総数
28年度	9	32	72	84	57	24	278
27年度	12	32	56	85	44	31	260
26年度	15	37	71	84	50	21	278
25年度	16	41	73	87	61	20	298
24年度	14	44	91	85	62	17	313

2 男女別

	小説・評論		詩		短歌		俳句		川柳			エッセイ		総数	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	不明	男	女	男	女
28年度	6	3	11	21	35	37	54	30	38	19	—	12	12	156	122
27年度	5	7	14	18	26	30	46	39	28	16	—	15	16	134	126
26年度	9	6	15	22	34	37	53	31	32	18	—	10	11	153	125
25年度	11	5	14	27	31	42	52	35	40	20	1	11	9	159	138
24年度	9	5	16	28	38	53	51	34	41	21	—	7	10	162	151

3 年代別

	総数	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	90代	不明
28年度	278	6	7	8	6	11	59	98	73	10	0
27年度	260	13	3	8	7	12	61	96	57	3	0
26年度	278	8	4	8	8	17	62	109	58	4	0
25年度	298	13	5	11	3	17	75	117	47	7	3
24年度	313	20	5	10	4	22	78	116	54	2	2

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	90代
小説・評論	0	1	1	0	0	4	3	0	0
詩	3	3	2	2	5	7	8	1	1
短歌	3	0	2	0	2	10	28	22	5
俳句	0	1	2	2	1	16	28	33	1
川柳	0	2	1	0	2	13	23	13	3
エッセイ	0	0	0	2	1	9	8	4	0

4 応募の経験（作品数）

	小説・評論	詩	短歌	俳句	川柳	エッセイ	総数
再	6	23	48	66	38	15	196
新	2	9	24	18	19	9	81
不明	1	0	0	0	0	0	1
計	9	32	72	84	57	24	278

再・・・以前にも応募したことがある方

新・・・今回初めて応募された方

5 月別応募数

6月	7月	8月	計
51	43	184	278

あきたの文芸 昨年度の入賞者と作品名（入選・グリーン賞を除く）

第四十八集（平成二十七年年度） 応募二百六十作品

・小説・評論部門

奨励賞 佐和島 ゆら「ナメクジと七色の羽の鳥」

奨励賞 藤田 みち「ふるさとの肖像」

・詩部門

最優秀賞 十田 撓子「もがり殯」

奨励賞 小林 康子「さくら」

奨励賞 佐藤 清助「赤卵」

・短歌部門

奨励賞 佐藤 榮悦「川」

奨励賞 三浦 善隆「職人の日々」

奨励賞 塚本 佐市「朝夕抄」

・俳句部門

最優秀賞 塚本 佐市「石山抄」

奨励賞 三浦 静佳「孟蘭盆会」

奨励賞 宮本 秀峰「天鷲村」

奨励賞 高橋 遙「蔵」

・川柳部門

最優秀賞 藤 咲子「花の降る街」

奨励賞 石井 トモ子「青い空」

奨励賞 佐藤 ちずる「忘却の中で」

・エッセイ部門

最優秀賞 佐々木 真知子「緑色の時」

奨励賞 豊島 香織「左に曲がって」

奨励賞 坂本 愛子「父の外套」

奨励賞 石山 敦子「マリア観音」

編集後記

◎ 平成二十八年年度あきた県民文化芸術祭
2016「あきたの文芸」入賞作品集「あき
たの文芸第四十九集」を刊行しました。

この作品集には、十六歳から九十四歳まで
の応募二百七十八作品より、最優秀賞五作品、
奨励賞十六作品、入選三十三作品、二十五歳
以下の文芸活動を応援するグリーン賞四作
品、計五十八作品を掲載しております。

◎ この事業は、あきた県民文化芸術祭
2016の一環として実施しております。応
募いただいた皆様をはじめ、広報協力をして
くださった文芸団体や各市町村、報道機関、
図書館などの施設、さらには、事前審査から
選考・校正まで多大なる御協力をいただいた
選考委員の皆様には深く感謝申し上げます。

◎ 「あきたの文芸」は、これからもより読み
やすく親しみやすい郷土を代表する文芸誌と
して、一層充実させていきたいと思っております。

あきたの文芸第四十九集

あきた県民文化芸術祭2016

「あきたの文芸」入賞作品集

平成二十八年十一月十八日

発行・編集

秋田県

(観光文化スポーツ部文化振興課

電話〇一八―八六〇―一五三〇)

共催 一般社団法人秋田県芸術文化協会

秋田県教育委員会

表紙デザイン・挿絵 山本丈志

印刷・製本 株式会社 塚田美術印刷

あ
の
光
を
追
い
越
そ
う
。

あ
の
雲
を
追
い
抜
こ
う
、

駆
け
上
が
り
、

頂
き
を
目
指
し
て

文化を
する
旅 ▶▶▶
ブンカ
の旅は
おわら
ない！



あきた県民文化芸術祭 2016

平成 28 年 11 月
発行・秋田県
非売品

photo: studio y.n. 2016 © bumbun.akita
design: office ttt 2016 © araya.jp